

纏向学研究センター研究紀要

纏向学研究

—第2号—

2014

桜井市纏向学研究センター

Research Center for Makimukugaku, Sakurai City.

纏向学研究センター研究紀要

纏向学研究

—第2号—

2014

桜井市纏向学研究センター

Research Center for Makimukugaku, Sakurai City.

序

桜井市縄向学研究センターの研究紀要である『縄向学研究』第2号を刊行する。

当研究センターが正式に発足して二年目を迎えた。この間、石塚古墳の報告書の作成、辻地区大形建物群周縁部の発掘調査や、東京よみうりホールでの「縄向出現」フォーラム、市立図書館での縄向学セミナー、縄向考古学講座、ホームページの開設等々、普及・啓発のための幾多のイベントも定着しつつある。民間組織での縄向学講座や講演会にも積極的に企画・参加した甲斐もあって、「縄向学」という試みは、関西圏を超えて少しずつではあるが浸透しはじめたように感じるのは我田引水だろうか。

そうしたなか、今年度最大の成果は、太田地区の旧縄向小学校跡地と辻地区の大形建物群の一部が、国の文化審議会の答申を受けて史跡に指定されたことであろう。縄向遺跡の保存と活用の途はようやく新たな段階を迎えたと言っても過言ではない。市長さんはじめ関係各位には満腔の敬意と感謝を表したい。

しかし行政や市民はともすると、こうした国のお墨付きや「発見」という考古学の成果がそのまま地域やこの国の歴史を再現し、語りかけてくるものだと錯覚することが多い。それによって町づくりや地域振興の起爆剤が得られたかに誤解することが多い。目前の「発見」が真の「活用」に給されるためには、じつに地道で精緻な「研究」を介在させないことには実現不可能であるという自明の道理は常に発信し続けて行かなくてはならない。「縄向学」を構築することの目的と本領はそこにこそあると思う。

この『研究紀要』は、まさにそうした当研究センターの基幹をなすものである。今号は、2名の常勤所員の他に、3名の共同研究員、4名もの外部研究者が玉稿を寄せてくださった。どれも着実な研究成果の数々で、所長としてもまた一つの責任を果たしたものと安堵している。この研究成果が多少なりとも学界に寄与し、かつ「縄向学」構築の礎になることこそ期して序としたい。

平成 26 年 3 月 20 日

桜井市縄向学研究センター

所 長 寺 澤 薫

目 次

序

古代ケヒ神の基礎的研究	堀 大介	1
-------------	------	---

突線鈕式銅鐸破碎プロセスの金属工学的検討とその考古学的意義	福永伸哉・近藤勝義	21
-------------------------------	-----------	----

纏向遺跡における空間変遷情報の可視化	児玉駿介	33
--------------------	------	----

纏向遺跡出土の巴形石製品について	森 暢郎	49
------------------	------	----

纏向遺跡出土の巴形石製品に接して	北條芳隆	59
------------------	------	----

奈良県大淀町佐名伝 某家所蔵銅鐸の調査	橋本輝彦・奥田 尚・奥山誠義	73
---------------------	----------------	----

編集後記

古代ケヒ神の基礎的研究

堀 大 介

目 次

I. はじめに	3
II. ケヒ神の諸性格	3
III. 古墳時代敦賀の考古学的検討	6
IV. 角鹿の塩の考古学的検討	10
V. ケヒ神の成立と展開	13
VI. おわりに	15

論文要旨

福井県敦賀市に鎮座するケヒ神は、『延喜式神名帳』では越前国敦賀郡の筆頭で、古代以来北陸総鎮守として重要な地位を占め、朝廷から厚遇を受けていた。その由緒は記紀にあり、神功皇后伝説をはじめ、ケヒ神との名易えや呪いをかけ忘れた角鹿の塩などの説話が知られる。こうした記述にもとづくと、ケヒ神には海神・航海神・食神・交換・武神・渡来神などの性格が認められる。こうした重層性がどのような過程で形成されたかを、古墳時代の敦賀及びその周辺地域の考古資料にもとづいて検討した。

まず敦賀の古墳時代の首長墓について、従来の研究を見直し中期古墳の途絶を明らかにし、その要因を上中古墳群の被葬者の影響と考えた。6世紀中葉以降の群集墳の展開はミヤケ設置と関係し、王直営の軍事基地として整備された敦賀津は、難波津につながる南北交通網の一環に位置づけられた。また、6世紀後葉における若狭の円墳化をミヤケ設置による王権の直接的な介入ととらえ、敦賀でも製塩土器副葬の古墳が出現することから、敦賀津が塩などの集散地として機能した。若狭立国前の若狭湾沿岸一帯が角鹿と称していたことから、のちの若狭の塩が角鹿の塩として認識されたのだろう。

こうした見解をもとにケヒ神の重層性を考えると、まず潟湖の存在から海神と海上交通の守護も含めた航海神としての性格が前提にある。次に、朝鮮半島系の遺物の中心時期の上限が5世紀前・中葉にあるので、敦賀津が大陸の玄関口として発達したことを踏まえると、渡来神の性格の付加はその時期とみたい。武神の性格は6世紀前葉の向出山1号墳と関係し、対外的な関係から敦賀津が軍港として重視された結果と考えた。そしてミヤケ設置により王権主導のもとで敦賀が食などの集散地として位置づけられ、最終的に食神の性格が加わることになる。名と魚の交換と理解した名易えや角鹿の塩などの説話は5世紀ではなく、6世紀後葉以降の社会状況が反映したものと理解した。

堀 大介（ほり だいすけ）

越前町教育委員会学芸員

古代ケヒ神の基礎的研究

堀 大 介

I. はじめに

氣比神宮は福井県敦賀市曙町に鎮座する越前一宮で、祭神は伊奢沙別命・仲哀天皇・神功皇后・日本武尊・応神天皇・玉妃命・武内宿禰命の七座である。『延喜式神名帳』では敦賀郡の筆頭として「氣比神社七座並名神大」とあり、古代以来ケヒ神は重要な地位を有していた。『新抄格勅符抄』『大同元年牒』に、従三位の封戸料の200戸が施入された天平3年(731)の記録がある。その解釈から国内最初の神階授与で、その神階の高さは破格といえる¹⁾。また『続日本紀』宝亀元年(770)8月条に、伊勢・若狭比古・八幡・氣多の神とともに朝廷から幣帛を奉られ、全国の著名な神としても名を連ねる。その後神階は昇叙し、寛平5年(893)までに畿外最高位の正一位勲一等に至る。北陸総鎮守としての位置づけを考えると、いかに朝廷から破格の待遇を受けたかがわかる。

そのケヒ神の由緒については『古事記』『日本書紀』の説話で詳細に語られる。ケヒは即位後の仲哀天皇の行宮の名であり、神功皇后の三韓征伐の出発点として知られる。一連の戦いを終えた応神の禊ぎの場であり、ケヒ神と名易えがおこなわれた地でもある。ケヒの多数の神名は複雑な歴史性を思わせるし、大神として記載されるのも殊遇の証である。その後のケヒ神の厚遇は、やはり記紀の内容によるところが大きい。

そこで本稿では、ケヒ神にまつわる記紀の謎めいた説話と多くの神名からその性格を抽出し、名易え説話の舞台となる敦賀とその周辺地域の古墳や副葬品、製塩遺跡などを考古学的に検討し、その諸性格がどういった過程で形成されるに至ったのか、また高い神階の理由はなににもとづくものか、当時の考古学的事象が説話に反映されたかの有無を論じたい。朝廷による叙階や奉幣は、地方の奉斎神が中央の神階に組み入れられていった過程

であり、そこには王権の政治的な動向の反映が認められるので、王権との地域神との関係性も併せて論じたい。

II. ケヒ神の諸性格

(1) 史料におけるケヒ神

『古事記』での記述は1か所のみで、以下の通りである。

A 故、建内宿禰命、其の太子を率て、禊せむと為て、淡海及若狭国を経歴し時、高志の前の角鹿に仮宮を造りて坐さしめき。爾に其地に坐す伊奢沙和氣大神の命、夜の夢に見えて云りたまひしく、「吾が名を御子の御名に易^かへまく欲し。」とのりたまひき。爾に言^かきて白ししく、「恐し、命の隨に易へし奉らむ。」とまをせば、亦其の神詔りたまひしく、「明日の旦、浜に幸でますべし。名を易へし幣献らむ。」とのりたまひき。故、其の旦浜に幸行でましし時、鼻毀りし入鹿魚、既に一浦に依れり。是に御子、神に白さしめて云りたまひしく、「我に御食^なの魚給へり。」とのりたまひき。故、亦其の御名^なを称へて、御食津大神と号けき。故、今に氣比大神と謂ふ。亦其の入鹿魚の鼻の血臭かりき。故、其の浦を号けて血浦と謂ひき。今は都奴賀と謂ふ。

仲哀天皇段

Aは対話形式による応神とケヒ大神の名易え説話である。神功皇后は新羅の遠征を終え、忍熊王の叛乱を鎮めたのち、建内宿禰命は太子(応神)を連れて禊をするために、近江・若狭を経て越前にいたり角鹿に仮宮を造った。伊奢沙和氣大神が夢に現れ、みずからの名と御子の名を易えよと告げ、皇子もそれを承知した。お告げにしたがい、翌朝、浜に出てみると、名易えのしるしとして鼻の傷ついた入鹿魚が寄りついていた。食料の魚を賜ったと御子は述べ、神の名を御食津大神と名づけた。今に

気比大神という。また入鹿魚の血が臭かったので、その浦を血浦といい、今に都奴賀（角鹿）という。

『日本書紀』での記述は3か所で、以下に時系列で取り上げる。

B 一に云はく、御間城天皇の世に、額に角有ひたる人、一の船に乗りて、越国の筥飯浦と泊れり。故、其処を号けて角鹿と曰ふ。問ひて曰はく、「何の国の人ぞ」といふ。対へて曰さく、「意富加羅国の王の子、名は都怒我阿羅斯等。亦の名は干斯岐阿利叱智干岐と曰ふ。伝に日本国に聖皇有すと聞りて、帰化く。」 垂仁天皇2年是歳条

C 二月の癸未の朔戊子に、角鹿に幸す。即ち行宮を興てて居します。是を筥飯宮と謂す。

仲哀天皇2年2月条

D 十三年の春二月の丁巳の朔甲子に、武内宿禰に命せて、太子に従ひて角鹿の筥飯大神を拝みまつらしむ。

神功皇后摂政13年2月条

E 初め天皇在孕れたまひて、天神地祇、三韓を授けたまへり。既に産れませるときに、宍、腕の上に生ひたり。其の形、軀の如し。是、皇太后の雄しき装したまひて軀を負きたまへるに肖えたまへり。肖、此を阿叡と云ふ。故、其の名を称えて誉田天皇と謂す。上古の時俗、軀を号ひて褒武多と謂ふ。一に云はく、初め天皇、太子と為りて、越国に行して、角鹿の筥飯大神に拝祭みたてまつりたまふ。時に大神と太子と名を相易へたまふ。故、大神を号けて、去来紗別神と曰す。太子をば誉田別尊を名くといふ。然らば大神の本の名を誉田別神、太子の元の名を去来紗別尊と謂すべし。然れども見ゆる所無くして、未だ詳ならず。 応神天皇即位前紀

F 越前国司、白蛾献れり。戊午に詔して曰はく、「白蛾を角鹿郡の浦上の浜に獲たり。故、筥飯神に二十戸を増封し、前に通す」とのたまふ。

持統天皇6年（692）9月条

Dはケヒ神最初の記述で、神功皇后が征韓ののち太子（応神）を武内宿禰とともに遣わし、参拝せしめたとある。Eでは応神の身体的特徴と名前の由来が語られる。その「一云」としてDの内容に触れ、名易えの内容が続く。太子の元の名を去来紗別、大神のそれを誉田別神とするが、両者の関係は具体的に語られず、その編纂者は「未詳」

の態度をとる。それ以後のケヒ神の記録は7世紀末まで下がる。Fは浜で白蛾が獲れたことへの吉祥として20戸を増封した内容である。増封とあるのでそれに先立って封戸が与えられていたのだろうが、封戸制の成立は7世紀後葉とされているので、それ以後のこととみられる²⁾。

つまり、ケヒ神は仲哀・神功・応神紀と持統紀のみで、その間は登場しない。神名以外のケヒはBの海岸名とCの行宮名だけである。崇神朝とされるBは渡来人来航の最初の史料で、角鹿の地名由来が語られる。ツヌガアラシトは最終的に比売語曾社と関係していく。そもそも比売語曾の女神はアメノヒボコ説話で語られるもので、ツヌガアラシト説話の後半部は同じところに由来している。

アメノヒボコについては、その子孫の田道間守が常世国に遣わされたことが記紀の垂仁朝に記されるので、翌3年に新羅王子のアメノヒボコが神宝を持って但馬国に渡来した関係から、『日本書紀』では前段階の垂仁天皇2年にその渡来を語る必要があったので、Bは意図的な挿入と考えられる。いっぽう『古事記』では応神天皇段に出てくるが、神功皇后の母方がアメノヒボコの系譜に属することを述べる必要があったとする³⁾。

（2）奈良・平安時代のケヒ神

次に奈良時代である。『続日本紀』では2か所で、以下の通りである。

G 神祇員外少史正七位上中臣葛野連飯麻呂を遣して、越前国気比神、能登国気多神に幣帛を奉らしむ。

宝亀元年（770）8月条

H 始めて越前国気比神宮司を置き、従八位官に准ず。

宝亀7年（776）9月条

奈良時代には「気比」と表記される。以後の史料をみても『日本後紀』延暦23年（804）6月条の越前国気比神社、『日本後紀』大同4年（809）閏2月条の越前国気比神、『続日本後紀』承和2年（835）2月条の越前国正三位勲一等気比大神、『続日本後紀』承和6年（839）2月条の越前国気比大神宮、『続日本後紀』承和6年（839）8月条の越前国気比神、『続日本後紀』承和6年（839）12月条の越前国正三位勲一等気比大神とあり、やはり「気比」と表記される。

このように奈良・平安時代は気比神あるいは気比大神としか出てこないが、記紀では『古事記』だけが「気比」

と表記し、『日本書紀』は「筥飯」に統一されている。ひとつ言えるのは記紀での神名が多様で、本来の神名を菅田別神とする『日本書紀』の見解を除けば、ケヒ・イザサワケ・ミケツの3種である。また神名のあとに、仲哀・神功・応神の説話と835年・839年が「大神」、692年から809年までが「神」とつく。平安前期の「大神」とあるのは神階昇叙と関係するだろう。仲哀・神功・応神の説話が「大神」と扱われたのに比べ、692年では「神」一字のみである。やはり応神天皇の神聖性を高めるうえで、それと関係の深いケヒ神を殊遇する必要性があったのだろう。

(3) ケヒ神の諸性格

まずはケヒ神の性格を立地の視点で考える。日本海沿岸のほぼ中央に位置する敦賀は、背後の琵琶湖水運と連絡して京畿に近く、交通上の恵まれた場所にある。『延喜式』によると、北陸諸国の官物は敦賀津に回漕され、琵琶湖の水運を利用して畿内へ送られたことから、北陸道への入口として重要な位置を占め、越国の集散地として位置づけられる。とくにケヒ神の鎮座地付近には都と北陸諸国を結ぶ北陸官道が通ることから、海陸交通の要衝を扼する神として崇敬された。

また敦賀は、意富加羅国の王子、都怒我阿羅斯等の来着記事があり、早くから対外的な門戸として認識されていた。のちに渤海国使を迎える松原客(駅)館が置かれ、大陸文化の受容の玄関口として重視されるようになった。敦賀津は潟湖を利用した天然の良港であるので、もとは在地の海人族によって信仰された土俗的な海神すなわち航海の神霊であったと考えられる。なお航海守護神としての姿は、未着の遣唐使船の無事帰還を祈り摂津住吉神とともに奉幣を受けた、『続日本後紀』承和六年(839)8月条の記事にあらわれている。

次にケヒの名から考える。筥とは飯または衣服など入れる四角な箱の意味であるから、筥飯とは箱のなかの飯のことを示している。ケヒの音に対する当て字ととれるが、『万葉集』巻3・256にある淡路島西岸地の海を「飼飯の海」とする見解を考慮に入れ⁴⁾、食^けの^ひ霊とみる本居宣長の見解を採用しても、食神の性格がうかがえる⁵⁾。また、ケヒと関係の深い越前二宮劔神社の『劔大明神縁起』では、ケヒ神は筥に入った黒飯の荒魂とあり、『氣比宮社記』

でも保食神と称された。

こうした食物を神格化した一面をもつケヒ神は、御食津大神の神名と通じ、その神名は応神がケヒ大神に「御食の魚」を奉ったことに由来する。その姿が外来の皇子(神)に対する土地神の食物供進の姿をとるので、地方首長の王権への服属儀礼の反映をみる見解があるが⁶⁾、また名易え自体が応神にとっての成人式を意味するとの見解もある⁷⁾。その説話については阪下圭八が合理的に解釈しており、「魚」と「名」というナ同士のカヘ(交換)を起源とするならば、ケヒには交換の意味合いも含まれる⁸⁾。

もうひとつの神名イザサワケは、古くから豊田亮が新羅国王子のアメノヒボコの献ずるところの神宝と関連づけている⁹⁾。神宝の内容は記紀で異なるが、『日本書紀』の一云にある胆狭^{いささ}浅^さの大刀の音が似ており、その大刀はアメノヒボコの魂代で、祖霊アメノヒボコを象徴したという¹⁰⁾。また、後世の社記『氣比宮社記』には神功皇后が兵器を幣として祀ったとあり、氣比神宮の境内にケヒの子神の劔神や天利劔神や、荒魂を祭神とする伊佐々別神社が鎮座するので、劔・刀などの武器と密接に結びつく武神としての性格が読み取れる。それは敦賀が三韓征伐の出発地に設定され、日本海沿岸の重要な軍事拠点として認識されていたことが大きい。

加えてケヒ神には渡来神の性格も認められる。越国筥飯の浦に着いたツヌガアラシトの別名である干斯岐阿利叱智干岐は、本文にある任那の蘇那曷叱智と同一人物とされる。ツヌガは新羅や金官加羅の最高官位「角干」に由来し、同語のシトとシチは新羅や加耶の人名に付した貴人への尊称だという¹¹⁾。これは朝鮮半島南部の一王子が渡来した帰化説話としても知られる。よくアメノヒボコと混同されるが、ヒメコソの女神も含め、いずれも朝鮮半島からの渡来人が奉じた神との指摘があり¹²⁾、アメノヒボコとケヒ神を同体とみる説も見受けられる¹³⁾。いっぽうで『播磨風土記』ではアメノヒボコは新羅神とあり、敦賀郡の式内社である信露貴彦神社の社名は新羅系渡来人を思わせる。こうした渡來說話や新羅神の存在は、ケヒの渡来神としての側面をうかがわせる。

(4) 小結

ケヒの海神・航海神・食神・交換・武神・渡来神の性格を抽出したが、これらは敦賀の地域性と歴史的な背景

を色濃く含んだものともいえる。ヤマト王権は敦賀の重要性に注目し、その産土の地域神と接触をはじめると、やがては国家の守護神として高い神階を受けるまでになる。それでは、どのような過程で神名にみる重層性が生まれたのか。神功・応神の説話は4世紀末から5世紀前葉ごろの出来事とされ、とくに応神天皇は新王朝の創始者としてケヒ大神との関係性が取り上げられるが、はたして敦賀にはそれに見合うだけの舞台が整えてられていたのか。そこでⅢでは古墳時代における敦賀と周辺地域の考古資料を検討する¹⁴⁾。

Ⅲ. 古墳時代敦賀の考古学的検討

(1) 敦賀における首長系譜の研究史

敦賀における首長系譜を検討する。中司照世の研究成果によるところが大きいので、系譜のみを時系列で整理する。最初は立洞2号墳・山の上1号墳の報告書で首長墓に該当する古墳を、小谷ヶ洞2号墳(円墳・4世紀後葉)→立洞2号墳(帆立貝形前方後円墳・4世紀末～5世紀初頭)→明神山1号墳(前方後方墳・5世紀前葉～中葉)→明神山3号墳(円墳・5世紀中葉～後葉)→向出山1号墳(墳丘外に方形区画をもつ円墳・5世紀末)→向出山3号墳(円墳・6世紀後葉)とし、4、5世紀代はほぼ継続して首長墓が営まれたことを想定した¹⁵⁾。

その後、中司は明神山1号墳を前期にあげ、歴代首長墓を順次列挙するのは不可能としながらも、明神山1号墳(前方後方墳・4世紀)→立洞2号墳(帆立貝形古墳・4世紀末～5世紀初頭)→向出山1号墳(張出付円墳・5世紀後葉)→明神山9号墳(前方後円墳・6世紀前半)の系譜を示し、一部判明した傑出した副葬品とともに、系譜論の根拠を段築・葺石という定型化した外表施設の採用を重視した¹⁶⁾。それから立洞2号墳を4世紀後半、向出山2号墳を5世紀中ごろ、向出山1号墳を5世紀末ごろと部分的に修正し、明神山1号墳は丑寅山支群が4世紀初頭に発現することを理由に、その造営を4世紀前半まで遡らせる見解を示した¹⁷⁾。

いっぽう古川登・御嶽貞義は大賀克彦の古墳編年にもとづき、福井県嶺北の古墳動向を検討するなかで、敦賀地域の首長系譜について言及した¹⁸⁾。舞崎3号墳(方墳14m・前Ⅱ期?)→舞崎1号墳(方墳13m・前Ⅲ期?)

→宮山1号墳(前方後円墳24m・前Ⅳ期?)→宮山2号墳(前方後円墳23m・前Ⅴ期?)→小谷ヶ洞2号墳(円墳25m・前Ⅵ期)→立洞2号墳(張出付円墳24m・前Ⅶ期)→明神山1号墳(前方後方墳45.8m・中Ⅰ～Ⅱ期?)→明神山3号墳(円墳30m・中Ⅲ～Ⅳ期?)→向出山1



図1 敦賀の関連遺跡

1 石坂古墳 2 浦底遺跡 3 色古墳 4 ダンノ穴横穴墓群 5 沓丸山古墳 6 薬研谷横穴墓群 7 常宮横穴墓群 8 縄間横穴墓 9 尾尻古墳 10 白塚古墳 11 名子古墳 12 穴地蔵古墳群 13 櫛川遺跡 14 松島遺跡 15 妙華谷横穴墓 16 善衆衣谷横穴墓 17 馬坂横穴墓群 18 沓見横穴墓群 A 19 沓見横穴墓群 B 20 筋生野古墳群 21 長谷御堂山古墳 22 黒河古墳 23 狐塚古墳 24 栗野南小学校古墳 25 天満神社古墳 26 高土居古墳 27 宮山古墳群 28 山泉古墳群 29 衣掛山古墳群 30 鳩原古墳群 31 明神山古墳群 32 小谷ヶ洞古墳群 33 吉河古墳 34 向出山古墳群 35 中村山古墳群 36 山ノ上古墳群 37 立洞古墳群 38 大塚古墳群 39 舞崎古墳群・舞崎前山古墳 40 金ヶ崎古墳 41 鞠山遺跡

号墳（張出付円墳69.4m・後Ⅰ期）→明神山9号墳（前方後円墳30m・後Ⅱ期？）と提示した。

以上を整理すると、両者は主要古墳については大筋で同じような系譜を考えているが、古川らは墳長20m前後のものも対象としたため、前期古墳の系譜が充実した感がある。ひとつ大きな相違は明神山1号墳の位置づけである。4世紀前半とみる中司に対して古川らは中期前葉まで下げて考えた。そのことも含めて近年、敦賀市教育委員会や敦賀短期大学による明神山古墳群・宮山古墳群・舞崎古墳群の試掘調査が進み、古墳の様相が明らかになりつつある。北陸における土器編年や前期古墳の時期的な検討も進んでいるので、より詳細な系譜が追えるものと考えている。敦賀における各古墳群の詳細は別稿で論じたので、その成果にもとづいて概要を述べる¹⁹⁾。

（2）前期古墳系譜の再検討

まずは舞崎古墳群の編年的な位置づけである。敦賀市教育委員会により1～4号墳の調査が実施されたが、いずれも一辺15m前後の長方形を意識した古墳であった。時期を決める資料は少ないなか、前期初頭に比定されている²⁰⁾。弥生時代の墳丘墓の流れである方墳が前期初頭の特徴であることは福井県及び北陸の墓制を検討した際に判明している²¹⁾。これまで時期比定のできなかった方墳の小谷ヶ洞1号墳であったが、埋葬施設で木口部に礫を積んだ割竹形木棺をもち、1号埋葬で鉄剣と鉄鉈が副葬される点²²⁾は、舞崎3号墳の棺押さへの石を配置した埋葬施設と鉄剣・鉄鉈を副葬品でもつ点と酷似しているので、長方形など方形を意識した古墳は、前期でも初頭に位置づけるのが妥当であろう。

次に宮山古墳群に関しても新資料が得られた。かつて円墳と方墳からなる5基の古墳群とされていたが、発掘調査で1号墳は前方後円墳と判明し²³⁾、敦賀短期大学の測量調査では2・3号墳も前方後円墳である可能性が高まった。占地状況から3号墳→2号墳→1号墳の順序で築かれ、2・3号墳は合同形の可能性が示唆された²⁴⁾。その後、3号墳の試掘調査がなされ、前方後円墳の後円部が直径19mと確定した²⁵⁾。1号墳の築造年代について中野拓郎は4世紀末～5世紀前半とし、その推定根拠を竪穴式石室の短さに求めるが、古川登・御嶽貞義は越前における首長系譜の流れを重視して大賀編年の前Ⅳ期に位置

づけた。そして系譜として宮山1号墳〔前Ⅳ期〕→宮山2号墳（前方後円墳）〔前Ⅴ期？〕とし、古墳時代前期中葉から後葉に位置づけている²⁶⁾。ここでは3号墳から1号墳への序列を重視し、畿内系土器の影響が強い木田式・高畠式の画期を考えると、前Ⅴ期あたりに位置づけられる。仮に1号墳を前Ⅴ期にすれば、宮山3号墳〔前Ⅲ期？〕→宮山2号墳〔前Ⅳ期？〕→宮山1号墳〔前Ⅴ期〕の系譜が想定できる。

最後に明神山1・3号墳の編年的な位置づけをおこなう。敦賀市教育委員会と敦賀短期大学の数度にわたる調査により、1号墳は葺石をもつ墳長45.8mの前方後方墳、3号墳は墳長50mの前方後円墳と確定した²⁷⁾。時期判別できる資料がほとんどないため、確実な時期比定には至っていない。しかし前方部の形態などから1・3号墳は古式であり、前方部の発達する明神山1号墳を前Ⅱ期（布留0式期新段階）、同じく前方部の発達する明神山3号墳を前Ⅲ期（布留1式期古段階）に位置づけ、前方後方墳から前方後円墳の系譜を想定した。

その造営の背景を述べると、前Ⅰ期の段階では弥生時代の墳丘墓の流れを汲む、方形を意識した古墳が造営され、小谷ヶ洞1号墳・舞崎1～4号墳・明神山31号墳がそれに該当する。なかでも墳丘が20m規模の点で、小谷ヶ洞1号墳を前期初頭の盟主墓と考える。そして古墳前期前葉における東海系土器の波及とともに前方後方墳の展開があり、土器の畿内化とともに嚮向型前方後円墳の出現という流れを重視したうえでの位置づけとなる²⁸⁾。とくに各期での前方後方（円）墳としては北陸最大級となるが、近畿中枢部に最も近い敦賀の地理的条件を鑑みれば、越の玄関口に墳長40m級が最初に築造されたと考えたい。とくに明神山1号墳については滋賀県長浜市小松古墳や福井県若狭町松尾谷古墳の築造と連動する可能性は高い。

他にも円墳の成立時期も再検討する。直径25mの円墳である小谷ヶ洞2号墳出土土師器は木田2式であるので前Ⅵ期に比定した²⁹⁾。また墳長24mの張出付円墳である立洞2号墳も副葬品の検討から前Ⅶ期に位置づけられる³⁰⁾。円墳の上限は古墳前期後葉とみる。前Ⅳ・Ⅴ期の間は墳長30mの前方後円墳（宮山3号墳→宮山2号墳）の系譜を想定し、竪穴式石室をもつ宮山1号墳に至ると、その後前方後円墳の系譜は途絶する。つまり円墳化の最初は小谷ヶ洞2号墳（直径25m・前Ⅵ期）で、次に立洞

2号墳（墳長24m・前Ⅶ期）となるので、古墳前期は方墳→前方後方墳→前方後円墳→円墳・張出付円墳の流れとして単純化できる。

以上を整理すると、舞崎1～4号墳（方墳・墳長15m前後）[前Ⅰ期古段階・長泉寺1式期・庄内3式期]→小谷ヶ洞1号墳（方墳・墳長20m）[前Ⅰ期新段階・長泉寺2式期・布留0式期古段階]→明神山1号墳（前方後方墳・墳長45.8m）[前Ⅱ期・長泉寺3式期・布留0式期新段階]→明神山3号墳（前方後円墳・墳長50m）[前Ⅲ期・長泉寺4式期・布留1式期古段階]・宮山3号墳（前方後円墳・墳長30m?）[前Ⅲ期?]→宮山2号墳（前方後円墳・墳長30m?）[前Ⅳ期・長泉寺5式期・布留1式期新段階?]→宮山1号墳（前方後円墳・墳長24m）[前Ⅴ期・木田1式期・布留2式期]→小谷ヶ洞2号墳（円墳・直径25m）[前Ⅵ期・木田2式期・布留2～3式期]→立洞2号墳（張出付円墳・墳長24m）[前Ⅶ期・木田3式期・布留3式期]という前期の系譜を想定した。

（3）中期古墳の検討と若狭の大型古墳の動向

以上の点を踏まえると、従来中期とされた古墳が前期に移動し、中期古墳はほとんどなくなり、代わりに前期の系譜が追える結果となった。しかも、敦賀では中期古墳自体が少なく、なかでも金ヶ崎古墳（円墳・直径19m）と向出山2号墳（円墳・直径16m）をあげたが、直径20mを超える際立ったものではない。

金ヶ崎古墳は海岸に突出した丘陵北頂部で、海側に墳丘を誇示するように築造され、小型の竪穴式石室からは、副葬品の倭製珠文鏡や鉄刀・用途不明銀板などが出土した。立地などの点で福井市免鳥5号墳（張出付円墳・90.5m・中Ⅱ期）と同じ築造契機が考えられる³¹⁾。また、向出山2号墳は敦賀唯一の埴輪（Ⅳ期）と葺石をもち、割竹形木棺から鉄剣・鉄槍・鉄鏃などの武器、鉄鉢・鉄鑿・砥石などの工具が出土した。埴輪部出土の須恵器（TK216型式）から古墳中期前葉に比定できる。埴輪・葺石を兼備した造営の背景には、嶺北南部唯一の埴輪・葺石をもつ越前町番城谷山5号墳（TK216型式期）の影響下でとらえられる³²⁾。円墳化については福井県嶺北と連動し³³⁾、敦賀でも同様に考える。金ヶ崎古墳[中Ⅰ～Ⅱ期]→向出山2号墳[中Ⅲ期]と想定したが、それ以降の系譜は途絶える。

中期の系譜が途絶する理由は、若狭湾沿岸中部の大型古墳の動向と関係した可能性が高い。そこで北川中流域に展開する上中古墳群の系譜を検討する。斎藤優の研究がその嚆矢といえる。5世紀代は脇袋古墳群と日笠古墳群とで歴代の盟主墳が2系列で築造され、やがて6世紀代に2系列が1系列に統合し、天徳寺古墳群の形成に至るとした³⁴⁾。脇袋古墳群では上之塚→中塚→西塚の各古墳が、日笠古墳群では下船塚→白髭神社→上船塚の各古墳が、1系列に統合された後は天徳寺古墳群の十善ノ森→丸山塚→上高野という系譜を考えられている。

その後、古川登は5世紀代における2系列形成説を支持したが、脇袋を中心とする古墳群では城山→中塚→上之塚→西塚のように推移したと斎藤説を補強した³⁵⁾。その他の多くの研究者も古川説に準拠していたが³⁶⁾、中司照世は採集した埴輪資料と他地域における大型盟主墳の変遷や系譜を参考に、5・6世紀を終始1系列ととらえ直した³⁷⁾。時期推定の根拠の希薄な上之塚・中塚を除外すれば、城山→西塚→十善ノ森→上船塚→下船塚→丸山塚と造営され、しかも大鳥羽地区→脇袋地区→天徳寺地区→日笠地区→天徳寺地区というように、逐次場所を替えながら営まれるとした。

その後の試掘調査の成果により、中司は北川中流域における一連の大型古墳群を上中古墳群とし、埴丘規模や外部設備など他との隔絶性から若狭全域を統括した大首長の墓と考えた³⁸⁾。そして大型古墳の編年が上之塚→城山→西塚→中塚→十善ノ森→上船塚→下船塚→丸山塚と変遷し、それぞれ分断並立することなく、継起的に順次造営された点を補強した。

それに私見を加えると、上之塚古墳（前方後円墳・墳長100m・TK73型式期）[中Ⅱ期]→城山古墳（前方後円墳・墳長63m・TK216型式期）[中Ⅲ期]→西塚古墳（前方後円墳・墳長74m・TK23型式期）[後Ⅰ期古段階]→中塚古墳（前方後円墳・墳長70m・TK47型式期）[後Ⅰ期新段階]→十善ノ森古墳（前方後円墳・墳長67m・TK47型式～MT15型式期）[後Ⅰ～Ⅱ期]→上船塚古墳（前方後円墳・墳長70m・TK10型式期）[後Ⅱ期新段階]→下船塚古墳（前方後円墳・墳長85m・TK10型式期）[後Ⅱ期新段階]→丸山塚古墳（円墳・直径50m・MT85型式期）[後Ⅲ期古段階]という流れが考えられる。

以上のことから、円墳化し系譜が追えない敦賀の古墳

のあり方は、上中古墳群の継続的な大型古墳築造と関係している可能性が高い。つまり、敦賀の古墳系譜が途絶える時期と上之塚古墳の時期に近いことを踏まえると、古墳時代中期の敦賀が若狭の大首長とされる被葬者の支配下ないしは影響化に入ったことで、古墳中期前葉にその独自性が失われたと考えられる。

(4) 後期古墳の検討と群集墳の展開

再び系譜が明確化するの古墳時代後期である。向出山1号墳と舞崎前山古墳の2基は円墳を基調とする。向出山1号墳は張出付円墳で、直径60mの円丘部に張出部を含めると墳長69.4mをはかる。埴輪はないが、墳丘は2段築成で葺石を有し、平行する2つの竪穴式石室からは副葬品の鉄刀・鉄鉾などの武器、甲冑などの武具が出土し、とくに鉄地金銅装眉庇付冑や鉄地金銅装頸甲や銀装鉄刀などは稀な事例である³⁹⁾。出土須恵器(TK47型式)から築造年代は古墳後期前葉に位置づけられる。

それより一段階前の築造が舞崎前山古墳である。破壊が激しいため埋葬施設は確認できないが、墳長33mの2段築成、葺石をもつ円墳とされる⁴⁰⁾。向出山1号墳の約半分のサイズであることから、張出付円墳であった可能性が高い。出土須恵器(TK23型式古段階)から古墳後期前葉に位置づけられる。その時期の前後といえば雄略・継体朝で、百済王都の滅亡など朝鮮半島南部の混乱期にあたる。緊迫した社会事情のもとで軍事的性格の強い被葬者像が浮かび上がる。大陸交流との玄関口に位置する敦賀津では、日本海を舞台とした敦賀の政治権力者の活動とヤマト王権との緊密な関係性が読み取れる。

古墳後期中葉になると、横穴式石室をもつ前方後円墳が造営される。敦賀では墳長19mの明神山9号墳をその時期(MT15型式期)に位置づける。若狭湾沿岸西部では二子山3号墳(墳長26m・MT15型式期)・行峠古墳(墳長34m・TK10型式期)、大飯神社1号墳(墳長26m・TK10型式期)、東部では獅子塚古墳(墳長32m・MT15型式期)、福井県嶺北では梶貸山古墳(墳長45m・MT15型式期)などが同じ政治的背景で出現する。いずれも墳長20～40m規模の前方後円墳で、古墳後期における地域の盟主墓といえる⁴¹⁾。いっぽう敦賀の内陸部では県内最大級の群集墳、衣掛山古墳群の築造が開始する。群中最大の1号墳は横穴式石室をもつ直径26mの円墳で、

明神山9号墳の次期地域首長墓と考えられる。出土須恵器(TK10型式)から古墳後期中葉に比定できる。

古墳後期後葉以降、衣掛山古墳群では小型円墳が次々と造営され、大飯神社古墳群や衣掛山古墳群などでも後期末にかけて小型円墳がその周囲に展開していく⁴²⁾。とくに衣掛山と大飯神社出土の製塩土器は、製塩集団が地域支配者層の中核にまで及んだ結果で、被葬者の海洋的性格を意味している。そして古墳後期後葉になると、向出山3号墳は直径15mの小型円墳であるが、全長7mの横穴式石室をもつ盟主墓が登場する。出土須恵器(TK43型式)から古墳後期後葉に比定できる⁴³⁾。

以上を整理すると、不確定の部分は否めないが、金ヶ崎古墳(円墳・直径19m)[中Ⅰ～Ⅱ期]→向出山2号墳(円墳・直径16m)[中Ⅲ期]→(空白)→舞崎前山古墳(円墳・直径33m)[後Ⅰ期古段階]→向出山1号墳(張出付円墳・墳長69.4m)[後Ⅰ期新段階]→明神山9号墳(前方後円墳・墳長19m)[後Ⅱ期古段階]→衣掛山1号墳(円墳・直径26m)[後Ⅱ期新段階]→向出山3号墳(円墳・直径15m)[後Ⅲ期古段階]という中・後期の系譜を想定した。

(5) 小結

古墳前期から後期までの流れを追うと、前期に関しては北陸南西部の流れと同調した現象にあり、方形墳→前方後方墳→前方後円墳→円墳の流れが追えた。とくに古墳前期後葉から中期前葉にかけての考古学的な事象をみても、大型古墳の影響下にある敦賀に独自性はなく、ケヒ神の説話が熟成する歴史的な素地は認められない。それが古墳後期前葉になると70m近くの墳丘規模と豊富な副葬品をもつ向出山1号墳の被葬者が登場する。若狭湾沿岸でも破格な存在で、雄略・継体朝に登場した政治権力者とみるが、それ以降は継続しない。いっぽう古墳後期中葉の小型前方後円墳の出現は、越前・若狭で起きた一連の流れのなかでとらえられる。敦賀では衣掛山1号墳の築造が画期となり群集墳が展開し、それを契機として製塩遺跡が本格化する。そして古墳後期後葉以降に製塩土器を副葬した古墳、古墳後期末には石棚付設の古墳があらわれた。これらは角鹿の塩の説話やケヒ神の性格を探るうえで重要になるので、次に検討する。

IV. 角鹿の塩の考古学的検討

(1) 角鹿の塩

角鹿の塩の説話に関する記事は、以下の通りである。

I 是に、大伴大連、兵を率て自ら将として大臣の宅を囲む。火を縦ちて燐く。搗く所雲のごとく靡けり。真鳥大臣、事の済らざることを恨み、身の免れ難きことを知りぬ。計窮り望絶えぬ。広く塩を指して詛ふ。遂に殺戮されぬ。其の子弟に及る。詛ふ時に唯角鹿の海塩のみを忘れて、詛はず。是に由りて、角鹿の塩は、天皇の所食とし、余海の塩は、天皇の所忌とす。『日本書紀』武烈天皇即位前紀

謀反の動きを見せた平群真鳥が、大伴金村の率いる兵に攻められ殺される直前、各地の塩を呪ったが、角鹿の海の塩だけ呪い忘れたため、それ以後角鹿の塩が天皇の食料となり、それ以外の海の塩は天皇が忌むようになった内容である。これは仲哀・神功・応神の説話と並んで、敦賀の近畿中枢部との密接な繋りを示すと同時に、敦賀の塩や海産物が天皇へ献上された事実を反映している⁴⁴⁾。

角鹿の塩の考古資料については、その存在が明らかになりつつある⁴⁵⁾。長屋王邸跡出土木簡に「角鹿塩」らしき記載があり、また二条大路出土木簡群に松原駅や敦賀郡の江祥里や津守郷からの調塩の記載があった⁴⁶⁾。つまり奈良時代に角鹿の塩は実在し、ケヒ神の鎮座する越前国敦賀郡から調として塩が献上されていたことになる。館野和己によると、越前国の他郡からの調塩は確認できないので、敦賀郡からの調は基本的に塩で、越前国内で特殊な位置を占め、若狭ときわめて類似した様相になるという⁴⁷⁾。木簡による角鹿塩の存在と敦賀郡の調塩の事実は重要で、その貢進の上限を追えば、角鹿の塩の説話と考古学的な事象が整合できる可能性が高いので、次に若狭湾沿岸の土器製塩と敦賀の製塩関連遺跡について検討する。

(2) 若狭における製塩土器と上中古墳群の関係性

若狭湾沿岸では75か所の製塩遺跡が発見されており、とくに若狭湾沿岸は土器製塩の先進地のひとつとして知られている⁴⁸⁾。古墳時代に限ると、第Ⅰ型式（浜瀬Ⅰ式）は4世紀末～5世紀前半、第Ⅱ型式（浜瀬ⅡA式）は5

世紀中葉～6世紀中葉、第Ⅲ型式（浜瀬ⅡB式）は6世紀後葉～7世紀前半という型式設定と時期比定がなされている⁴⁹⁾。入江文敏の研究成果にもとづき、それぞれの概要を述べる。

第Ⅰ型式は倒盃形の台脚がついたカップ状の形態で、時期が下がるにしたがい台脚が小型化し、器壁が薄くなる。3遺跡のみで確認された。季節的なもののため專業度は低い。前期末に開始するが、斉一化された製塩土器が備讃瀬戸・大阪湾沿岸・紀淡海峡・知多などで採用されたことから、製塩土器製作にかかわる技術者の移動も含めて、大阪湾をはじめとする土器製塩盛行地帯からの一元的な拡散が想定された⁵⁰⁾。上之塚古墳の築造時期の古墳中期前葉に近接するので、製塩土器の出現は政治的な意味合いが強く、その被葬者との関係性を示唆している。ただ小規模操業の点は首長専用に、大規模な生産の必要性が生じなかったためだろう。

第Ⅱ型式は丸底の形態をとり、石敷炉が採用された。確認された15遺跡は若狭湾沿岸西側に分布密度が濃い。胎土は精緻で器壁は薄く堅固な焼成で、自然釉が付着したものもあり、窖窯を志向した窯で焼成された。その成立期は大島半島の須恵器窯導入と関係し、須恵器工人が専門性を有した手工業生産として土器製塩に関与していた。遺跡数の増加も若狭の大型古墳の被葬者との関係性を示唆している。5世紀中葉といえはやマト王権が朝鮮半島で政治的・軍事的な活動をおこなう時期にあたり、とくに若狭の広域首長は塩生産の統括だけでなく、軍事面での活躍が推測されている⁵¹⁾。

なかでも西塚古墳は、楕形の周濠や造出しをもつ墳丘形態と段築・葺石・埴輪を兼備した点、帯金具Ⅱ－b型式を所持するなど、北陸道諸国のリーダー的存在であった。また古墳後期前半の十善ノ森古墳や獅子塚古墳は前方後円墳を踏襲しながら、埋葬施設に北部九州系譜の横穴式石室を採用する。半島出自の広帯式冠や馬具・角杯などは、列島の広範囲に分布するという性格を有せず、被葬者個人が独自に入手したとされる⁵²⁾。

継続的な渡航には塩の存在が必要不可欠であり、その統括的な立場にあった若狭の広域首長が塩を独占したことを意味する。この時期に製塩土器の地域色は強くなるが、若狭では継続した大阪湾岸地域からの技術導入が認められる⁵³⁾。こうした点を考えても、製塩土器の技術導

入の点で王権と関係するが、塩の貢進というより兵糧の意味合いが強い。軍事的緊張の高まりにより塩をはじめとする物資の需要が高まり、実際の軍事活動時の兵糧が必要になったからと考える⁵⁴⁾。

第Ⅲ型式は口径に対して器高が低い碗形形態のもの、平底を志向するものの2タイプがあり、平底のものは大小でⅠ類・Ⅱ類に細分される。確認された27遺跡は若狭湾沿岸西部を中心に分布する。窖窯を志向した窯焼成で、土師質のほか完全な須恵質のものも含まれる。第Ⅱ型式より2倍から数倍の容量があり、外面に輪積み痕が残存する粗雑さが目立つことから、大型化に伴う製作時間と労力を節約したもので、塩の量産体制がうかがえる。

その出現と連動するのが丸山塚古墳の築造である。従来の前方後円墳から円墳に墳形を転換させた最初で、同時に埴輪祭祀の終焉でもある⁵⁵⁾。出土須恵器(MT85型式)からその築造は古墳後期後葉であり、埋葬施設は従来の北部九州系の横穴式石室を払拭、大和に系譜をもつ大型横穴式石室を導入し、副葬品も従来の半島から直接入手したものはほとんど含まれず、普遍的に分布する遺物が中心となる。とくに横矧板鋌留衝角付胃・胴丸式小札桂甲の武具や環頭太刀柄頭は大和経由での入手とされるため、王権からの強力な衝撃あるいはその影響力がより一層強まった時期に位置づけられる⁵⁶⁾。それは塩生産の増大に合わせて容量の大きな製塩土器のタイプへと変化し、若狭湾沿岸一円に拡大させることと関係し、しかも形態を異にしながらも若狭・備讃瀬戸・東海・能登と連動するので、収奪の面で近畿中枢部から強力な政治的施策があったと考えられている。

(3) 敦賀における製塩遺跡と古墳出土の製塩土器

敦賀における製塩関係遺跡を検討する。古墳時代の製塩遺跡は浦底遺跡・櫛川遺跡・松島遺跡がある⁵⁷⁾。浦底遺跡の採集資料は第Ⅱ型式で、敦賀最古の製塩土器となる。本格的な製塩遺跡は櫛川遺跡で、海岸線より約500m内陸に入った砂丘上で操業する。長さ6.8m、幅2.4mで、約200個以上の平石を利用した敷石炉は古墳後期後葉に比定された。松島遺跡では遺構の検出はないが、調査により古墳後期末に比定された。敦賀の製塩遺跡は古墳時代後期より小規模で始まるが、奈良・平安時代にかけて徐々に拡大していく。

次に製塩土器をもつ古墳を取り上げる。衣掛山古墳群では3・15号墳から土師質で手捏ね成形の製塩土器2点が出土した。3号墳のものは先のすぼんだ丸底風の尖り底で、共伴須恵器から古墳後期後葉(TK43型式期)に比定できる。攪乱層出土の15号墳のものも同じタイプだが、より丸底のもので共伴須恵器から古墳後期後葉(TK43型式期)に比定できる。器壁の薄いのが特徴で、時期的に第Ⅲ型式になるが、形態的には第Ⅱ型式に近い。第Ⅲ型式のなかでも各遺跡の地域差や変異が大きく、衣掛式という敦賀独自の型式も設定されている。古墳後期後葉の古墳に伴うことが重要で、副葬品として選択された至った経緯は古墳築造にかかわる政治性がうかがえ、その主体として製塩集団も膝下に率いる有力者の存在が考えられている⁵⁸⁾。

敦賀半島の東部、常宮湾岸を眼下に臨む杓丸山古墳でも製塩土器が副葬された。長径16m×短径14.5mの円墳で、埋葬施設は玄門立柱石を両側壁にもつ北部九州系の横穴式石室で、共伴須恵器(TK43型式)から築造年代は古墳後期後葉に比定できる。製塩土器は第Ⅲ型式である。北側下方斜面にはダンノ穴横穴群が所在し、その築造母体に製塩集団の存在が示唆されている⁵⁹⁾。

他に製塩集団との関係性を想起させるものに、石棚付設の横穴式石室をもつ5基の古墳がある。敦賀半島東側に所在する白塚古墳、敦賀平野部西北端に所在する穴地藏1号墳、敦賀半島西側に所在する美浜町の浄土寺2・3号墳は半島の海浜域に、鳩原2号墳だけは平野部南東端の垂山間地に築造された。いずれも直径10m前後の円墳で、出土遺物などから古墳後期末(後Ⅳ期・TK209型式～TK217型式期)に比定できる⁶⁰⁾。白塚古墳の付近には杓丸山古墳があり、穴地藏古墳群の付近には櫛川遺跡という製塩遺跡が展開する。浄土寺2号墳の墳丘背後でも2点の製塩土器が出土した。

こうした状況から石棚付設の古墳は製塩集団との関係がうかがえるが、いっぽうで軍事氏族との交流も指摘できる。石室内での床面から石棚までの高さを検討した中村修は、和歌山から岡山県にかけての瀬戸内海沿岸に低い石棚が分布することから、紀伊→大和→吉備および敦賀半島周辺へと波及し、紀氏・平群氏が関与したことを指摘した⁶¹⁾。紀氏といえば雄略天皇9年紀の紀小弓宿禰による新羅征伐記事が示すように軍事的色彩が強く、崇

峻天皇前紀では膳氏とともに物部守屋討伐軍として登場するため、古墳築造の背景には敦賀津という軍事拠点を紹介した両氏族のつながりが考えられる。

以上のような敦賀・若狭の状況の背景には、ヤマト王権によるミヤケ設置が考えられる⁶²⁾。山尾幸久の言を借りると、ミヤケは地方に対する国家的支配の拠点となった王直属の国家機関とその施設、経営体として定義できる。対外的契機により530年代から拠点的・部分的に始まり、6世紀末には関東にも設けられて120ほどになり、7世紀前半には一定の内容をもつ全国システムになったという⁶³⁾。

6世紀代の機能は、軍事基地または軍事駐屯地、国家の湾岸・渉外・迎賓施設、交通通信の中継地点、国家の交易拠点、馬匹・用材の供給地、製鉄・製塩関係地、その他いろいろの複合的で、日本海沿岸では日本海と国権中枢の地とを結ぶ国家管理の交通路として設置される。敦賀では6世紀半ばから後葉にかけて、琵琶湖の志賀の津、河川による木津または難波津をつなぐ南北ルートの交通網の拠点として港湾の軍事目的で整備される⁶⁴⁾。敦賀津への設置は衣掛山古墳群築造を契機と考え、6世紀中葉の1号墳を最初として7世紀に至るまで展開する群集墳に王権の直接的な支配の姿をみたい。

(4) 若狭・敦賀と膳氏との関係

最後に若狭湾沿岸中部のミヤケについて検討する。古くはのちの若狭国遠敷・三方両郡で多く認められる木簡の「三家人」がミヤケ経営に携わり、在地において事務をつかさどる職であったと指摘された⁶⁵⁾。その設置は遠敷郡三家里、現在の北川流域の若狭町三宅あたりで、上中古墳群が展開した場所にあたる。ミヤケはこの一帯の塩を王権が確保するために設けられた可能性が高い⁶⁶⁾。塩木簡を検討した岸本雅敏は、最古の木簡の一群を若狭が独占していたため、藤原京への塩貢納が始まった最初の段階から若狭がいち早く関係し、大きなウエイトを占め、遅くとも6・7世紀代に律令調塩制の歴史的前提とした継続的な塩の貢納を考えた⁶⁷⁾。

具体的なミヤケ設置の時期については、狩野久の6世紀末から7世紀の見解⁶⁸⁾や館野和己の6世紀前半の見解がある⁶⁹⁾。上中古墳群の系譜を考えると、前方後円墳不採用の古墳後期後葉(MT85型式期・6世紀後葉)であっ

た可能性が高い。王権による直接的な支配の観点からすれば円墳化した丸山塚古墳との連動とみる方が説明しやすく、製塩土器との関連でいえば量産化に対応した第Ⅲ型式の出現がその時期的なものを示唆している。しかし古墳後期中葉(TK10型式期・6世紀中葉)の敦賀より時期的に下がる。上中古墳群の被葬者たちが古墳中期前葉以来、その独自の権力を保持し続けてきたことが、その一段階遅れた理由とみる。たしかに墳形の点で王権と関係が深く、その被葬者を膳氏と考える見解は根強くあるが、いっぽうで近畿中枢部を介しない副葬品を含む点、古墳後期前半での分布が北陸に及ぶ点を考慮すると、独自性を有したがゆえにその導入が遅れたのであろう。

それでは若狭と膳氏の関係はいつから生まれたのか。狩野久は、膳臣傾子が越に漂着した高麗使を饗するため派遣された欽明紀31(570)年条の伝承が、膳氏と若狭の豪族と同族関係をもつに至ったひとつの機縁となり、ミヤケ設置の前提となる考えを示した⁷⁰⁾。いっぽうミヤケ設置を6世紀前半と考えた館野和己は、国造支配のためにミヤケを置き、海産物の貢納を国造に課し、その貢進を通じてヤマト王権内で食膳のことを掌っていた膳氏と若狭国造との密接な関係が生じていたが、膳臣傾子の派遣がひとつの契機となり、若狭国造は膳氏と擬制的同族関係を結び、膳氏を名乗るようになったとする⁷¹⁾。つまり膳氏の若狭進出後にミヤケ設置に至ったのか、ミヤケ設置の次段階として若狭進出があるかの違いである。

膳氏の所伝については膳氏や膳夫に関する記載が記紀に散見される。古代の宮廷には供膳・調理の職掌をもって奉仕した膳部が存在し、これを統率した膳氏の活動の顕著さがうかがえ、他に軍事や外交などの役割も果たしている。その史料批判について坂本太郎は、膳氏の家記が『日本書紀』に比較的よくとり入れられていると言及した⁷²⁾。日野昭は、膳氏伝承の史料に編纂者の文辞上の加筆潤色があり、膳氏の家記から出たものも多いと指摘した⁷³⁾。とくに安閑紀以前は最も説話的傾向が強く、欽明紀から推古紀までは若干説話的傾向も認められるものの実在性の強いもので、少なくとも純然たる説話ともいえないという。

こうした見解を重視すると、膳氏を6世紀中葉以前の若狭と結びつけ、その伝承をもとに若狭の大型古墳の被葬者に比定するのは慎重を要する。膳氏の若狭進出と若

狭の豪族の接点は欽明紀31年条の膳臣傾子の派遣あたりで、6世紀後葉のミヤケ設置と同時とみたい。そのミヤケ設置の考古学的事象には、丸山塚古墳の円墳化と大和系の横穴式石室に転じたことを根拠とする。そして大型化が進む第Ⅲ型式製塩土器の出現は、王権への塩の貢進の本格化と王権の直接的な支配が及ぶ契機となった。それが膳臣傾子の越派遣で、中央氏族の膳氏が若狭の政治権力者と擬制的な関係を結んだ時期と同じに考えておく。

(5) 小結

角鹿の塩の正体について、古くは若狭産の塩が敦賀を通して塩津越えあるいは愛発越えで運ばれたことに由来するというが⁷⁴⁾。狩野久は敦賀(角鹿)が元来若狭と同一地域であったものが、越前に所属するなんらかの事情があったと指摘した⁷⁵⁾。その理由として2点をあげる。ひとつは8世紀の敦賀は越前に属するが、地理的には嶺南の若狭に近い点、ひとつは敦賀には気比神社があるが、膳氏と関係の深い若狭国には食の神を祀る神社がみあたらない点である。

その見解をさらに発展させた館野は、敦賀が地勢上若狭と密接な関係にあり、もともと若狭は角鹿に含まれていたため、若狭で貢進された塩は角鹿の塩と呼ばれていたが、その後若狭が塩・魚介類の貢進地域として位置づけられたので、角鹿から分離し若狭国造が置かれて膳氏の支配下に入ったとする⁷⁶⁾。その際にその塩がとくに天皇の食膳に供されたため、伝統的な地名から角鹿の塩と称され、武烈紀のもとになったと推測されている。

これらは興味深い見解である。先に福井県嶺南の大型古墳を検討したが、5世紀代の敦賀の独自性は顕著ではなく、上中古墳群の被葬者の影響下にあった点はその見解を補強する。それは逆転の発想で、若狭湾沿岸自体が角鹿と認識されていれば、若狭産の塩は角鹿の塩になるからである。しかも敦賀は6世紀中葉のミヤケ設置に画期があり、設置当初は軍事施設の意味合いが強いが、6世紀後葉から7世紀にかけて敦賀の製塩が本格化し、製塩土器副葬古墳や石棚付設の古墳が築造されるなかで、食を提供する地域としても認識されるようになった。

それは若狭のミヤケ設置と連動した動きで、大型化した製塩土器とその遺跡数の増大にもつながる。先行して設置された敦賀津には、若狭湾沿岸で生産された塩や海

産物がいったん集約され、南北ルートの交通網を通じて近畿中枢部へと運ばれるシステムが確立した。若狭湾沿岸が角鹿という名を同じくする領域であるので、それが角鹿の塩となる。したがって、6世紀後葉に食神の性格が付加された可能性が高い。それ以前の製塩については上中古墳群の被葬者が関与した、軍事的な兵糧として位置づけておく。

加えて、敦賀半島周辺の石棚付設の古墳と紀伊との関係は、崇峻天皇即位前紀の蘇我馬子が物部守屋を討った時、膳臣賀拖夫がこれに加わったとする記事に注目する。賀拖夫は膳臣傾子と思われるが、その討伐軍に巨勢臣比良夫・紀臣麻呂・葛城臣烏那羅とともに名を連ねることから、蘇我氏との親密な関係を示すが、膳氏は他の諸氏と並列的に記載された点で、家記や所伝ではない一種の客観性のある記述とみられている⁷⁷⁾。巨勢・紀・蘇我・葛城の4氏の祖先は、『古事記』孝元天皇段の建内宿禰の9子に含まれ、蘇我氏の配下に服してその政治権力や軍事力の一躍をになっていた。

また、蘇我氏はミヤケ設置と最も関係が深い氏族で⁷⁸⁾、その配下に膳臣賀拖夫が入る事実はその地位と役割を考えるうえで重要といえ、紀氏ともここでつながる。6世紀後葉以降は東北の蝦夷征伐や高句麗使の来航があり、ヤマト王権による本格的な支配の拠点として日本海沿岸の玄関口を重視した社会事情がある。膳氏は蘇我氏の配下で活躍していたが、こうした後世における軍事的行動が遡り、その祖先の事績のなかに勇猛な戦歴を伝承体として結実させたのだろう。

V. ケヒ神の成立と展開

(1) 海神・航海神の性格

ケヒ神には多数の神名がある。その多くが記紀の応神天皇にまつわる名易え説話などに由来する。ヤマト王権との対外政策など諸事情が絡み、記紀編纂上の政治的な意図があっただろうが、その内容に意味不明な点が多く、いまだに釈然としない。そもそもケヒ神はいつから生まれ、複数の性格がどのような過程で重ねられていったのか。ここではⅢ・Ⅳでの成果を踏まえて時系列で述べる。

ケヒ神の成立時期の特定は困難であるが、産土神としての性格を探る際に潟湖の存在は重要である。日本海沿

岸に展開する潟湖は良港な港を形成し、海上交通の発達に欠かせない。敦賀にも旧地形の復元から3つの潟が存在し⁷⁹⁾、その東側のほとりにケヒ神は鎮座していたからである。畿内に最も近い日本海側の古来有数の港であったため、海神を祀る産土神としての姿が前提にある。元来の神格はケヒ浦に隣接する津との一体性、後世まで海上交通の守護神とされた性格から航海神でもあり、ひとびとが航海安全を願うかたちで成立したのだろう。

潟湖の国家的な整備の観点からいえば、その成立は3世紀前葉とみる。古墳時代初頭の東海系土器が北陸の海岸部から受容され、墓制に前方後方墳を採用していくあり方は、潟湖を拠点とした海上交通の発達を意味している⁸⁰⁾。そこで活躍するのが海人たちであり、日本海の出航に際して安全祈願する神地が、敦賀津を形成する潟湖のほとりに鎮座してもいい考えからだ。ただ航海安全の性格を考えれば、それ以前に神地があったことは否定できない。

(2) 渡来神と武神の性格

ケヒや角鹿にまつわる記述は説話的要素が強いが、ヤマト王権とケヒ神との接点は、仲哀天皇の筥飯宮の造営と神功皇后の滞在・出航を史実とみれば、王権側が地域神を奉祀したことが前提となるので、4世紀後葉ごろと考えられる。しかしその内容については説話的な要素が強いので、その信憑性には問題がある。ツヌガアラシトの角鹿に至る経緯は、瀬戸内海とは別の日本海沿岸における交通網の発達を意味し、神功皇后の三韓征伐ではその出航ルートが逆コースで描かれている。ツヌガアラシトが渡来人来着の最初の記事である性格を考えると、敦賀津が日本海沿岸における重要な窓口であったことは間違いない。

福井県における朝鮮半島系の遺物を概観すると、4・5世紀の韓式系土器や5・6世紀の新羅・加耶系の陶質土器や副葬品の金製垂飾付耳飾などがある⁸¹⁾。遺物のまとまる時期の上限は古墳中期前・中葉にあたるので、渡来神の付加の上限を考えるとすれば、5世紀前・中葉とみられる。また、アメノヒボコのイササの大刀を渡来系文物とした場合、ケヒの渡来神と武神の姿も垣間見えるが、ただ4世紀の敦賀にそれを裏付ける資料はなく、5世紀代も同様である。軍事的な性格の強い政治権力者は

古墳後期前葉の向出山1号墳の被葬者からで、雄略・継体朝における朝鮮半島南部の社会的緊張のなか、敦賀津が軍港として重視された結果とみられる。したがって武神の性格の上限は6世紀前葉ごろと考えるが、上中古墳群の被葬者を想定すれば、さらに遡るかもしれない。

(3) 食神の性格

ケヒ神の本来の神名は食の霊で、御食津大神の名のように食神の性格が強い。名易え説話は「名」と「魚」、ナ同士の交換と理解したが、応神が御食津大神と命名した点が重要で、ヤマト王権の地域神に対する服属儀礼を示しており、それは敦賀が食物を提供したという歴史性で説明できる。問題は角鹿の塩が近畿中枢部に運ばれた時期である。角鹿の塩の説話を重視すれば5世紀末と考えられるが、この段階における貢進の有無については判断しがたい。若狭湾沿岸の中部から東部で盛んになる製塩は貢進というより、若狭の政治権力者が主に兵糧として生産したもので、軍功や労働への対価としての役割を考えている。

角鹿の塩については6世紀中葉の敦賀のミヤケ設置が歴史的な前提となるが、当時は国家的な交通の拠点と軍事施設としての意味合いが強く、群集墳に埋葬された人々は、王権支配につながる村落首長級小地主の親族とみられる。製塩が本格化する6世紀後葉には古墳でも製塩土器が副葬され、若狭町の三宅あたりでもミヤケが設置されると、第Ⅲ型式という大量生産可能な製塩土器の展開もあわせて、王権による塩の貢進のシステムが機能し始める。そして若狭産の塩は、ミヤケ設置が先行した敦賀にいったん敦賀に集められることになった。若狭湾沿岸全体が本来角鹿だったとの認識に立てば、6世紀後葉以降に生産され、敦賀に集められた塩が角鹿の塩の正体になる。角鹿の塩や角鹿の蟹と応神の名易え説話は、6世紀後葉以降の事情を反映していたことになる。したがって食神の性格は最後に重ねられ、王権ゆかりの地域神として認識されるに至り、食霊たるケヒの神名もその時に付与された可能性が高い。

(4) 小結

ケヒ神の性格の重層性を考古学的な成果とあわせて時系列で論じた。確証のもてない部分はあるが、おおむね

6世紀後葉に至るまで海神・航海神→渡来神→武神→食神の性格が重ねられたと考えた。諸性格を併せもつあり方がその特徴といえる。そこへ最終的に天皇霊が付加されたとみている。『氣比宮社記』によると、推古天皇3年(592)、天筒山に奇雲がたなびき、仲哀天皇を祀れとの託宣があり、その後、大宝2年(702)文武天皇の勅命による社殿修造に際して仲哀天皇・神功皇后を合祀し、さらに他の四柱を配祀したという。また、『延喜式』神名帳の頭注に「越前氣比郡 氣比。風土記云。氣比神宮者宇佐同体也。八幡者応神天皇之垂迹。氣比明神仲哀天皇之鎮座也」とあるので、古くからケヒ神とウサ神が同体で、八幡神は応神天皇の垂迹、氣比明神は仲哀天皇の鎮座と認識されていた。

大宝2年(702)撰述とされる『住吉大社神代記』に伝える八幡=応神の見解も重視すれば、ケヒ神は古い段階で天皇霊が祀られたことになる。従来の説ではケヒ神の神階の高さは、東北の蝦夷制圧のための前線としての意味があり、また日本海を隔てての対大陸への備えとして重視されたと考えられているが⁸²⁾、なぜ最も早い事例で、高い神階であったかの説明としては少し足りない。全国で最も早い神宮寺の創建縁起が氣比神社で語られたことも、奈良時代におけるカミの人神観のあらわれ以上の理由が必要である。それが8世紀初頭に仲哀天皇の天皇霊を祀ったため、不遇の死を遂げた仲哀のもつ崇り性が、初期神宮寺の創建とその後の神階の高さへとつながったと考えられている⁸³⁾。

VI. おわりに

ケヒ神の重層性を考古資料にもとづいて検討した。仲哀天皇の行宮や神功皇后の出航、応神の名易え説話の舞台はいずれも敦賀に設定されているが、なぜその必要性があったのか。一連の物語構造を分析した田村克己は、敦賀が朝鮮とともにヤマト朝廷にとって王を生み出すところ、新しい王の誕生する場であったと考えている⁸⁴⁾。それは継体天皇の出自とも関係する。まず記紀において継体天皇は近江・越前を母体とした地方出身者として登場するので、その出身地内の地域神と深い関わりをもたせる必要があり、しかも継体は応神の五世孫に設定されているので、その祖先である応神の成人式の舞台として

敦賀が選ばれた可能性が高い。

ちなみに応神天皇は『古事記』中巻の最後に位置づけられ、下巻冒頭の仁徳との間には一線がみてとれる。応神は葦原中国という聖国土から生の間人界への舞台の転換の境界にあり、そのあり方は上巻最後の神武天皇の状況と酷似している⁸⁵⁾。神武東征説話と応神・神功説話については貴種流離譚、末子成功説話として共通するが⁸⁶⁾、それ以上に神武と継体との類似点に注目している。

直木孝次郎は両者の深い関係性を指摘した⁸⁷⁾。第1にともに畿外の地から出て、かなりの年月の後に大和に入る点、第2に后妃に大和の以外に地方の皇族・豪族出身の者もある点、第3に天皇をめぐって大和勢力と地方勢力との対立があった点、第4にともに磐余という地名に関係が深い点、第5に大伴・物部両氏または祖先の顕著な功績がある点などをあげる。つまり神武伝説は継体朝の史実ないし所伝をもとに潤色・形成し、しかも北部九州生まれの応神天皇が敦賀に立ち寄り大和入りを果たすのは、継体勢力地の地域神と絡める必要性のためなのである⁸⁸⁾。

その共通点は神武・応神の都入りの方角にも象徴される。永藤靖は日本神話における方位観を検討し、神武の南からの都入りと、応神の北を目指し都へ帰還する方位観が、対称的な世界観を意識的に構築したものと述べる⁸⁹⁾。敦賀と紀伊がセットとなる点は、仲哀が都の北のケヒにおもむき、次に南の紀伊に巡幸して徳勒津宮で熊襲の叛乱を聞き出航することと同じ展開であり、南北を軸とした観念は、『古事記』上巻の神話的方位観あるいは世界観と異なる政治的・経済的なものだという。加えて敦賀の地が朝鮮半島、つまり海を越えた世界と向き合った場所で、ヤマト世界と外部世界の接する境界的な場所と考えられていた点が興味深い。

王統譜の点では応神が占める位置は欽明天皇に対応する⁹⁰⁾。欽明の父(入り婿した継体)の父系と、欽明の母(手白香皇女)の父系とは、遡れば応神天皇に行き着く。別の視点で考えると、仲哀と大中媛との子である忍熊皇子と麿坂皇子、神功皇后との子である応神の関係は、継体と目子媛との子である安閑・宣化、のちの手白香皇女とその子である欽明との関係に似ている。

また、神功・応神の関係は、振媛・継体のそれと図式が似ているとの森浩一の指摘がある⁹¹⁾。そもそも神功・

応神の説話自体が一種の聖母子伝承で、歴史的背景には北部九州一帯に分布する海の女神とその御子神の海洋的神話が根底にあったと思うが⁹²⁾、『日本書紀』では、彦主人王を早く亡くした振媛が、幼い男大迹王を越前国の高向に連れて帰り天皇候補に育てあげた人物として描かれており、たしかにその姿は神功皇后と重なる。ちなみに神功皇后伝説に関する研究は多数あるが⁹³⁾、前田晴人の見解が妥当だと考えている⁹⁴⁾。伝説の本源は住吉大神の神話で、タラシヒコ・タラシヒメという異国に赴く夫婦の組み合わせを反映した宮廷神話が瀬戸内・北部九州へと展開したというものである。

さらに森は、仲哀にみる太平洋側の利権の代表者は瀬戸内海を通過して西へ向かい、また神功にみる日本海側の利権の代表者は日本海を通過して西へ向かい、結果日本海側の勝利として描かれていると指摘した⁹⁵⁾。つまり継体にまつわる設定と相通じるところがあり、瀬戸内海の象徴が住吉神で、日本海の象徴がケヒ神という図式も読み取れる。

以上を勘案すると、神功・応神の説話は継体・欽明朝がモデルで、欽明を大王の血統世襲制および大王の血族系図を形成する必要性から生まれた可能性が高い。その系譜がいつ形成されたかが問題で、記紀の素材ともなった帝紀・旧辞の成立とも関係するだろう。津田左右吉の研究以来、欽明朝前後に位置づけられるが⁹⁶⁾、遠山美都男は、天武朝段階以降の帝紀・旧辞と概括される書物が『天皇記』・『国記』・『上宮記』で、その成立を舒明・皇極朝まで下げて考えた⁹⁷⁾。

ただ、帝紀に関しては王統譜という原「帝紀」たるものが継体・欽明朝に成立したとの見解もあり⁹⁸⁾、一系の血縁継承系譜はその頃から原型を整えはじめたが、応神の皇統としての位置づけやケヒ神参拝説話なども継体天皇との絡みから舒明朝を経て⁹⁹⁾、7世紀末に最終的な整備がなされている¹⁰⁰⁾。その史料は神功皇后の系譜である息長氏や天日槍ゆかりの氣比神宮側の所伝ともいうが¹⁰¹⁾、その付加の時期については、諸説の読み込みと史料批判により歴史的な背景も含めて今後検討していきたい。

【註記】

1) 上田正昭「神階昇叙の背景」『日本古代国家と宗教』上巻

吉川弘文館 1990年

- 2) 門脇禎二「氣比神」『福井県史通史編1 原始・古代』福井県 1993年
- 3) 吉井巖「応神天皇の誕生」『天皇の系譜と神話』塙書房 1967年。吉井は、アメノヒボコ説話と系譜のもつ意味には、息長帯比売命とのかかわり以上に応神天皇が新羅王族の血脈につながることを、したがって応神が神より新羅を賜り得ることの一層の妥当性の主張が用意されたと考える。また、渡来人関係の記事が応神記にはじめてみられ、集中することも応神朝によって新しい政治領域が開かれるという古事記の見解があったとする。
- 4) 西郷信綱『古事記注釈』第6巻 筑摩書房 2006年
- 5) 本居宣長「古事記伝卷三十一之卷」『本居宣長全集』第11巻 筑摩書房 1969年
- 6) 門脇禎二『日本海域の古代史』東京大学出版会 1986年
- 7) 三品彰英『三品彰英論文集第4巻 増補日鮮神話伝説の研究』平凡社 1972年
- 8) 阪下圭八「魚と名を易えた話」『月刊百科』第275号 平凡社 1985年
- 9) 豊田亮「氣比神考」栗田寛編輯・栗田勤校訂『神祇志料附考』下巻 皇朝秘笈刊行会 1927年
- 10) 註7) 文献
- 11) 註6) 文献、上田正昭「敦賀の地名」『神道と東アジアの世界』徳間書店 1996年
- 12) 松前健「神功皇后伝承の形成」『山邊道』第20号 天理大学国語国文学研究室 1976年
- 13) 註9) 文献、今居啓一「氣比大神は天日槍であろう」『天日槍 帰化人第一号 神功皇后外祖母家』綜芸舎 1966年、塚口義信「『日本書紀』応神天皇即位前条の「一云」について」『神功皇后伝説の研究—日本古代氏族伝承研究序説—』創元社 1980年
- 14) 古墳時代の土器編年と暦年代は、堀大介『地域政権の考古学的研究—古墳成立期の北陸を舞台として—』雄山閣 2009年、寺川薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1986年、同「布留0式土器の新・古相と二・三の問題」『箸墓古墳周辺の調査』奈良県立橿原考古学研究所 2002年、古墳の編年は、大賀克彦「凡例 古墳時代の時代区分」『小羽山古墳群 小羽山丘陵における古墳の調査』清水町教育委員会 2002年、古墳時代の須恵器編年は、田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年、飛鳥・奈良時代の土器編年と暦年代は、堀大介「古代越前の須恵器編年と暦年代」『あさひシンポジウム資記録集 山の信仰を考える—越知山と泰澄を考えるために—』朝日町教育委員会 2003年にもとづく。
- 15) 中司照世「敦賀地域の首長と畿内王権」『立洞2号墳 山

- の上1号墳』福井県教育委員会 1978年
- 16) 中司照世「Ⅳ 古墳時代」『図説発掘が語る日本史3 東海・北陸編』新人物往来社 1986年
- 17) 中司照世「古代のツルガの首長と対外交流」『弥生時代のツルガ』敦賀市立博物館 2001年
- 18) 古川登・御嶽貞義「越前地方における古墳時代一首長墓古墳の動向を中心に」『小羽山古墳群 小羽山丘陵における古墳の調査』清水町教育委員会 2002年
- 19) 堀大介「古墳時代敦賀の考古学的検討」『越前町織田文化歴史館館報』第9号 越前町教育委員会 2014年
- 20) 川村俊彦ほか『舞崎前山古墳・舞崎遺跡』敦賀市教育委員会 2001年
- 21) 註14) 堀文献
- 22) 森川昌和「第3章 古代の敦賀 第1節 敦賀の開発と発展」敦賀市史編さん委員会編『敦賀市通史編上巻』敦賀市 1985年
- 23) 中野拓郎「宮山1号墳」『第16回福井県発掘調査報告会資料一平成12年度に発掘調査された遺跡一』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2001年、同「第2章 宮山古墳群」『市内遺跡発掘調査報告一宮山古墳群・公文名遺跡・木崎山南遺跡・櫛川鉢谷遺跡等一』敦賀市教育委員会 2004年
- 24) 網谷克彦・北野薫・二村陽子・佐藤優子「前期前方後円墳の測量調査一敦賀市宮山2号墳・3号墳一」『敦賀論叢（敦賀短期大学紀要）』第18号 2003年
- 25) 網谷克彦「敦賀市宮山3号墳墳丘発掘調査一後円部の墳径と隣接平坦面の遺構一」『敦賀論叢（敦賀短期大学紀要）』第19号 2004年
- 26) 註18) 文献
- 27) 網谷克彦「福井県敦賀市明神山1号墳の調査Ⅱ」『敦賀論叢（敦賀短期大学紀要）』第24号 2010年、同「福井県敦賀市明神山3号墳の調査」『敦賀論叢（敦賀短期大学紀要）』第26号 2012年
- 28) 註14) 堀文献。
- 29) 森川昌和『吉河小谷ヶ洞古墳群発掘調査報告』1975年、同「小谷ヶ洞古墳群」『敦賀市史通史編上巻』敦賀市史編さん委員会 1985年
- 30) 註14) 大賀文献、中司照世ほか『立洞2号墳 山の上1号墳』福井県教育委員会 1978年
- 31) 田邊朋宏『免鳥古墳群範囲確認調査概要報告書』福井市文化財保護センター 2007年
- 32) 堀大介「調査速報 番城谷山5号墳の分布調査の成果一丹南地区初の埴輪と葺石をもつ古墳の発見一」『越前町織田文化歴史館館報』第5号 越前町教育委員会 2010年
- 33) 註18) 文献
- 34) 斎藤優「若狭上中町の古墳」上中町教育委員会 1970年
- 35) 古川登「若狭・城山古墳の再検討」『福井考古学会誌』第5号 福井考古学会 1987年
- 36) 入江文敏「若狭」『季刊考古学』第10号 雄山閣 1985年、同「若狭」『前方後円墳集成中部編』山川出版社 1992年、石部正志「若狭の主要古墳と膳氏」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ 1987年
- 37) 中司照世「北陸」『古墳時代の研究11 地域の古墳Ⅱ 東日本』雄山閣 1990年
- 38) 中司照世「第4章 まとめ」『若狭地方主要前方後円墳総合調査報告書』福井県教育委員会 1997年
- 39) 森川昌和「向出山古墳群」『福井県史資料編13考古』福井県 1986年、中司照世「向出山古墳の遺物」『立洞2号墳 山の上1号墳』福井県教育委員会 1978年
- 40) 註20) 文献
- 41) 高浜町教育委員会『二子山3号墳発掘調査現地説明会』1989年、網谷克彦「福井県大飯郡高浜町二子山3号墳」『日本考古学協会年報』No.42 日本考古学協会 1991年、高浜町教育委員会『行峠古墳発掘調査現地説明会』1991年、赤澤徳明『滝見古墳群・大飯神社古墳群・山田古墳群・山田中世墓群』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2004年、入江文敏「獅子塚古墳」『福井県史 資料編13考古』福井県 1986年、註22) 文献、斎藤優「横山古墳群」『福井県文化財調査報告』第21集 福井県教育委員会 1971年、入江文敏「梶貸山古墳」『福井県史 資料編13考古』福井県 1986年
- 42) 川村俊彦『衣掛山古墳群』敦賀市教育委員会 1988年
- 43) 註39) 中司文献
- 44) 註20) 文献
- 45) 館野和己「若狭・越前の調と賛」『日本海域歴史大系第1巻 古代篇Ⅰ』清文堂出版 2005年
- 46) 奈良国立文化財研究所『平城京木簡1一長屋王家木簡1一』1995年、同『平城宮発掘調査出土木簡概報一二条大路木簡5一』31 1995年
- 47) 註45) 文献
- 48) 石部正志ほか『若狭大飯』大飯町 1966年、若狭考古学研究会『浜瀬遺跡一若狭大島半島土器製塩遺跡調査概報一』大飯町・大飯町教育委員会 1971年、上野晃ほか『吉見浜遺跡一若狭における土器製塩の研究一』若狭考古学研究会 1974年、入江文敏・畠中清隆『大島浜瀬・宮留遺跡』大飯町教育委員会 1985年、森川昌和「若狭地方における製塩土器編年のまとめ」『福井県史 資料編13考古一本文編一』福井県 1986年
- 49) 入江文敏「古墳時代における製塩土器の編年」『わかさのうみ』紀要1 福井県立若狭歴史民俗資料館 1986年
- 50) 入江文敏「古墳時代土器製塩の画期と首長墓の動向一若狭をケーススタディとして一」『横田健一先生古稀記念文化

- 史論叢（上）』創元社 1987年
- 51) 註50) 文献
- 52) 註50) 文献
- 53) 入江文敏「土器製塩技術の系譜—古墳時代後半期の枠組み—」『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』関西大学 1993年
- 54) 岸本雅敏「古代国家と塩の流通」『古代史の論点3 都市と工業と流通』小学館 1998年。岸本は、『日本紀略』延暦21年（802）正月条の「越後国米一万六千斛、佐渡国の塩百二十斛を年ごとに越後国雄勝城に送る。鎮兵の糧となす」の120斛もの塩が雄勝城（秋田県弘田柵遺跡）へ送られた点に注目し、律令国家軍の軍事物資として「鎮兵の糧」にあてるとした。また佐渡の塩生産の背景を、律令国家にとって必要の佐渡が東北侵略を支える兵站基地として、軍事的にも財政的にも不可欠な塩の一大供給地だったと位置づけている。
- 55) 入江文敏「若狭地方における広域首長墓の動態—主体部・副葬品の分析をとおして—」『福井県史 資料編13考古—本文編—』福井県 1986年
- 56) 註50) 文献
- 57) 註23) 文献
- 58) 註42) 文献
- 59) 川村俊彦『西浦古墳群』敦賀市教育委員会 1992年
- 60) 川村俊彦「鳩原1・2号墳」『発掘された北陸の古墳報告会資料集』まつおか古代フェスティバル実行委員会 1997年、斎藤優「穴地藏古墳」『文化財調査報告』第27集 福井県教育委員会 1979年、川村俊彦『穴地藏古墳群・松原遺跡』敦賀市教育委員会 1990年、同『穴地藏古墳 福井県指定史跡保存修理報告書』敦賀市教育委員会 2001年、松葉竜司「浄土寺古墳群」『美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』美浜町教育委員会 2007年
- 61) 中村修「低い石棚の考察」『古代史の海』第36号 「古代史の海」の会 2004年、同「低い石棚の考察」『立命館大学考古学論集Ⅳ』立命館大学考古学論集刊行会 2005年
- 62) ミヤケ制については以下の論文を参考にした。館野和己「屯倉制の成立」『日本史研究』190 日本史研究会 1978年、同「ミヤケ制再論」『奈良古代史論集』2 真陽社 1991年、同「畿内のミヤケ・ミタ」『新版古代の日本』第5巻 近畿Ⅰ』角川書店 1992年、平野邦雄「六世紀の国家組織—ミヤケ制の成立と展開—」『大化前代政治過程の研究』吉川弘文館 1985年、鎌田元一「部・屯倉・評」『新版古代の日本 第1巻 古代史総論』角川書店 1993年、山尾幸久『日本古代国家と土地所有』吉川弘文館 2003年
- 63) 館野和己・山尾幸久は前期ミヤケを否定し、池溝・水田開拓を伴う推古朝の意義を強調する。館野は国造や部民のもとに屯倉は設置されたとみて、制度としての屯倉、その成立の前提となる開発を否定するが、鎌田元一からは国造制・部民制のなかに消化されてしまうなどの批判がある。鎌田はその成立を6世紀に求めるが、こうした統治の原理が突如として現れたわけではなく、5世紀以前に遡る畿内の屯田・屯倉の展開の過程で準備されたとみる。いっぽう、山尾は5世紀後半における王権の確立の一環として、のちの畿内の範囲に王の供御料地（ミタ・ミソノ）が設けられたことを起源とする。また国家制度としての国造は670～675、6年に創設された、国家の機関（公的役職）及びそれに就任し得る個人の資格（公的身分）とし国造制の成立を遅らせて考えた。つまりミヤケ制の前提として国造制を考えず、ミヤケ制の拡充が「評」の出現と発展、孝徳朝の伴造の改革と庚午年籍の造籍事業となり、律令国家樹立の条件になったとする。基本的に山尾の見解に従う。
- 64) 山尾幸久『古代王権の原像—東アジア史上の古墳時代—』学生社 2003年
- 65) 直木孝次郎「人制の研究」『日本古代国家の構造』青木書店 1958年
- 66) 井上辰雄「古代製塩の生産形態」『正税帳の研究』塙書房 1967年
- 67) 岸本雅敏「律令制下の塩生産」『考古学研究』第39巻第2号 考古学研究会 1992年、註54) 文献
- 68) 狩野久「御食国と膳氏—志摩と若狭—」『古代の日本 第5巻 近畿』角川書店 1970年
- 69) 館野和己「若狭の調と贄」『越と古代の北陸 古代王権と交流3』名著出版 1996年
- 70) 註68) 文献
- 71) 註69) 文献
- 72) 坂本太郎「纂記と日本書紀」『史学雑誌』第56巻第7号 1946年
- 73) 日野昭「膳氏の伝承の性格」『日本書紀研究』第9冊 塙書房 1976年
- 74) 石部正志ほか『若狭大飯』大飯町 1966年
- 75) 註68) 文献
- 76) 註69) 文献
- 77) 註73) 文献
- 78) 中渡瀬一明「敏達朝から推古朝に至る政治過程の分析」『日本書紀研究』第10冊 1977年
- 79) 穂谷好晃編『松原客館の謎にせまる—古代敦賀と東アジア—』気比史学会 1994年
- 80) 註14) 堀文献
- 81) 入江文敏「北陸地方出土の朝鮮半島系土器—三生野遺跡出土台付長頸壺の位置づけ—」『郷土研究部活動報告』第4集 福井県立若狭高等学校郷土研究部 2008年、同「佩砥考—日韓出土資料の検討—」『網干善教先生古稀記念考古

- 学論集』網干善教先生古稀記念会 1998年、川本紀子「越前・若狭における韓半島系土器の一樣相」『北陸の古代と土器』北陸古代土器研究第10号 北陸古代土器研究会 2003年、古川登「福井県丹生郡における新羅系陶質土器について」『韓式系土器研究Ⅶ』韓式系土器研究会 2001年、中司照世「日本海中部の古墳文化」『新版古代の日本 第7巻 中部』角川書店 1993年。堀大介『平成25年度越前町織田文化歴史館企画展覧会 海は語る ふくいの歴史を足元から探る』越前町教育委員会 2013年ではその集成をおこない、概要を述べた。
- 82) 浅香年木『古代地域史の研究』法政大学出版局 1978年
- 83) 堀大介「氣比神宮と織田の劔神社」『第19回春日井シンポジウム資料集』春日井シンポジウム実行委員会 2011年
- 84) 田村克己「氣多・氣比の神—海から来るものの神話—」『海と列島文化第1巻 日本海と北国文化』小学館 1990年
- 85) 前田晴人『神功皇后伝説の誕生』大和書房 1998年
- 86) 高崎正秀「古事記伝承論」『国学院雑誌』第63巻第9号 国学院大学 1962年
- 87) 直木孝次郎「継体朝の動乱と神武伝説」『日本古代国家の構造』青木書店 1958年
- 88) 堀大介「神功皇后の軌跡」『平成25年度越前町織田文化歴史館企画展覧会 海は語る ふくいの歴史を足元から探る』越前町教育委員会 2013年
- 89) 永藤靖「日本神話の北と南の方位観—神話から歴史へ—」『日本古代学』第1号 明治大学日本古代学教育・研究センター 2009年
- 90) 山尾幸久『日本古代王権形成史論』岩波書店 1983年、註64) 文献
- 91) 森浩一・網野善彦『馬・船・常民 東西交流の日本列島史』河合出版 1992年
- 92) 註7) 文献、高階成章「神功皇后紀の成立過程」『国学院雑誌』第48号第9号 国学院大学 1949年、本位田菊士「応神天皇の誕生と神功皇后伝説の形成—建国説話と母子神信仰—」『ヒストリア』第48号 大阪歴史学会 1967年、松前健「神功皇后伝承の形成」『山邊道』第20号 天理大学国語国文学会 1976年
- 93) 伝説の成立期について、津田左右吉は継体朝から欽明朝とされ、直木孝次郎は推古朝以降の成立と説いた。藤間生大は伝承内容を根拠なき造作とせず何らかの根拠とみる見解を示した。註96) 文献、直木孝次郎「神功皇后伝説の成立」『歴史評論』104号 校倉書房 1959年、藤間生大「神功紀成立の過程」『日本文学』第12巻第8号 日本文学協会 1959年
- 94) 註85) 文献、前田晴人「神功皇后伝説の形成と住吉大神」『日本書紀研究』第22冊 塙書房 1999年
- 95) 註91) 文献
- 96) 津田左右吉『日本古典の研究』上 岩波書店 1948年
- 97) 遠山美都男「帝紀・旧辞成立史考」『学習院大学文学部研究年報』第43輯 学習院大学文学部 1997年。遠山は、津田左右吉の主張を慎重に読み込み、津田が旧辞の成立時期について述べた文が後に拡大解釈され、旧字のみならず帝紀の成立にまで言及したものと認識されていたと指摘した。
- 98) 川口勝康「在地首長制と日本古代国家」歴史学研究会編『歴史学研究別冊特集 歴史における民俗の形成』青木書店 1975年、同「五世紀の大王と王譜譜を探る」『巨大古墳と倭の五王』青木書店 1981年
- 99) 吉井巖「応神天皇の周辺」『天皇の系譜と神話』塙書房 1967年。吉井は、継体天皇の裔から出自したと称する天武朝真人賜姓氏族が、こぞって継体天皇の裔から応神天皇系の裔へと出自を塗り替えている傾向を指摘した。また、欽明天皇以後の皇統は敏達・彦人大兄皇子を経て舒明につながる方向と、用明・崇峻・推古と蘇我氏に親近な皇統に展開する方向とに分かれるが、真人賜姓諸氏族は舒明天皇につながる方向とより強く結ばれるという。さらに、舒明天皇は息長足日広額天皇という和風諡号や、殯宮に際しては息長山田公が日嗣を誄したことなどから、息長氏との深いつながりがある。オキナガタラシヒメが皇統系譜に定着する時期は天武朝あるいはそれ以後の時代にあるが、舒明朝から天武朝にかけて息長氏がタラシ系の系譜を積極的に展開し関与していったところにその成因を認めている。註97) 文献の遠山の見解もあわせると、舒明朝にひとつに画期があったことは間違いないだろう。
- 100) 99) 註文献、吉井巖「ホムツツケ王—崇神王朝の後継者像—」『天皇の系譜と神話』塙書房 1967年。吉井は、上宮記に見える若野毛二俣王の父が凡牟都和希王となっており、少なくとも古事記編纂時には確たるものがなく、註99) 文献での見解を含めると、その成立は天武朝の7世紀末と考えている。
- 101) 日野昭「武内宿禰の伝承」『日本古代氏族伝承の研究』永田文昌堂 1971年、註13) 塚口文献、塚口義信「神功皇后の出自系譜に関する一考察」『神功皇后伝説の研究—日本古代氏族伝承研究序説—』創元社 1980年

突線鈕式銅鐸破碎プロセスの金属工学的検討とその考古学的意義

福 永 伸 哉
近 藤 勝 義

目次

I. はじめに	23
II. 突線鈕式銅鐸に反映された地域関係の変化	23
III. 出土例が増加する破片銅鐸	24
IV. 銅鐸加熱破碎実験の諸例	25
V. 銅鐸破碎メカニズムの実験的検討	26
VI. 破片銅鐸の考古学的意義	27
VII. おわりに	29

論文要旨

弥生時代を代表する列島製青銅器である銅鐸について近年の注目すべき資料の状況として、弥生時代後期末から終末期（庄内式期）を中心に、細片となった銅鐸が集落遺跡から出土する事例が増えてきたことがあげられる。桜井市域においても以前から知られていた纏向遺跡の事例に加えて、今世紀になって脇本遺跡、大福遺跡から相次いで突線鈕式銅鐸の破片が出土し、従来、突線鈕式銅鐸の分布が希薄と見られていた大和盆地東南部の認識に再検討が迫られている。

小論では、銅鐸の細片化がいかなる物理的プロセスで生じたのかを、桜井市立埋蔵文化財センターで行われた銅鐸破碎実験のレプリカ片を用いて金属工学的に検討した。その結果、700℃以上に加熱することで製品中の鉛の局部溶融現象が生じ、連結亀裂によって等分割破壊に至ったと判断した。700℃以上でこうした現象が見られたことは、いくつかの銅鐸破碎実験において経験的に知られた加熱温度とほぼ整合的であると同時に、それがあきらかな人為的かつ意図的行為の産物であったことを裏付けするものといえる。

突線鈕式銅鐸が破碎されることは、「卑弥呼共立」を機に地域シンボルとしての広形銅矛や突線鈕式銅鐸の意義が失われることと関係していると理解した。そして、細片となった破片銅鐸は、破碎行為が行われたその集落内で青銅器鑄造の素材として用いられたもの、青銅器素材として集落外に流通したもの、そして卑弥呼の政治権力による「青銅器序列」戦略に基づく小さな威信財として所持されたものというおおむね3つの扱われ方で、庄内式期を中心に特有の意義を持って存在していたと推定した。また、破片銅鐸がほぼ近畿式に限られることについては、従来から突線鈕式段階の銅鐸分布が薄いと見られていた畿内中心部（大和、河内）でさかんに破碎された近畿式の破片銅鐸が、素材・威信財などとして各地に流通した結果である可能性を指摘した。

福永 伸哉（ふくなが しんや）

大阪大学大学院文学研究科教授
桜井市纏向学研究センター共同研究員

近藤 勝義（こんどう かつよし）

大阪大学接合科学研究所教授

突線鈕式銅鐸破碎プロセスの金属工学的検討とその考古学的意義

福永 伸哉・近藤 勝義

I. はじめに

日本の弥生時代を代表する列島製青銅器に銅鐸がある。1960年に示された佐原眞氏の画期的な編年研究の結果、最古型式である菱環鈕式銅鐸の製作は弥生前期末頃にさかのぼることが指摘され（佐原 1960）、実際に1982年には向日市鶏冠井遺跡で菱環鈕式、ないし外縁付鈕式の石製鋳型が畿内第Ⅱ様式までの土器と共伴したことによって、その妥当性が認識されることとなった。銅鐸は、その後扁平鈕式、突線鈕式と型式変化をとげて弥生時代後期にまで継続し、すでに約500口の出土が確認されている。

銅鐸の出土や分布状況に関して近年の注目すべき変化として、畿内や東海を中心に細片となった銅鐸が集落遺跡から出土する事例が増えてきたことがあげられ、その数は現時点で50例にも達している。桜井市域においても以前から知られていた纏向遺跡の事例に加えて、今世紀になって脇本遺跡、大福遺跡から相次いで突線鈕式銅鐸の破片が出土し、従来、突線鈕式銅鐸の分布が希薄と見られていた大和盆地東南部の認識に再検討が迫られている。

章を改めて整理するように、破片となって出土するこれらの銅鐸の圧倒的多数は突線鈕式の近畿式銅鐸で占められている（難波 2007）。そのことにも考察すべき歴史的な意味が含まれているであろうが、そもそもその徹底した細片化がどのような状況で起こったのかという点も考察の対象とすべき段階に来ている。

弥生社会において貴重な青銅原料と最高の鑄造技術を用いて製作された銅鐸が、なぜかくも細片とされてしまったのか。そしてその細片化はいかなる物理的プロセスで行われたのか。これらの検討は、古墳時代成立へ向けて倭人社会が政治的な統合をとげる時期に生じた出来事の内実迫る意味を持っている。小論においては、細片となって出土する銅鐸の考古学的な検討と、その細片化

のプロセスを金属工学的に検討する作業を通じて、破碎された銅鐸から時代の転換期を読みとる試みを提示してみたい。

なお、小論では破片となった後にもそれが銅鐸の破片であることに一定の意味が認識されていたと考え、出土銅鐸片については、おもに「破片銅鐸」という呼称を用いることにしたい。

II. 突線鈕式銅鐸に反映された地域関係の変化

銅鐸の型式変遷において、突線鈕1式以前と2式以降の間に大型化の画期があり、前者を「見る銅鐸」、後者を「聞く銅鐸」と名付けて、銅鐸のまつりに大きな変動があったとの卓見を提起したのは田中琢氏であった（田中 1970）。ただ、田中氏は「見る銅鐸」が畿内よりも東方の東海地域において卓越することに注目し、その装飾化や大型化の要因については、弥生中期末頃に東方の縄文文化系の農耕集落が純粋な弥生文化に同化して銅鐸を受け入れることになった際に、「銅鐸の持つ異様な姿こそが、新しい神霊をまつる祭器の特色」と感じられたためと解釈している。そして、畿内以西に多い「聞く銅鐸」とあらたに受け入れられた「見る銅鐸」は、ともに使用され続け、その終焉は弥生後期よりも後にあるという理解を示している。

しかし調査研究が進展して、複数銅鐸の共伴出土について以前の情報が整理され、あらたな事例が蓄積されてくると、扁平鈕式以前のものと突線鈕2式以降のものと共伴例が皆無であることが注意されるようになってきた。そして、「聞く銅鐸」の大部分は弥生中期末～後期初頭までには埋納され、その後後期になってあらたに登場した「見る銅鐸」が古墳時代初頭頃までに埋納されたという考えが春成秀爾氏、寺澤薫氏によって提起される

ようになった（春成1982、寺澤1991）。

筆者も、弥生中期末頃の拠点集落解体と共同体の変質を関連づけた都出比呂志氏の研究（都出1983）を重視し、そうした社会変化の中で扁平鈕式までの「聞く銅鐸」が役割を終えてほぼいっせいに埋納されたと考えた。また、「見る銅鐸」として登場する後期の突線鈕2式以降の銅鐸は、もはや農耕祭器というよりも、畿内・東海のエリート層の間に形成された政治連合のシンボルとして、北部九州の広形銅矛と競うように巨大化をとげたものと理解した。「聞く銅鐸」のほぼ最終段階にあたる突線鈕5Ⅰ式鐸が弥生後期後半の土坑内に埋置されていた徳島市矢野遺跡の事例は重要である。「聞く銅鐸」の終焉が弥生後期のうちにあったことを示しており、これを「卑弥呼共立」による地域間の対峙状況の解消という出来事と関連づけて解釈することが可能になるからである（福永1998）。

この突線鈕式銅鐸のあり方の中で、筆者が注目しているのは、近畿式の突線鈕3式と突線鈕4式との間に性格の違いがあるのではないかという点である。

まず型式的に見ると、突線鈕4式における横軸突線の出現が大きな変化としてあげられる。突線鈕4式段階の横軸突線は鱗部分にまで達していないが、そのデザインが鱗を貫く横軸突線をはやくから特色としていた東海の三遠式からの影響であることはあきらかである。難波洋三氏が指摘するように、三遠式の最終段階である三遠4式を突線鈕3式（突線鈕3Ⅱ式）に併行するととらえるなら（難波1986）、突線鈕4式以降は近畿式のみが製作されたということになる。この時点で三遠式工人と近畿式工人の「融合」といった製作体制上の変化を想定してもよいのではなかろうか¹⁾。突線鈕4式以降の銅鐸は三遠式の集中地であった東海西部にも一定数が及んでいることを勘案すれば、畿内地域と東海地域が製作工房を融合させて互いに同じスタイルの銅鐸を持ち合うほどにまで政治的な連携関係が強まったと解釈することもできよう。

また畿内よりも西方では、突線鈕3式以前と4式以降で分布傾向に変化が認められる。たとえば本州西部の吉備地域では突線鈕2式～3式鐸はある程度出土しているものの、4式以降のものは現状では確認されていない。また、おそらくこの分布変化と関連するであろうが、東隣の兵庫県西部で宍粟市山崎町須賀沢、宍粟市千種町岩野辺穴尾、佐用町下本郷、（伝）播磨国など、突線鈕4

式以降の事例が集中的に見られるようになる。突線鈕式銅鐸を畿内・東海のエリート層の政治的な結束のシンボルと理解する立場に立てば、この現象は特殊器台の創出によって独自性を強める吉備政体に対して、畿内・東海政体は西方の最前線を播磨西部まで後退させつつ、明確な政治的結束をはかったと見ることもできる。

類似した現象は、西日本の太平洋地域でも認められる。たとえば突線鈕式銅鐸の南方の集中地でもある土佐では出土の伝承が残るものも含めて8例が知られるが、突線鈕4式以降のものは安芸市切畑の一例だけであり、ほかには突線鈕2式～3式で占められている。これに対してより畿内地域に近い阿波では、型式のわかるもののうち、突線鈕4～5式が先述の矢野遺跡の例を含めて3例、2式が2例と両者の比率が逆転している。さらに紀伊になると、最終段階の突線鈕5Ⅱ式を含めて突線鈕4～5式9例、2～3式6例というように、阿波で見られた傾向がいっそう強まっているように思われる。この太平洋地域についても、突線鈕4～5式鐸の段階になると、分布が畿内中心部側へと縮小するとともに分布域内においては数量がむしろ増えているのである。この場合も、突線鈕式銅鐸をシンボルとする地域政体内部で結束の強化がはかられた結果と考えれば状況を理解しやすい。

突線鈕4式～5式にかけて、銅鐸はある程度の領域観念を帯び始めた畿内・東海政体のシンボルとして、サイズや装飾性を増していった。そして、その動きがほぼ最高潮に達した突線鈕5式をもって、銅鐸生産は突如うち切られたのである。きわめて「人為的」ともいえるこの生産停止の背景に、西暦2世紀末頃のことと考えられる「卑弥呼共立」を想定できるのではないかという理解は、先述したとおりである。

Ⅲ. 出土例が増加する破片銅鐸

佐原真氏によって銅鐸の新しい型式編年がうち立てられた1960年以降、各地の型式分布の状況から銅鐸祭祀の推移を地域ごとに探る研究アプローチが可能になると、畿内地域では「聞く銅鐸」と比べて突線鈕2式以降の「見る銅鐸」の出土が著しく少ないことがわかってきた。とりわけ、その中心部にあたる大和盆地で「見る銅鐸」の明確な出土例がまったくないことが注目された（田中

1970、pp.50-51)。

この点について、田辺昭三氏、佐原眞氏は「最終段階の銅鐸が畿内の中心には見られず、淀川以北の摂津・近江・伊賀・紀伊など畿内を取り巻く周辺部に分布することは、銅鐸祭祀をはやく捨てた先進地とおくれた地域の差をしめすもの」と述べている(田辺・佐原1966、p.130)。畿内中心部では銅鐸祭祀からいちやく脱却し、おそらく銅鏡を用いる新しいまつりへと先進的に移行したと見たのであろう。田辺氏らの見解は、いちやく巨大前方後円墳を生みだしヤマト政権の中核地となっていくこの地域の先進性を銅鐸のあり方から示唆したものであり、古墳時代成立過程の研究とも整合的なものであった。

しかしその後、平野部の発掘調査が進展してくると、小片となった破片銅鐸の出土事例がしだいに増加することとなった。しかも、破片銅鐸の大部分は「見る銅鐸」段階のものであり、その分布の少なさが指摘されていた大阪平野や大和盆地などでも、複数の遺跡で出土事例があきらかになったのである。出土状況としては集落遺跡の包含層から検出されるものが多く精密な時期決定は難しいが、集落遺跡ということである程度の情報を得ることができる場合もある。難波洋三氏が整理しているように、それらはおおむね「見る銅鐸」の製作が終焉を迎えて間もない弥生後期末～終末期(庄内式期)に比定される事例が主体を占めている(難波2005)。畿内中心部で「見る銅鐸」の分布が希薄に見えたのは、その最終段階で細片となるような扱いがなされたためであって、本来は畿内地域にかなりの数の「見る銅鐸」が分配されていたと理解するほうが資料の実態に合致しているといえるのである。

筆者は、畿内政体のシンボルというべき「見る銅鐸」が細片と化すまでにその意義を喪失した背景に、各地の倭人社会が独自のシンボルを立てて対峙するような地域関係が終焉を迎えた状況を想定している。「卑弥呼共立」による倭人社会の政治統合の成立に際して、銅鐸や銅矛のような旧来の地域性を引きずる器物に替わって「中国製神獸鏡」というあらたな統合のシンボルが選定された状況を考えると、この間の経緯が無理なく理解できるように思われるのである(福永1998)。

ただ、こうして銅鐸はその歴史的役割を終えたとしても、それが完形品の埋納でなく細片化されてしまう現象

はなぜ生じるのであろうか。筆者は、破片銅鐸の出土事例がまだ20数例だった1990年代に、小型青銅器の鑄造のための原材料として再利用するために細片化されたという考えを述べたことがある(福永1998、p.244)。かつて飾耳片が出土していた豊中市利倉遺跡の東隣の穂積遺跡において、製作途中の「連鑄式銅鏃」が出土し、破片銅鐸と青銅器生産の関連がうかがえたことが一つの手がかりであった。近年では、まさに畿内中心部である桜井市脇本遺跡、大福遺跡などで破片銅鐸と土製鑄型の外枠が同一遺跡から出土し、破片銅鐸が素材として再利用されたことをより直接的にとらえられるようになった。

破片銅鐸の出土例は、現時点で筆者の管見に触れたものとして61例が認められ(表1)、その8割以上が突線鈕式銅鐸で占められている²⁾。しかも、突線鈕式の中では松本市宮淵例以外はすべて近畿式であり、近畿式の終焉にあたって銅鐸を破片にするような特徴的な取扱いがなされたことをあきらかに示している。

表1において50例を数える近畿式の破片銅鐸数は、これらの間に同一個体がなかったとすれば、現時点で確認されている完形品も含めた近畿式総数のおよそ35%にも達する。今後、弥生後期末から古墳前期の集落遺跡の調査が進めば、近畿式の完形銅鐸と破片銅鐸の数比が逆転する日が来ることも十分に想定できるのである。

ただ、少なからぬ近畿式破片銅鐸の存在が、たんに使用時における偶然の破損の結果であれば、そのことに歴史的意味を追求するさほどの必要性も生まれないであろう。破片銅鐸の持つ歴史性に焦点をあてる前に、以下では章を変えて、まず銅鐸が破片となるメカニズムについて金属工学的側面から検討を加えてみよう。

IV. 銅鐸加熱破碎実験の諸例

近畿式の破片銅鐸の多くに共通する特徴としては、破片そのものが小寸であることがあげられる。表1に示した50例のうちでは、8割以上が最大辺10cm未満の細片である。兵庫県久田谷遺跡で一括出土した117片の銅鐸片の9割以上が最大辺9cm未満となっていることなどはその典型である。こうした破片の傾向から判断すると、偶然の破損というより、そうした細片化を可能とするような方法によって意図的な破碎行為がなされたと推定する

のが妥当であろう。

破片銅鐸の出土事例が増えて来るにつれて、どのような方法で銅鐸が細片にできるのかという関心は、近年考古学研究者の間でも高まりつつあり、「銅鐸破碎実験」プロジェクトがいくつか行われている。

たとえば、2009年に兵庫県立考古博物館において行われた実験では、まずレプリカ銅鐸をカケヤで打突したが表面が凹んだだけで割れず、つぎに焚火で10分ほど熱した後水をかけたがやはり変化がなかったのに対して、焚火で10分熱して冷めないうちにカケヤで打突したところ「湿ったせんべいのよう」に粉々に割れたことが報告されている（中村・潤井2009）。

兵庫県立考古博物館の実験は、来館者への普及啓発的な性格を持つ事業の一環として行われたものであり、加熱温度などについての情報がないが、2010年に行われた徳島県立博物館による実験では、復元銅鐸を電気炉を用いて750℃で5分間加熱し、赤熱した状態で金槌で叩くことで容易に破碎できたことが報告されている（魚島ほか2010）。使用した復元銅鐸は、銅84%、錫10%、鉛6%の重量割合で製作した高さ約37cm、重量約3000gのもので、弥生後期の近畿式銅鐸と比べて錫分が数%高いことがどのように作用したかはわからないが、750℃という加熱温度が示されている点は有益な情報である。

いまひとつの実験は、2011年1月にNHKが放映した「『邪馬台国』を掘る」の中で、桜井市立埋蔵文化財センターにおいて実施したものである。考古学サイドからは実験の報告書などは刊行されていないが、羽曳野市西浦出土の突線鈕4式銅鐸にほぼ近い金属成分比（銅89%、錫5%、鉛6%）で製作したレプリカ銅鐸を焚火の中で加熱した後に、カケヤで打撃を加えると容易に破碎されたという内容であり、ほぼ兵庫県立考古博物館における実験と同様の結果が得られた。実験中は赤外線サーモグラフィを用いて簡易ではあるが銅鐸の表面温度をモニタリングしており、焚火から取り出した直後の銅鐸表面は740℃ほどになっているようである³⁾。

これらの実験は破碎現象の再現を追求したもので、実験過程において精密なデータ収集が行われているわけではないが、加熱と破碎の間に関連があり、かつ700℃以上の加熱が結果的に破碎の成功に結びついているらしいことは、事実関係として注目できる。そこで、筆者らは

銅鐸の加熱と金属学的な性状変化の関連を探るために、次章で述べるような実験・分析作業を行った。

V. 銅鐸破碎メカニズムの実験的検討

桜井市立埋蔵文化財センターで製作されたレプリカ銅鐸の破片（金属組成比は西浦遺跡出土の突線鈕4式銅鐸に準拠）を試料として、高温に加熱した際の破壊挙動と組織・結晶構造の関係について分析を行った。分析は、破片青銅器の高温に加熱した際の破壊挙動と組織・結晶構造の関係を解析することで、青銅器の破碎機構の復元に関する知見を得ることを目的としたものである。なお、試料は前章で紹介したNHK番組用に製作された銅鐸であるが、鑄造時の性状が保たれていることを重視して、加熱破碎実験には使われなかった湯口部分の破片を用いることとし、実際の分析作業は大阪大学接合科学研究所において実施した。

一般に青銅（銅Cu-錫Sn合金）は、常温において高い延性（粘り）を有するため、機械的に破壊した場合、大きな変形を伴うと共に、小さい破片として均一に粉碎することはない。ゆえに、遺跡出土例に多くみられるような小片を生ずる銅鐸破碎行為の実態としては、青銅器を高温で加熱した状態で破壊した可能性が考えられる。そこで、本実験ではその破壊機構を再現すべく、500～750℃の温度範囲で加熱した青銅試料の組織構造および成分（元素分布状態）の変化を解析すると同時に、高温引張試験を通じて試料の強度と破壊形態（亀裂進展を誘発する含有元素の影響）を調査し、破碎プロセスの主な支配要因の特定を試みた。

具体的にはまず、弥生後期タイプの銅鐸を模擬した鉛含有青銅合金試料（上述のレプリカ銅鐸片）を対象に、加熱過程での組織構造変化について、示差熱量分析を行った。雰囲気に関しては、当時を想定した大気中（酸化雰囲気）と、アルゴンガスを流入（流量450ml/min）した非酸化環境とし、両者を比較することで大気中に含まれる酸素との反応の影響について解析した。

図1に示すように、いずれの加熱環境においても、372℃付近に吸熱ピークが観察されるが、これが青銅試料に含まれる鉛の溶融に起因する吸熱反応である。他方、アルゴンガス雰囲気では、その後に明瞭な発熱・吸熱ピー

はなく、 β 相との共晶領域における吸熱反応が830℃付近に観察される。他方、大気中（酸化雰囲気）の加熱では、600℃と780℃付近で明確な発熱反応が見られ、試料重量の増加が確認されており、それぞれ γ 相、 β 相の溶融に伴う顕著な酸化現象が生じたと考えられる。X線回折結果よりCu-Sn-Pb-O系酸化物粒子の存在が確認されたことから、600℃を超える大気中加熱過程では、Cu-Sn系酸化物が生成し、外力が青銅試料に作用した際にこれらの酸化物が破壊の起点となりうることが考えられる。

つぎに、試料サンプルを500～750℃の各温度で10分間、加熱保持した後、常温に冷却した際の組織観察を行った。その結果を図2に示す。加熱温度の増加に伴い、黒色粒子同士の連結が進行し、粗大粒子の生成が確認される。700℃にて加熱した試料を対象に、SEM-EDS（走査型電子顕微鏡／エネルギー分散型X線分析装置）により黒色部近傍の元素分析を行った結果、図3に見るようにPbの凝集が確認されたことから、図2の組織写真において黒色部は鉛に相当しており、加熱温度の増加に伴い、溶融した鉛の合体による粗大粒子の生成が確認された。

さらに、大気雰囲気にて各温度で加熱した状態で引張試験を行った結果（引張強さの温度依存性と破断試験片の外観）を図4に示す。500℃での引張強さ（62MPa）に対して620～680℃では35～41MPaと低下し、さらに700℃では4MPaと著しく低い値を示した。また破断後の試験片形状を比較すると、700℃では試験片が数か所で破断しており、脆弱化していることがわかる。両試験片の破断面をSEM-EDSにより分析した結果（図5）、鉛の分布に着目すると、500℃では球状に存在するのに対して700℃では結晶粒界に沿って鉛が分布しており、粒界での脆性破壊形態を呈していることから鉛を起点として破壊が進行したと考えられる。

ただし、いずれも各温度から徐冷状態で室温に到達した後の試験片を対象に分析した結果であり、各温度での鉛の分布状態を把握する必要がある。そこで、青銅試験片を各温度で加熱保持した後、直ちに水中に焼入れ処理を施し、各温度状態での組織を凍結することで鉛の分布状態を光学顕微鏡により調査した。その結果を図6に示す。

前述のとおり、700℃では鉛同士の合体による粗大化が確認できるが、710℃以上では鉛が粒界に沿って線状

に分布し、しかも加熱温度と共にそれらが連結して、その長さが増大している様子がわかる。

以上の結果より、青銅器の鑄込み性を改善するために有効な添加元素である鉛が融点以上の高温域では青銅素地中にて合体・粗大化し、しかも線状に連結した状態で分布するため、外力が作用すると極めて低い応力で鉛に沿って青銅が破壊することを確認した。ゆえに、上述した鉛の連結分布状態が、出土時に確認されている数cm程度の小さい破碎片の形状を支配する要因である可能性は極めて高いと推察できる。また、その際に前述したような大気加熱中に生成した酸化物粒子が応力集中部となり、亀裂の発生を誘発することも予想される。

VI. 破片銅鐸の考古学的意義

前章での分析において、700℃以上に加熱するという行為が器物中の鉛の粗大化や線状連結を促し、遺跡で出土するような細片化した銅鐸の生成要因になるという所見が得られた。700℃以上という値が破碎に成功したいくつかの実験で経験的に知られた加熱温度にほぼ合致することは、興味深い事実である。高さ1mにもなる巨大な銅鐸が通常の生活環境でそのような高温にさらされることは考えにくいので、やはり銅鐸の破碎はあきらかな意図のプロセスとして行われたと理解できよう。

考古学的に検討すべき論点はいくつかある。まず、なぜそこまで細片化されたのかという問題である。もちろん高温に加熱して打撃を加えるという方法自体がそうした細片を生じさせる主因ではあるが、第4章で述べたいくつかの破碎実験においても、かならずしもすべてが細片と化しているわけではない。これに対して、遺跡出土の破片銅鐸は前述した久田谷遺跡の事例を含めて10cm未満のものが圧倒的に卓越する傾向にある。細片化の作業は徹底して行われたと見られる。

破片銅鐸が他の青銅器の原料に使われたとすれば、当然ながら埴塙内で溶融しやすいよう細片にしたと見るのが合理的である。弥生後期末の突線鈕式銅鐸終焉から古墳時代大型倣製鏡の出現までのおよそ百年間は、日本列島製の青銅器はほぼ小型品に終始しており⁴⁾、一度の鑄込みに必要な湯量を勘案すると埴塙自体も小型のものであった可能性は高い。鑄造工人の装備に適する小型素材

が求められたという説明は一定の説得力を持つ。

庄内式期を中心とする時期の列島製大型青銅器が不在であるという事実そのものも注目される。すくなくとも弥生時代、古墳時代における列島の青銅器生産は、大陸製品をモデルにしてそのサイズの拡大をはかるという姿勢が中心的な基調であった。直前まで巨大な銅鐸や銅矛を鑄造する技術が存在しており、しかもそれらを鑄つづせば原材料の調達も可能であったにもかかわらず大型品が認められないことは、この時期に大型品製作に対する何らかの制約があった可能性を示唆している。

筆者はこの点に関して、銅鐸や銅矛を廃した卑弥呼の政治権力が、中国鏡を含む多様な青銅器を種類と大きさで序列化し、所持するエリート層の身分表示とする戦略をとったのではないかという仮説を提示している（福永2001）。後述するように、破片銅鐸の一部には穿孔されてペンダント様の装身具の形態をとるものが存在しており、そこに政権による「青銅器序列化戦略」の一端を垣間見ることができよう。列島製青銅器の小破片は、青銅器序列の最下層に位置づけるにふさわしいものであり、破片銅鐸もそれがかつて貴重な地域シンボルであったということに加え、数cmのサイズとされてこそ社会的にも意義を持つものであったと推定しておきたい⁵⁾。

いまひとつの重要な論点は、破片銅鐸のほぼすべてが近畿式で占められている状況をどう理解するかということである。近畿式のみが分布する地域内であれば起こりうる現象であろうが、三遠式が多い東海地域においても破片銅鐸が近畿式に限られるとなると、何らかの理由が求められるべきである。

一つの解釈としては、三遠式が突線鈕3式段階で終焉を迎えた後は東海地域にも近畿式のみが流入していたため、銅鐸の最終消滅期に破碎の対象となったのは近畿式であったという考えがありえよう。ただ、この場合も三遠式と併行する突線鈕2式～3式の近畿式破片が東海地域でも少なからず認められるため、なぜ三遠式のみが破碎されず埋納されたのかという問題が残る。

破片銅鐸の用途の一つが青銅素材としての再利用にあったとすれば、再利用しうる銅鐸が乏しい集落で青銅器生産を行う場合には、みずからの破碎銅鐸片に加えて外部からの調達もありえたのではないか。逆にいえば、弥生後期末段階において多数の銅鐸を集積していた集落や地

域から、在地での需要をうわまわる破片を他に供給したケースも想定できるということである。そうした「流通元」を近畿式銅鐸の卓越する地域に求めれば、破片銅鐸が近畿式に限定される現象にも一定の説明が可能となる。

ただし、このような性格を持つ地域の候補はかなり限定されることになる。もっとも蓋然性が高いのは畿内中部の大和盆地である。大和盆地では突線鈕2式以降の「見る銅鐸」の完形鐸が認められないいっぽうで、近年では桜井市纏向遺跡、脇本遺跡、大福遺跡などでそれらの破片の出土事例が増えつつある。本来存在した「見る銅鐸」が、その役割を終えた後に破碎されたと考えれば整合的に整理ができる。また、扁平鈕式以前の「聞く銅鐸」が多い割には「見る銅鐸」が少なく、かつ「見る銅鐸」の破片出土事例が複数認められる河内や和泉も、大和にやや似た状況を呈していると見ることができる。大和盆地から河内や和泉に至る大和川流域は、庄内式期において列島のさまざまな地域からのモノや情報が行き来する先進地域であり、ヤマト政権成立へ向かう倭人社会の中では中核的な役割を担っていた。畿内政体のシンボルであった「見る銅鐸」を青銅素材に転化させるといういわば価値観の激変を、そうした地域の先進性に重ねて理解することも可能である。

ただ、破片銅鐸の出土例はすでに島根県から静岡県東部にまたがる35遺跡以上に及んでおり、さらに増加の一端を辿っている。そのすべてについて出土地近辺に青銅器製作遺跡が存在したと考えることは適切ではあるまい。破片銅鐸の中には、沼津市藤井原遺跡、伊豆の国市段遺跡、徳島市庄・蔵本遺跡例のように飾耳部分に穿孔したものや、守山市下長遺跡、名古屋市・清洲市朝日遺跡例のように対称的な双頭渦文部分を意図的に選別したと思われる飾耳片のように、青銅素材よりも装飾品としての性格をもったものが存在している⁶⁾。すでに述べたように、これらは邪馬台国時代の「青銅器序列」において小有力層の地位表示の役割を担ったものととらえられる。

以上をまとめるなら、破碎されて細片となった銅鐸は、その集落内で青銅器素材として用いられたもの、青銅器素材として集落外に流通したもの、そして有力者の地位表示のための小さな「威信財」として所持されたものというおおむね3つの扱われ方で、庄内式期を中心に特有の意義を持って存在していたと考えられるのである。

Ⅶ. おわりに

小論では、近年出土例が急増しつつある破片銅鐸を俎上にあげ、それらが小片となるプロセスを金属工学的に検討するとともに、2世紀末～3世紀中葉という限られた時間の中で存在した意義について二、三の考古学的考察を行った。

金属工学的な分析においては、実験の所見に基づいて、700℃以上に加熱することで製品中の鉛の局部溶融現象が生じ、連結亀裂によって等分割破壊に至ったと判断した。700℃以上でこうした現象が見られたことは、成功した銅鐸破碎実験において経験的に知られた加熱温度とほぼ整合的であり、銅鐸破碎のメカニズムについて合理的な説明を提示することができたと考える。

こうして生みだされた破片銅鐸の持つ意義については、青銅器素材としての利用とともに邪馬台国時代の「青銅器序列」の中で地位を表示する威信財の役割を推定した。そして、素材、威信財のいずれの場合においても、破片としての流通があったことを考えた。

破片銅鐸の出土事例は今後も増加し、いずれ完形の近畿式埋納銅鐸の数をしのぐ日が来ることさえ予想される。一辺数cmの小さな遺物ではあるが、破片銅鐸の性状や考古学的意義を多面的に検討することが、ヤマト政権成立過程における重要な研究論点となる日も遠くないものと思われる。

本研究の実施にあたっては桜井市立埋蔵文化財センター、兵庫県立考古博物館から破碎実験の情報やレプリカ試料の提供などについて多大な援助を得た。その負うところを記し、こころから感謝の意を表したい。なお、小論は福永と近藤が実施した平成23～24年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）および平成25年度大阪大学文学研究科共同研究による成果の一部であり、執筆は近藤が第Ⅴ章、福永がその他の章を担当した。

【註記】

- 1) 横軸突線が鰭を貫く突線鈕5式になって、近畿式と三遠式の工人の統合があったと考えたのは佐原眞氏であった。近年、難波洋三氏は近畿式における横軸突線の出現する突線鈕4式をより重視して、判断は容易でないと断りながらも「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の工人集団の統合があったとすれば、

それは突線鈕5式成立時よりも突線鈕4式成立時であった可能性が高いと考える」と述べている（難波2005、p.132）。

- 2) 表1の近畿式の中には、不規則な形の大小破片が1ヶ所から多数確認された田原市柊銅鐸のように、当初から破片として遺跡に埋没していたか否かの吟味を要する例も若干含まれるが、破片銅鐸がほぼ近畿式で占められる傾向には疑いの余地はない。
- 3) 桜井市による銅鐸破碎実験に関しては同市教育委員会橋本輝彦氏、福辻淳氏から御教示を得た。
- 4) 突線鈕式銅鐸や広形銅矛が消滅した後、庄内式期から布留式最古段階頃にかけては、列島製大型青銅器の空白期である。この間の青銅器としては城陽市芝ヶ原墳墓の銅釧・四獣形鏡、茨木市郡遺跡壺棺墓の唐草文鏡？などが、直径12cmほどで最大サイズとなる。
- 5) 庄内式期に存在した完形の小型青銅器としては、10cm前後に面径のピークがある小型中国鏡、8cm前後に面径のピークがある小型倣製鏡などがあり、さらに下位にはそれよりも小さなものが主体を占める中国鏡片、破片銅鐸などが位置づけられていたと推定している。数十cmもある破片銅鐸が多数出回るような状況は、この青銅器序列を乱すものとして忌避されたという理解になる。
- 6) 難波洋三氏は、飾耳片に穿孔を施す事例（藤井原遺跡、段遺跡）や飾耳片が墓葬に伴った事例（出雲市青木遺跡）などが近畿式完形銅鐸の分布圏外にのみ認められることから、これらを近畿式銅鐸の祭祀を受け入れていなかった地域における独自の取扱いであると理解する（難波2005）。ただ、筆者は、下長遺跡のように双頭渦文の装飾性を利用した破片が見られることや、2013年に近畿式分布圏内の徳島市庄・蔵本遺跡において穿孔のある飾耳片が出土したこと（2013年2月8日新聞報道）などを重視して、所持者の地位を表示しようとする小さな威信財としての役割を持った破片銅鐸が一般的に存在したものとする。また、北部九州の広形銅矛や三遠式銅鐸と違って、近畿式銅鐸の破片のみが地位を示す役割を持ったのは、邪馬台国期の政治的な主導権を握った畿内勢力がかつてシンボルとしていた青銅器であるという由緒が反映していたものと推定している。

【参考文献】

- 魚島純一・小泉武寛・難波洋三・植地岳彦 2010「復元青銅器の破碎実験」日本文化財科学会第27回大会ポスター発表要旨
- 佐原眞 1960「銅鐸の鑄造」『世界考古学大系』平凡社
- 田中琢 1970「まつりからまつりごとへ」『古代の日本』5 近畿、角川書店
- 田辺昭三・佐原眞 1966「近畿」『日本の考古学』Ⅲ、河出書房
- 都出比呂志 1983「環濠集落の成立と解体」『考古学研究』第29巻第4号

寺澤薫 1991「弥生時代の青銅器とそのマツリ」『考古学 その見方と解釈』上 筑摩書房

中村弘・潤井真二 2009「破砕銅鐸のナゾに迫る」『兵庫県立考古博物館 News』Vol.3

難波洋三 1986「銅鐸」『弥生文化の研究』6 雄山閣

難波洋三 2005「銅鐸の埋納と破壊」『西側遺跡（Ⅰ）』豊橋市教育委員会

難波洋三 2007『難波分類に基づく銅鐸出土地名表の作成』平成15年度～18年度科学研究費補助金研究成果報告書

春成秀爾 1982「銅鐸の時代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集

福永伸哉 2001『邪馬台国から大和政権へ』大阪大学出版会

福永伸哉 1998「銅鐸から銅鏡へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店

表1 破片銅鐸の出土一覧

種 類	番号	遺跡または出土地	型 式	部 位
【近畿式】	1	徳島市庄・蔵本	4式か5式	重弧文飾耳（穿孔有り）
	2	高知県春野町西分増井	扁平鈕式新～突線鈕2式	鈕菱環部
	3	島根県出雲市青木	3Ⅰa式の可能性	双頭渦文飾耳
	4	鳥取県鳥取市青谷上寺地①	3Ⅰb～5Ⅰ式	身
	5	鳥取県鳥取市青谷上寺地②	4式か5式	身
	6	鳥取県鳥取市青谷上寺地③	近畿式新段階	身
	7	兵庫県豊岡市女代	2式	鰭
	8	岡山県岡山市高塚	2式か3式	身
	9	岡山県玉野市沖海底	3Ⅰb～3Ⅱ式の可能性	身
	10	兵庫県豊岡市久田谷	5Ⅱ式	117片
	11	兵庫県宍粟市穴尾	4式か5式	鈕および双頭渦文飾耳基部
	12	兵庫県姫路市大井川第6地点	近畿式か3式の可能性	鰭あるいは鈕脚壁か
	13	大阪府豊中市利倉	2式か3Ⅰa式の可能性	重弧文飾耳
	14	大阪府豊中市利倉南	2式か3Ⅰ式	鈕
	15	大阪府八尾市亀井①	4式か5Ⅰ式	鰭下端
	16	大阪府和泉市池上曾根①	4式か5式	身
	17	大阪府和泉市池上曾根②	2式か3式	身
	18	奈良県桜井市纏向①	3Ⅰb～5Ⅱ式	双頭渦文飾耳
	19	奈良県桜井市纏向②	3～5式	鰭
	20	奈良県桜井市脇本①	4～5Ⅰ式	身
	21	奈良県桜井市脇本②	近畿式か	身
	22	奈良県桜井市脇本③	近畿式か	身
	23	奈良県桜井市大福①	2～4式	身
	24	奈良県桜井市大福②	3式の可能性	舞
	25	和歌山県新宮市ごとびき岩	4式か5Ⅰ式	22片
	26	滋賀県守山市下長	2式か3Ⅰa式の可能性	双頭渦文飾耳
	27	福井県坂井市高柳・下安田①	3Ⅰb～5Ⅱ式	鈕
	28	福井県坂井市高柳・下安田②	近畿式	身
	29	福井県坂井市高柳・下安田③	近畿式か	不明
	30	三重県伊賀市西場谷C	4式の可能性	鰭下端
	31	三重県伊賀市千歳	3Ⅱa～5Ⅱ式	双頭渦文飾耳
	32	三重県鈴鹿市一反通	3Ⅰa～5Ⅰ式	鰭下端
	33	三重県伊勢市桶子	3～5式	鰭
	34	三重県四日市市金塚	扁平鈕式新～突線鈕2式	鈕菱環部
	35	岐阜県大垣市荒尾南遺跡19地点	3Ⅰb～5式	双頭渦文飾耳
	36	愛知県名古屋朝日①	3Ⅱa～5Ⅱ式	双頭渦文飾耳
	37	愛知県名古屋朝日②	3Ⅰa～3Ⅱa式の可能性	双頭渦文飾耳
	38	愛知県名古屋見晴台	2式の可能性	双頭渦文飾耳
	39	愛知県豊橋市西側	3Ⅰb～3Ⅱ式の可能性	双頭渦文飾耳
	40	愛知県豊橋市瓜郷	近畿式か	裾あるいは区画内か
	41	愛知県田原市桃1号	5Ⅰ式（B系列）	1・2号の合計196片
	42	愛知県田原市桃2号	5Ⅱ式（B系列）	〃
	43	静岡県浜松市松東①	3Ⅰa～3Ⅱa式	双頭渦文飾耳
	44	静岡県浜松市松東②	2式	鈕の大破片
	45	静岡県浜松市伊場遺跡梶子地点	3Ⅰb～3Ⅱ式	重弧文飾耳
	46	伝静岡県浜松市南海岸①	3Ⅰb～3Ⅱ式	双頭渦文飾耳
	47	伝静岡県浜松市南海岸②	3式の可能性	鰭
	48	静岡県袋井市掛之上	2式か3式古の可能性	身
	49	静岡県沼津市藤井原	3Ⅱa～5Ⅱ式	双頭渦文飾耳（穿孔有り）
	50	静岡県伊豆の国市段	4式か5式	重弧文飾耳（穿孔有り）
【三遠式】	1	(伝)長野県松本市宮淵	三遠1式か2式	鈕菱環部
【古型式】	1	愛媛県四国中央市上分西	扁平鈕式古	鈕完形
	2	香川県さぬき市森弘	外縁付鈕1式～扁平鈕式新	舞・身・鰭 計7片
	3	香川県善通寺市旧練兵場	扁平鈕式新	鈕・身・飾耳 計6片
	4	島根県松江市西川津①	外縁付鈕2式か扁平鈕式古	身・鰭
	5	島根県松江市西川津②	外縁付鈕式～扁平鈕式	身
	6	鳥取県鳥取市青谷上寺地④	扁平鈕式新	鰭
	7	鳥取県鳥取市松原田中	外縁付鈕2式か扁平鈕式古	身（内面突帯有り） 計2片
	8	大阪府八尾市亀井②	扁平鈕式か	鈕
	9	奈良県田原本町唐古・鍵	外縁付鈕2式～扁平鈕式新	身
	10	和歌山県上富田町田熊	型式不明	身

難波2007を参考に、その後の出土事例を追加した。

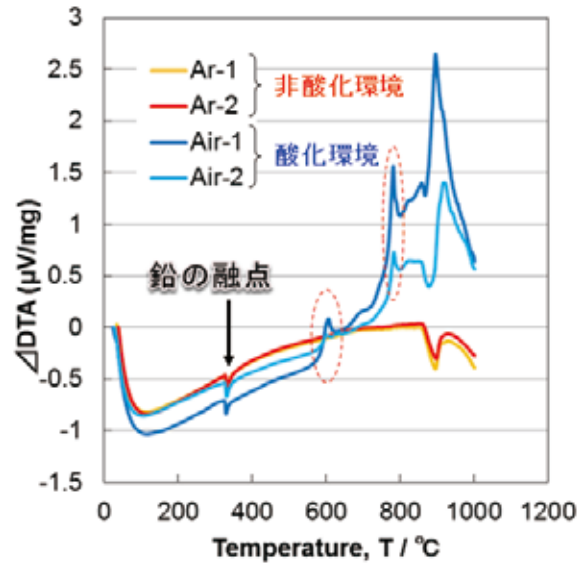


図1 青銅試料サンプルの示差熱量分析結果（大気加熱時の酸化現象の影響）

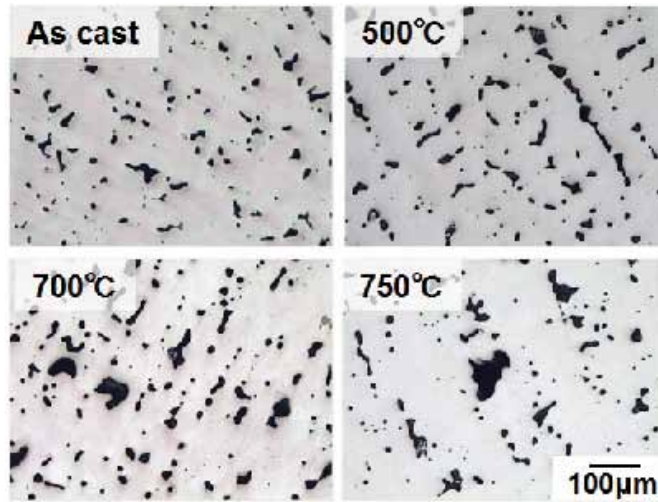


図2 高温加熱による青銅試料サンプルの組織変化（鉛の溶融・合体成長の観察）

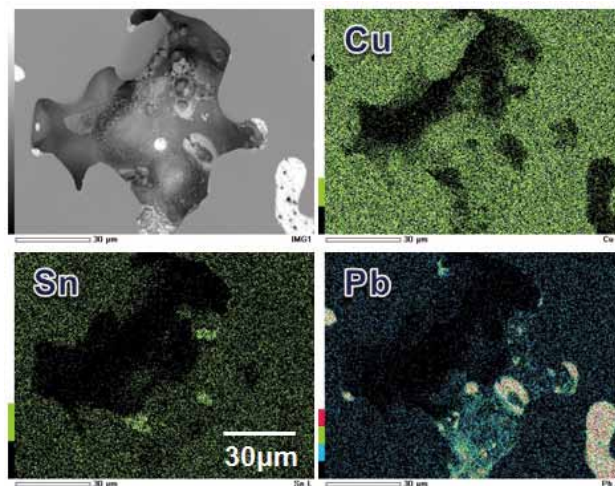


図3 700°C加熱サンプルにおける溶融鉛成分の粗大化に関する EDS 分析結果

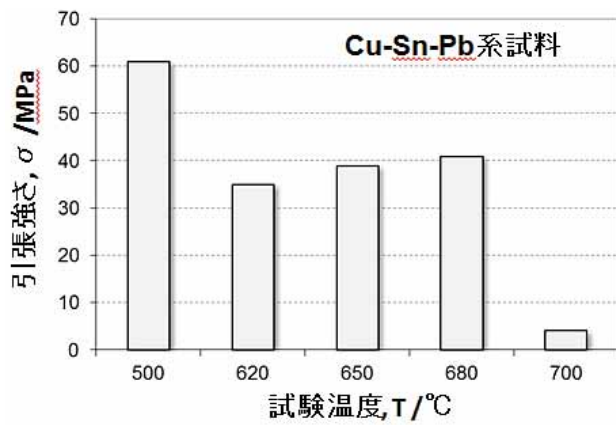


図4 青銅試料サンプルの高温引張試験結果と試験後の試料片外観

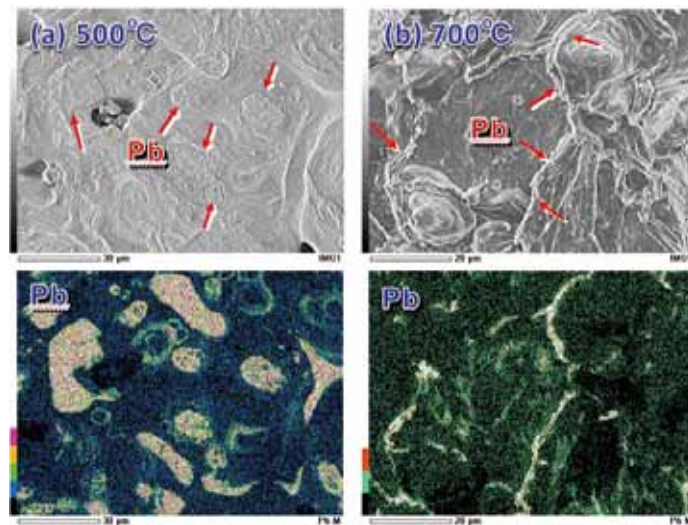


図5 700°Cでの高温引張試験後の破断面のSEM-EDS分析結果

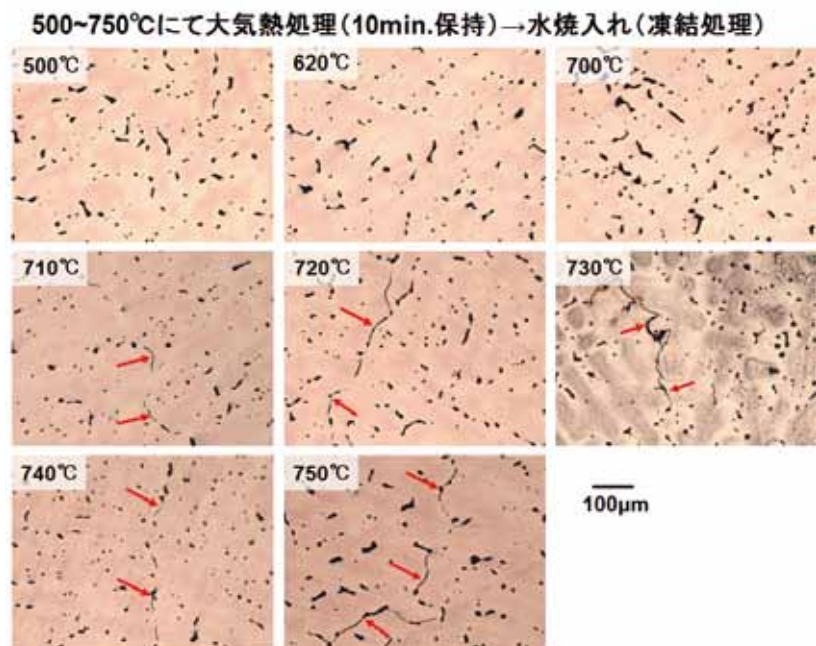


図6 高温加熱状態から水中への急冷による青銅試料の凍結組織観察（溶融鉛の分布状態の評価）

纏向遺跡における空間変遷情報の可視化

兎 玉 駿 介

目 次

I. はじめに	35
II. 分析の手続き	35
III. 空間変遷情報の可視化	36
IV. おわりに	38

論文要旨

纏向遺跡の調査次数は既におよそ180次に達し、纏向型前方後円墳を含め、その間に検出された遺構・遺物等のティピカルな諸要素については既に十分な整理がなされている。

しかし、そのような諸研究によって、徐々に遺跡の全貌が明らかになりつつある一方で、諸資料を網羅的に集成したデータベースの作成を行い、その全体像の変遷をたどった研究例は存在していない。そして、集成された資料に基づき、遺跡の変遷を視覚化した例は少ないと考えられる。

そこで、本研究では、これまでの調査成果の内、報告書等によって公開済みの分に関して、矢部編年に基づき、遺構の庄内式期・布留式期の各時期における諸属性をできるだけ詳細に入力したデータベースの作成を行い、さらにその視覚化を行った。

その結果として、これまで以上に詳細に、遺跡変遷の様相を視角的に提示することができた。そして、庄内式期と布留式期という大きな時期区分で纏向遺跡を把握する以上に詳細に、庄内3式期や布留1式期といった各時期毎にも「画期」を抽出しうる可能性を示唆することができた。

児玉 駿介（こだま しゅんすけ）

同志社大学大学院文化情報学研究科博士前期課程

纏向遺跡における空間変遷情報の可視化

見 玉 駿 介

I. はじめに

纏向遺跡の調査次数は既に180 以上に達し、纏向型前方後円墳を含め¹⁾、その間に検出された遺構・遺物等の典型的な諸要素については既に十分な整理がなされている。

しかし、そのような諸研究によって、徐々に遺跡の全貌が明らかになりつつある一方で、諸資料を網羅的に集成したデータベースの作成は行われていない。

そして、集成された資料に基づき、遺跡の変遷を視覚化した例は少ないと考えられる。

そこで、本研究では、これまでの調査成果の内、報告書等によって公開済みの分に関して、矢部編年に基づき²⁾、遺構の庄内式期・布留式期の各時期における諸属性をできるだけ詳細に入力したデータベースの作成を試み、さらに空間変遷情報の視覚化を行った。

II. 分析の手続き

本稿以前に纏向遺跡の空間変遷を視覚化した先行研究は、まず報告書『纏向』における研究史的遺跡範囲図³⁾、次に寺澤薫氏による纏向地域の復元図⁴⁾、そして橋本輝彦氏による、纏向遺跡の旧地形と墳墓・遺構の分布図の⁵⁾、大きくは3つが存在する。

以上の諸研究をふまえ、本研究では、これまでの成果の総合と、より詳細に纏向遺跡の範囲を把握することを目的とした作業を行った。

具体的には、フリーソフトウェアである QGIS 2.0 を用い、2013 年 12 月現在までの、纏向遺跡の発掘調査で検出された遺構のうち、報告書や概報等に遺構図が掲載され、かつ時期含む詳細が明確なものについては、集成しデジタル化した。その際参照した報告等の全てについては各年毎にまとめた上、文末に掲載してある。なお、遺構

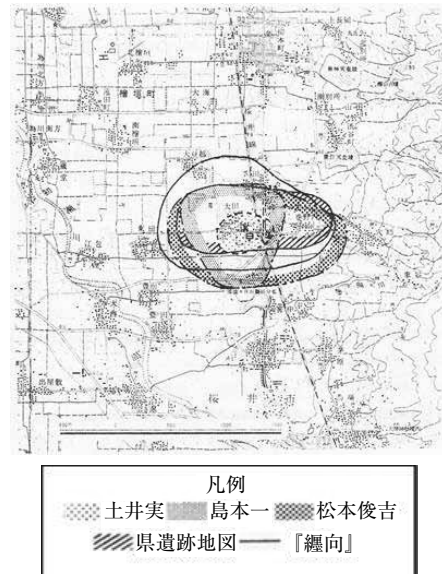


図1 研究史的遺跡範囲図（石野1976）

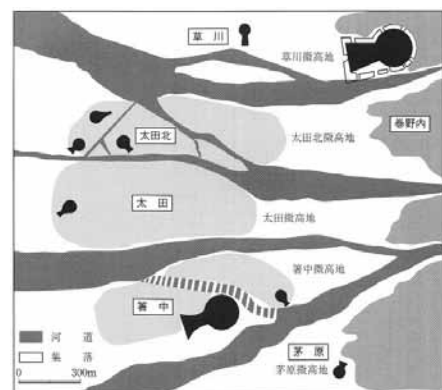


図2 纏向地域の復元図（寺澤1984）

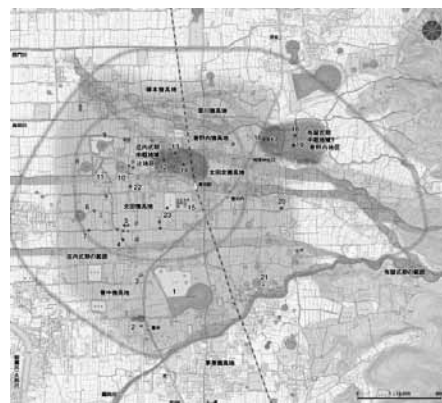


図3 纏向遺跡の旧地形と墳墓・遺構の分布図（橋本2007）

の形状についてはポリゴンデータ（閉じた面のデータ）、所属時期等をその属性値として入力した。

次に、QGIS 2.0のプラグインを用いてヒートマップ分析を行い、時期ごとの遺構の分布範囲・密度を色の濃淡で表現した。

地形データは数値標高モデル (DEM)10m メッシュ（標高）を⁶⁾、また復元流路については安井隆浩氏による成果を参照した⁷⁾。

以上、「遺跡の範囲」の把握という点に関しては、前述の通り、本稿では可能な限り細かな時期毎の遺構分布の分析をベースとした。

加えて、総合的な把握という観点から、古墳を含む主要な諸要素の分布の変遷も図上にプロットした。

無論、纏向遺跡は日々進化しており、常に新たな資料が蓄積されている。また、搬入土器含む多種多様な遺物の情報や、古環境に関する情報等、追加していかなくてはならない所属性は枚挙に暇がない。しかし、これらの入力作業は一朝一夕に終わるものではなく、また到底一人でなし得るものではないし、さらにデータを総合的に分析し、最終的には何らかの意味付けをしていかなくてはならない。したがって、今回はあくまでも膨大な資料のうちの極わずかな要素に着目したうえでの分析であるということをご了承頂きたい。

以上をふまえた上で、次章では、各次期における変遷の様相について図を提示しながら論述する(図4～10参照)。調査回数と調査地区は図4を参照されたい。

Ⅲ．空間変遷情報の可視化

(1) 庄内0式期(図5)

纏向遺跡の出現期である。

太田地区に大溝が掘削され、低地に土坑などが散見される。

(2) 庄内1式期(図6)

遺構は太田・辻微高地を中心に分布する。

いわゆる「纏向型祭祀」が想定される辻地区の土坑4をはじめとし⁸⁾、豊富な遺物を含む土坑が分布している。

遺構分布の西端は東田地区に及ぶが東端は太田微高地で収まっており、山際まで遺構が展開していくのはこれ

より後のことである。

各遺構から検出される土器に関しては、大和第Ⅵ様式の系譜を引く甕とは別に庄内式の甕が出現し、庄内式甕はこの後、第Ⅵ様式系甕を凌駕する勢いで増加していくとされる。しかし、このような状況が顕著なのは纏向遺跡や他の限定された地域における事柄であり、同じ盆地内部でも庄内式期から布留0式期までは在地・第Ⅵ様式系の土器が庄内・布留式を圧倒する遺跡がほとんどであることは注意すべきとの事柄であるとの橋本輝彦氏の指摘がある⁹⁾。

また、纏向遺跡には、東海系の土器を中心に、列島各地の土器が持ち込まれていることは既に1976年の報告書『纏向』の段階から指摘されていることである¹⁰⁾が、太田微高地における土坑を中心として、搬入土器の分布が顕著となっている¹¹⁾。

加えて、辻土坑4と同様に、近年話題となることの多い、木製仮面を含む特殊な木製品が出土した土坑（井戸との指摘もある）も、太田微高地南部で検出されている。

以上のことなどを総括すると、この時期の景観は、石野氏が想定する「ニイナメオスクニ」儀礼のようなものであろうか、何らかのマツリが行われた後に遺物を廃棄あるいは埋納したことを伺わせる、多量の木製品と搬入土器を含む土坑ないしは井戸が太田・辻微高地内にまとまっていた様相が想定される¹²⁾。

なお、今のところ竪穴式住居の遺構は検出されておらず、代わりに無数の柱穴が見つかったことも、集落としての纏向遺跡の特殊性を考える上で重要であろう。

(3) 庄内2式期(図7)

厳密には築造時期の上限が分からないものの、近年辻地区において居館の存在を伺わせる建造物跡が検出されている¹³⁾。

これらは辻河道の南において検出された3棟の掘立柱建物と柱列あるいは柵からなる建物群で、該期においてはこの地区が纏向遺跡の居館域であり、建物群は、庄内式期の前半段階頃（3世紀前半頃）に建てられたとみられるが、庄内3式期末（3世紀中頃）には柱材の抜き取りが行われ、廃絶したとされる。

このうち、中心的な位置を占める大型の掘立柱建物は南北4間（約19.2m）、東西4間（約12.4m）の規模に復

元されており、当時としては国内最大の規模と指摘されている。

(4) 庄内3式期(図8)

石塚、勝山、矢塚およびホケノ山古墳と、メクリ1号墳の築造が想定される¹⁴⁾。

メクリ1号墳は纏向遺跡において確認されている唯一の前方後方墳である。則ち、前方後円墳成立の地に前方後方墳が築造された事実は首長層の階層性を考える上で極めて重要であると考えられる。

また、古墳のみならず、遺構の分布範囲も大きく広がる様相が看取される(図7)。

則ち、古墳築造の状況と併せて、該期も纏向遺跡における拡大の画期として把握しても差し支えないのではないだろうか。

したがって、これまで纏向遺跡は、時期別の変遷を視覚的に提示した上で論じられることが少なかったということは先に述べた通りであるが、以上のように、細かく見れば時期ごとに量的にも質的にも細かく画期を設定する可能性があるのではないだろうか。

(5) 布留0式期(図9)

遺構分布全体を一括りに俯瞰すれば、その広がり是最盛期を迎える。

箸墓古墳及び東田大塚古墳の築造が想定される。また、方形周溝墓や木棺墓、土器棺墓も確認されている。

巻野内家ツラ地区には後述する導水施設の地点にV字溝が掘削される。一方で、纏向大溝は埋没に向かう。

遺物では、布留式甕が出現し、後述の通りそれらは他地域へと広まりを見せる一方、纏向遺跡へ搬入される他地域の土器の量はピークを迎えるとされる。なかでも韓式系土器の存在は注目される。また、先述のV字溝から出土した弧文板や東田地区の弧文石など、特殊なモチーフを備えた遺物も出土し、箸墓古墳周濠からは最古例とされる木製の輪鏝も出土している。

なかでも、該期における最大の出来事は、箸墓古墳の築造であろう。

確かに、単純に墳丘の規模のみ着目すれば、それまでの100mクラスのいわゆる纏向型前方後円墳から大型の箸墓古墳へは明らかに飛躍が認められる。しかし、それ

は築造規格・構築法等の他の要素の一切を捨象した上での認識であり、また、単純に規模だけ見ても、キビの桶築墳丘墓以前と以後との飛躍の方が相対的に大きいという見方も成立するではないか¹⁵⁾。確かに箸墓出現が大きな出来事であることに違いはないであろうが、先述の庄内3式期の様相も含め、箸墓の出現のみならず、纏向全体や、ひいては他の地域まで含めた広い視野で「画期」を考える余地があるのではないか。

さらに、巻野内家ツラ地区においては、韓式系土器が伴うV字溝が掘削される。家ツラ地区は纏向地域の東端にあたり、その立地から、開発が纏向地域の東側の周縁にまで及んだことも看取できるとも考えられる。

このように、大型前方後円墳の築造を含む開発が纏向地域の全域に及ぶようになるのと併行して、各地からもたらされる搬入土器量はピークを迎えるとされ、そのなかには韓式系土器も散見される。

韓式系土器は、90次調査で検出されたV字溝から出土しており、その溝は、50次調査によって検出されたV字溝の上流部分にあたるとされ、そのことから、後述の導水施設を含めた一連の開発の背景に渡来人の存在を想定する研究者もいる¹⁶⁾。また、箸墓古墳において出土した木製輪鏝は現在知られるなかでは最古例とされ、これも渡来的な要素のひとつとして数えられる可能性がある。

以上が主な遺構・遺物であるが、他にも、方形周溝墓、木棺墓、土器棺墓が一定数確認される。

繰り返しになるが、これらの諸要素を仮に一括りにして俯瞰すれば、庄内式期に比してかなり広範な空間分布を示すようになったといえ、また、先述の通り、その立地がより山際に迫るものとなったことは興味深いことかもしれない。

さて、搬入土器で特筆すべきものとして、先述の「周縁」域である家ツラ地区においては、韓式系土器の出土も確認され、そのことから渡来系技術者集団の存在を想定する研究者もいるようである。ならば、多少想像をたくましくすると、この時期の、鍛冶関連遺構・遺物や、箸墓古墳周濠において出土した木製鏝とされる遺物も、やはり渡来色の強い遺物であり、それらの要素と箸墓を画期とする大規模開発や、低湿地から山際の周縁へという開発の立地の変化も関係しているのであろうか。いずれにせよ、諸要素を分断して考えるのではなく、相互の関係

性を把握しつつ考察することが重要であろう。

逆に、纏向遺跡からは布留式甕などが各地へと拡散する。加えて、尾崎花地区における区画溝の掘削が行われる。しかし、先述の通り、その内部は未調査であるため、当該時期に纏向遺跡の中核が移転したと考える説もあるものの、今のところ、実態は不明である。従って、非常に広範かつ濃密に遺構が分布するようになる時期ではあるものの、仮にそれを一括りにした場合、該期におけるその中核は今のところ判然としない。しかし、その景観を、既に古墳時代中期のそれを先取りしたものとみなす研究者もあり、一層今後の調査の進展が待たれる¹⁷⁾。

(6) 布留1式期(図10)

布留0式期に比して遺構の分布範囲は縮小する。

典型的な要素として、まず最も着目すべきなのが、竪穴式住居が散見されるようになることであろう。

つまり、ここにきて纏向遺跡における居住の形態が、一般的な集落のそれと変わらない性格を帯びてくるという見方ができるのではないだろうか。

したがって、布留1式期以前と以後とでは、おそらく纏向遺跡そのものの性格が変質した蓋然性が高いのであり、このことは遺構分布範囲の分析だけではなんとも判断し難く、質的な側面から考察すべき事なので、今後の課題としたい。

また、坂田地区において、形象埴輪が出土している点も見逃すことはできない。

以上、遺跡全体としての規模が縮小しつつあり、かつ、布留0式期との性格・質的な断絶が伺えるのが該期であり、そういう意味合いで、単なる縮小期として片付けられないということは改めて確認しておきたい。

(7) 布留2式期(図11)

この頃になると、纏向遺跡内部では遺構や遺物はほとんど見られなくなり、集落は完全に廃絶する。

IV. おわりに

以上、各時期毎に纏向遺跡の変遷を概観してきた。

纏向遺跡では発掘調査が重ねられ、180次に至る調査が行われており、次第に資料が蓄積されつつある。が、

今もって全体の2%程度の領域しか調査されていないとされ¹⁸⁾、そのネームバリューに反して、遺跡の全貌は未だに詳らかではない。

従って、本研究は、極限られた資料を用いての分析であったため、これをもってその全貌が明らかになったなどとは無論言うことなど出来ない。しかし、今、公開されている資料を駆使し、どの程度確かなことが言えるのかを整理することには多少なりとも意義があるように思われた。

というのも、遺構変遷図の類は、本来であれば、大規模かつ面的な調査が行われた遺跡に関して作成するのが定石であろうが、纏向遺跡に関しては、例え極わずかな調査であっても、特に国家形成史においてその重要性が計り知れないことに最早疑いの余地は無いのであり¹⁹⁾、したがって、個々の典型的な要素以外にも、網羅的に資料を参照した上で詳細な分析を行うことには意義があるように思われた。

さて、あらためて、ここまでの分析をまとめると、全体的には庄内式期まで沖積平地にまとまったかたちで古墳や遺構が分布し、庄内3～布留0式期に至って急激にその分布は拡大していくことになる。しかし、その後は西側から急激に衰退していく様子が看取でき、布留1式期の段階で量的にも質的にも衰退がはじまり、布留2式期に属する遺構はほとんど見られないようである。

本稿で述べていることの多くは報告書なども含め、既に多くの人々によって指摘されていることではあるが、それらに加えて、より細かな分析を行うことで、庄内3式期や布留1式期といった「画期」を抽出し得たと考えられる。

無論、遺構の変遷を視覚的に提示し、「画期」をいくらか抽出しても、最終的にそこに何らかの意義を見出さなければ意味は無い。しかし、今の筆者には、長い年月をかけて培われた、膨大な蓄積に対して何らかの史的評価を下すというのは荷が勝ちすぎている。今後の課題とさせていただきます。

最後になるが、筆者が特に重要だと考えるのは、集成する資料の範囲や内容、分析の手続きや結果を誰にでも分かる形で「可視化」することである。

そして、先述の通り、纏向遺跡の重要性が、ごく一部のの人々ととどまらないことはあえてここで強調するまで

もない。従って、纏向遺跡から得ることができるありとあらゆる資料・データ・知見を、今後も広く共有化していくことこそ肝要であると考えている。

【註記】

- 1) 寺澤薫「纏向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズ刊行会 1988年および、寺澤薫「前方後円墳出現論－纏向型前方後円墳再論－」『王権と都市の形成史論』吉川弘文館 2011年
- 2) 寺澤薫「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』1986年
- 3) 石野博信「研究史」『纏向』桜井市教育委員会 1976年
- 4) 寺澤薫「纏向遺跡と初期ヤマト政権」『橿原考古学研究所論集』第六 吉川弘文館 1984年
- 5) 橋本輝彦『ヤマト王権はいかにして始まったか～王権成立の地 纏向～』(財) 桜井市文化財協会 2007年
- 6) URL : <http://fgd.gsi.go.jp/download/>
- 7) 安井隆浩「奈良県纏向遺跡の立地基盤と古地形環境」『東田大塚古墳』(財) 桜井市文化財協会 2006年
- 8) 石野博信「三輪山麓の祭祀の系譜－大型土壙と建物跡－」『纏向』桜井市教育委員会 1976年
- 9) 橋本輝彦「纏向遺跡の変遷と近年の調査」『東アジアの古代文化』第100号 大和書房 1999年
- 10) 関川尚功「畿内地方の古式土師器」『纏向』桜井市教育委員会 1976年
- 11) 註8) 文献
- 12) 註8) 文献
- 13) 桜井市教育委員会編 桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書第40集 纏向遺跡発掘調査概要報告書－トリイノ前地区における発掘調査－』(財) 桜井市文化財協会 2013年
- 14) 古墳の築造時期は、寺澤薫氏の御教示による。
- 15) 註1) 文献
- 16) 橋本輝彦、村上薫史「纏向遺跡巻野内地区遺構群の特殊性と韓式系土器」『古代学研究』第141号 1998年
- 17) 橋本輝彦「豪族居館と大王の宮」『古墳時代の考古学』同成社 2013年
- 18) 註13) 文献
- 19) 註4) 文献および
寺澤薫「纏向遺跡出現の歴史的意義－纏向遺跡再論－」『王権と都市の形成史論』吉川弘文館 2011年

【参照報告書等】

<1976年>

橿原考古学研究所編『纏向』桜井市教育委員会

<1977年>

橿原考古学研究所「纏向遺跡の調査 太田39番地地点」『奈良

県遺跡調査概報1976年度』

橿原考古学研究所「石塚古墳の調査奈良県遺跡調査概報一九七六年度橿原考古学研究所」『奈良県遺跡調査概報1976年度』

橿原考古学研究所「纏向遺跡の調査 巻之内249番地地点」『奈良県遺跡調査概報1976年度』

橿原考古学研究所「纏向遺跡の調査 太田126番地地点」『奈良県遺跡調査概報1976年度』

橿原考古学研究所「纏向遺跡の調査 太田78番地地点」『奈良県遺跡調査概報1976年度』

<1978年>

橿原考古学研究所「桜井市纏向遺跡発掘調査概報 巻之内376番地地点」『奈良県遺跡調査概報1977年度』

橿原考古学研究所「桜井市纏向遺跡発掘調査 草川152番地地点」『奈良県遺跡調査概報1977年度』

<1979年>

橿原考古学研究所「桜井市 纏向遺跡発掘調査概報－昭和53年度－巻ノ内223－1番地点の調査」『奈良県遺跡調査概報1978年度』

橿原考古学研究所「桜井市 纏向遺跡発掘調査概報－昭和53年度－太田5－1番地点の調査」『奈良県遺跡調査概報1978年度』

橿原考古学研究所「桜井市 纏向遺跡発掘調査概報－昭和53年度－辻64－1番地地点の調査」『奈良県遺跡調査概報1978年度』

橿原考古学研究所『纏向遺跡東田農業用水路発掘調査概報』

<1980年>

桜井市教育委員会『纏向遺跡昭和54年度遺跡範囲確認発掘調査概報』

桜井市教育委員会『纏向遺跡昭和54年度遺跡範囲確認発掘調査概報』

<1981年>

桜井市教育委員会『纏向遺跡昭和55年度遺跡範囲確認発掘調査概報』

桜井市教育委員会『纏向遺跡昭和55年度遺跡範囲確認発掘調査概報』

桜井市教育委員会『纏向遺跡昭和55年度遺跡範囲確認発掘調査概報』

<1982年>

桜井市教育委員会『纏向遺跡昭和56年度遺跡範囲確認発掘調査概報』

桜井市教育委員会『纏向遺跡昭和56年度遺跡範囲確認発掘調査概報』

桜井市教育委員会『纏向遺跡昭和56年度遺跡範囲確認発掘調査概報』

<1984年>

橿原考古学研究所附属博物館「纏向遺跡（桜井市纏向）」『大和を掘る 1983年度発掘調査速報展4』

橿原考古学研究所「纏向遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1983年度』

<1985年>

橿原考古学研究所「桜井市 纏向遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1984年度』

<1986年>

橿原考古学研究所附属博物館「纏向－東田地区－」『大和を掘る 1985年度発掘調査速報展86』

<1987年>

桜井市教育委員会『1987－7 桜井市巻野内 纏向遺跡発掘調査概要』

桜井市教育委員会『1987－12 桜井市大字太田 農業基盤整備事業に伴う発掘調査概報（纏向遺跡南飛塚地区）』

<1989年>

桜井市教育委員会「箸中遺跡王角地区発掘調査」『昭和63年度国庫補助事業にともなう発掘調査概報』

桜井市教育委員会「第5章纏向遺跡・穴師地区の発掘調査」『昭和63年度国庫補助事業にともなう発掘調査概報』

桜井市教育委員会『纏向石塚古墳 範囲確認調査（第4次）概報』

<1990年>

（財）桜井市文化財協会「箸中遺跡ビハクビ地区発掘調査概要」『桜井市内埋蔵文化財1989年度発掘調査報告書1』

<1991年>

桜井市教育委員会「第2章纏向遺跡・東田地区発掘調査報告書」『桜井市大西遺跡・纏向遺跡発掘調査報告書』

桜井市教育委員会『纏向遺跡太田北飛塚地区』

（財）桜井市文化財協会「纏向遺跡・太田南飛塚地区第2次発掘調査概要」『桜井市内埋蔵文化財1990年度発掘調査報告書2』

<1992年>

桜井市教育委員会『桜井市 纏向遺跡・東田・ホトケ地区発掘調査報告書』

（財）桜井市文化財協会「纏向遺跡太田念仏田地区の発掘調査」『桜井市内埋蔵文化財1991年度発掘調査報告書3』

<1993年>

橿原考古学研究所附属博物館「纏向遺跡巻之内尾崎花地区」『大和を掘る 1991年度発掘調査速報展12』

桜井市教育委員会『纏向遺跡石塚第1期整備事業範囲確認調査（第5次～第7次）概報』

桜井市教育委員会「第1章箸墓古墳南隣接地の調査」『箸墓古墳南上之宮遺跡第7次発掘調査報告書』

桜井市教育委員会『桜井市 纏向遺跡・第69・70次発掘調査報告書』

桜井市教育委員会『桜井市 纏向遺跡・第69・70次発掘調査報告書』

<1994年>

桜井市教育委員会『桜井市 纏向遺跡第74・76次発掘調査報告書』

桜井市教育委員会『桜井市 纏向遺跡第74・76次発掘調査報告書』

桜井市教育委員会『纏向遺跡石塚第1期整備事業範囲確認調査（第5次～第7次）概報』

<1995年>

桜井市教育委員会『纏向遺跡石塚第1期整備事業範囲確認調査（第5次～第7次）概報』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第79次発掘調査報告」『桜井市平成6年度国庫補助による発掘調査報告書2』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第80次発掘調査報告」『桜井市平成6年度国庫補助による発掘調査報告書2』

<1996年>

（財）桜井市文化財協会「纏向遺跡第82次発掘調査報告」『桜井市内埋蔵文化財1995年度発掘調査報告書1』

桜井市教育委員会『桜井市平成7年度国庫補助による発掘調査報告書2 ホケノ山古墳第1次調査概要報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第86次発掘調査報告」『桜井市平成7年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会『纏向石塚古墳第8次調査の概要（纏向遺跡第87次）』

（財）桜井市文化財協会「纏向遺跡第88次発掘調査報告」『桜井市内埋蔵文化財1996年度発掘調査報告書2』

（財）桜井市文化財協会「纏向遺跡第89次発掘調査報告」『桜井市内埋蔵文化財1996年度発掘調査報告書2』

（財）桜井市文化財協会「纏向遺跡第96次発掘調査報告」『桜井市内埋蔵文化財1996年度発掘調査報告書2』

<1997年>

桜井市教育委員会「纏向遺跡第90次発掘調査報告」『桜井市平成8年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会『桜井市 平成8年度国庫補助による発掘調査報告書2 ホケノ山古墳第2次調査概要報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第94次発掘調査報告」『桜井市平成8年度国庫補助による発掘調査報告書』

<1998年>

桜井市教育委員会「纏向遺跡第98次発掘調査報告」『桜井市平成9年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第99次発掘調査報告」『桜井市平成9年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第101次発掘調査報告」『桜井市平成9年度国庫補助による発掘調査報告書』

橿原考古学研究所「桜井市纏向遺跡第102次（勝山古墳第1

次) 発掘調査概報－勝山池改修に伴う一』『奈良県遺跡調査概報1997年度』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第103次発掘調査報告」『桜井市平成9年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第104次発掘調査報告」『桜井市平成9年度国庫補助による発掘調査報告書』

<1999年>

桜井市教育委員会「纏向遺跡第107次発掘調査報告」『桜井市平成10年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第108次発掘調査報告」『桜井市平成10年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第109次発掘調査報告」『桜井市平成10年度国庫補助による発掘調査報告書』

橿原考古学研究所「桜井市 勝山古墳第2次(纏向遺跡第111次) 発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1998年度』

<2000年>

桜井市教育委員会「纏向遺跡第114次発掘調査報告」『桜井市平成11年度国庫補助による発掘調査報告書』

橿原考古学研究所「桜井市勝山古墳第3次(纏向遺跡第116次) 発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報1999年度』

<2001年>

橿原考古学研究所「桜井市纏向遺跡(第117次調査) 発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報1999年度』

橿原考古学研究所編『大和の前期古墳 ホケノ山古墳調査概報』学生社

橿原考古学研究所編『大和の前期古墳 ホケノ山古墳調査概報』学生社

桜井市教育委員会「纏向遺跡第118次発掘調査概要報告」『桜井市平成12年度国庫補助による発掘調査報告書』

橿原考古学研究所「桜井市 箸中纏向遺跡第119・121次調査概報[箸中イツカ古墳・箸中西遺跡]」『奈良県遺跡調査概報2000年度』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第120次発掘調査報告」『桜井市平成12年度国庫補助による発掘調査報告書』

橿原考古学研究所「桜井市 箸中纏向遺跡第119・121次調査概報[箸中イツカ古墳・箸中西遺跡]」『奈良県遺跡調査概報2000年度』

橿原考古学研究所「桜井市勝山古墳第4次(纏向遺跡第122次) 発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報2000年度』

<2002年>

橿原考古学研究所『箸墓古墳周辺の調査』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第123次発掘調査報告」『桜井市平成13年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第124次発掘調査報告」『桜井市平成13年度国庫補助による発掘調査報告書』

橿原考古学研究所「桜井市 纏向遺跡(第125次調査) 発掘調

査概要報告」『奈良県遺跡調査概報2001年度』

(財) 桜井市文化財協会「纏向遺跡第126次発掘調査報告」

『桜井市内埋蔵文化財2001年度発掘調査報告書1』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第127次発掘調査報告」『桜井市平成13年度国庫補助による発掘調査報告書』

<2003年>

橿原考古学研究所「纏向遺跡第128次調査」『奈良県遺跡調査概報2002年度』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第129次発掘調査報告」『桜井市平成14年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第130次発掘調査報告」『桜井市平成14年度国庫補助による発掘調査報告書』

(財) 桜井市文化財協会「纏向遺跡第131次発掘調査報告」

『桜井市内埋蔵文化財2002年度発掘調査報告書1』

(財) 桜井市文化財協会「纏向遺跡第132次発掘調査報告」

『桜井市内埋蔵文化財2002年度発掘調査報告書3』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第133次発掘調査報告」『桜井市平成14年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第134次発掘調査報告」『桜井市平成14年度国庫補助による発掘調査報告書』

<2004年>

桜井市教育委員会「纏向遺跡第135次発掘調査報告」『桜井市平成15年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第136次発掘調査報告」『桜井市平成15年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第137次発掘調査報告」『桜井市平成15年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第138次発掘調査報告」『桜井市平成15年度国庫補助による発掘調査報告書』

<2005年>

桜井市教育委員会「纏向遺跡第139次発掘調査報告」『桜井市平成16年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第140次発掘調査報告」『桜井市平成16年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第141次発掘調査報告」『桜井市平成16年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第142次発掘調査報告」『桜井市平成16年度国庫補助による発掘調査報告書』

<2006年>

(財) 桜井市文化財協会『東田大塚古墳－奈良盆地東南部における纏向型前方後円墳の調査－』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第144次調査(纏向石塚古墳第9次調査) 概要報告」『桜井市平成17年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第145次発掘調査報告」『桜井市平成17年度国庫補助による発掘調査報告書』

<2007年>

桜井市教育委員会『纏向遺跡発掘調査報告書 - 巻野内坂田地区における調査報告-』

<2008年>

桜井市教育委員会「纏向遺跡第146次（箸墓古墳周辺第16次）発掘調査報告」『桜井市平成18年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第147次（東田大塚古墳第4次）発掘調査報告」『桜井市平成18年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第148次（矢塚古墳第2次）発掘調査報告」『桜井市平成18年度国庫補助による発掘調査報告書』

橿原考古学研究所「纏向遺跡第156次発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報2008年』

<2009年>

桜井市教育委員会『桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第32集 奈良県桜井市纏向遺跡発掘調査報告書2-メクリ地区における古墳時代前期墳墓群の調査-』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第151次発掘調査報告」『桜井市平成19年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第152次発掘調査報告」『桜井市平成19年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第153次発掘調査報告」『桜井市平成19年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡第154次発掘調査報告」『桜井市平成19年度国庫補助による発掘調査報告書』

<2010年>

（財）桜井市文化財協会「纏向遺跡167次発掘調査報告」『桜井市内埋蔵文化財2009年度発掘調査報告書1』

<2011年>

桜井市教育委員会「纏向遺跡157次発掘調査報告」『桜井市平成20年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡158次発掘調査報告」『桜井市平成20年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡159次発掘調査報告」『桜井市平成20年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡160次発掘調査報告」『桜井市平成20年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡163次発掘調査報告」『桜井市平成21年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡164次発掘調査報告」『桜井市平成21年度国庫補助による発掘調査報告書』

桜井市教育委員会「纏向遺跡165次発掘調査報告」『桜井市平成21年度国庫補助による発掘調査報告書』

<2013年>

桜井市教育委員会『桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書第40集 奈良県桜井市纏向遺跡発掘調査概要報告書-トリイノ前地区における発掘調査-』

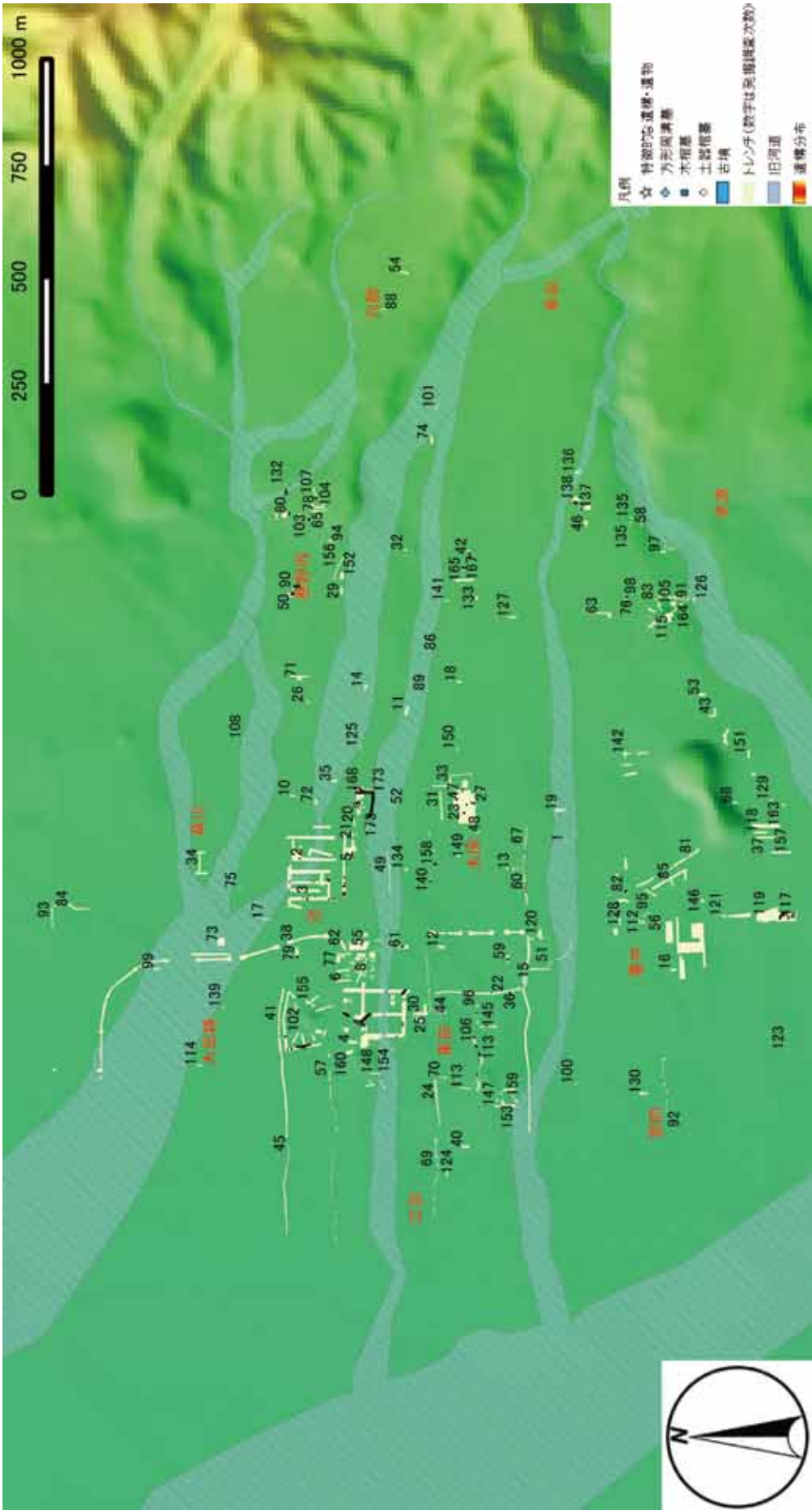


図4 纏向遺跡の発掘調査トレンチ
(数字は次数、旧河道は(安井2006)による。)



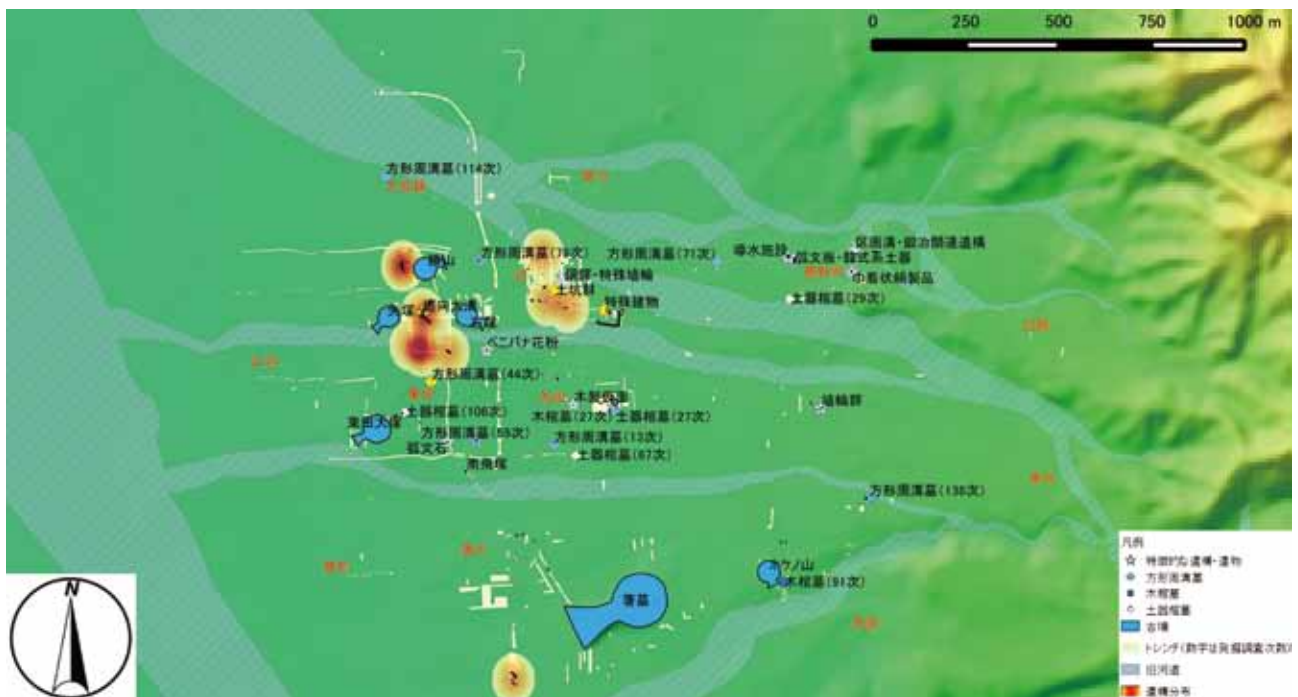


図7 庄内2式期の様相



図8 庄内3式期の様相

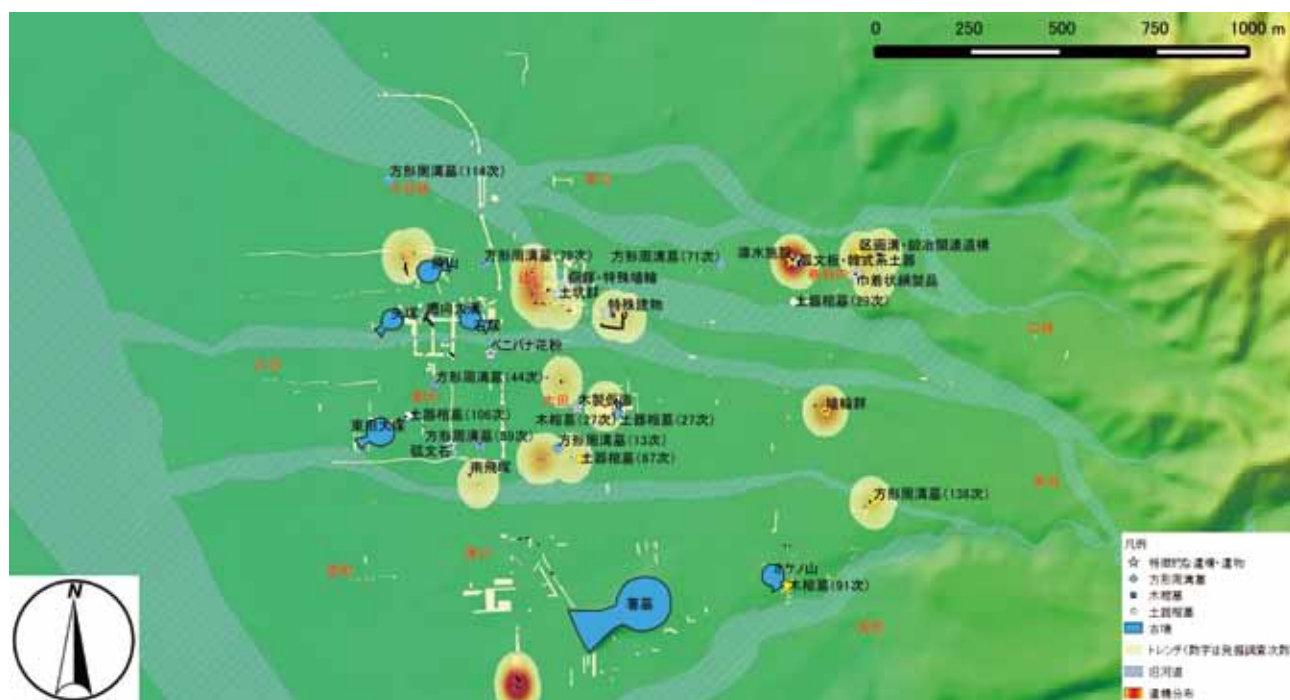




図11 布留2式期の様相

纏向遺跡出土の巴形石製品について

森 暢 郎

目 次

I. 遺構と遺物の概要	51
II. 巴形石製品の諸例	52
III. 纏向遺跡出土巴形石製品の意義	55

纏向遺跡出土の巴形石製品について

森 暢 郎

I. 遺構と遺物の概要

巴形石製品¹⁾は、纏向遺跡第176次調査3区SK-1006より出土した。全国的に見ても極めて類例の少ない形式で、かつ古い時期の石製品であると考えられ、今後の石製品研究に資する所があると考えられるので、正式報告に先んじて報告する。

纏向遺跡第176次調査3区は、纏向遺跡辻地区でも南西側にある調査区である(図1)。庄内3式期以前の建物群(建物B・C・D)の南西に位置する。SK-1006は直径約1.5m、深さ約0.4mの浅い土坑で、3区内の南西隅付近で検出した。SK-1006は重複するSK-1007を切って

いる(図2)。埋土の状況から、掘削後一定期間を経て埋没したと考えられる。埋土からは、庄内甕のほか、焼成後穿孔をうけた壺や、加飾二重口縁壺、石杵などが出土している。巴形石製品はこの土坑の上面を精査中に検出した。土壌水洗を行っていないため確実ではないが、他に緑色凝灰岩片は出土していない。また、土坑半裁後に断面での観察を行っても、土坑上面から別の遺構が切り込んだとは考えられず、巴形石製品はこの土坑に帰属すると考えられる。

図4はSK-1006出土遺物である。1は巴形石製品で、一辺4.3cm、厚さ0.9cm、重さ27.3gをはかる。断面凸形で平面正方形を呈する。角には右回りに4つの突起が付き、

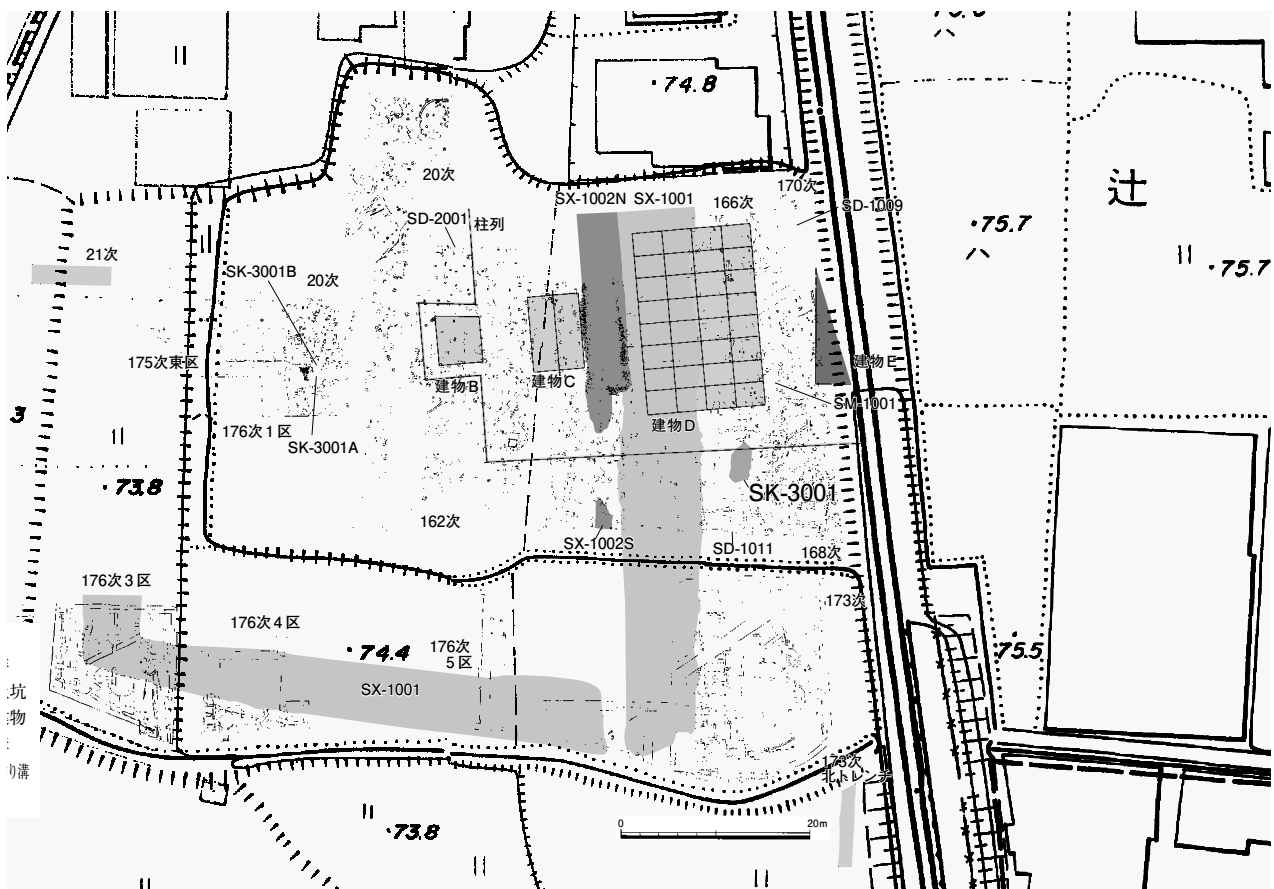


図1 これまで調査地の位置と地形 (S=1/800)

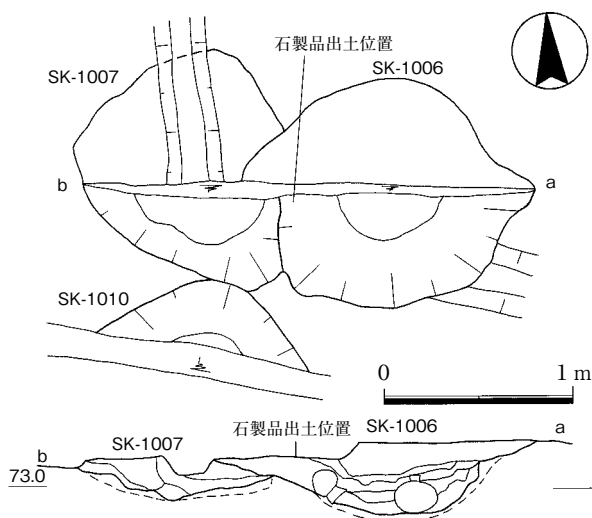


図2 遺構の平面断面図 (S = 1/40)

突起上面に凹線が彫りこまれる。石材は暗緑色を呈する緑色凝灰岩である²⁾。石材には細かな縞が入る。2～7は甕である。2は口径9.0 cmの大和形庄内甕で、矢羽根状左上がりタタキが施される。3は口縁部が僅かに内湾する甕で、肩部はタタキが認められる。4は口縁部が外反する甕で、外面はタタキの後ハケメ調整される。5も矢羽根状タタキをもつ大和形庄内甕である。6は吉備形甕、7は東海形S字甕である。口縁部形状からC類とみられる。8は頸部がやや内湾する壺で、体部に焼成後の穿孔が認められる。調整はナデとみられる。9は土坑の底面からわずかに浮いて正位置で検出した二重口縁壺である。口縁部以外は完形で、意図的に設置された可能性も考えられる。肩部に櫛描文、刺突文、円形浮文を施す。体部下半はタテミガキされているが、単位は定かでない。10は低脚高杯の脚部である。ヨコミガキが残る。11は石杵である。長さ9.1 cm、重さ70.0 gをはかる。朱等の付着は認められなかった。

出土土器を検討すると、未報告資料を含めて明確な布留甕は認められず、庄内甕を主体とすることが明らかである。しかしながら、3のように僅かに口縁部が内湾する資料があること、S字甕がC類とみられる事、また図化出来ないが、肩部片に外面がハケメ調整・内面ケズリ調整される甕があることから既に布留甕が出現している可能性があり、土器群は布留0式期まで下るものとする。

よってこの土坑の埋没時期は布留0式期と考えられ、巴形石製品も同時期の所産と考える。

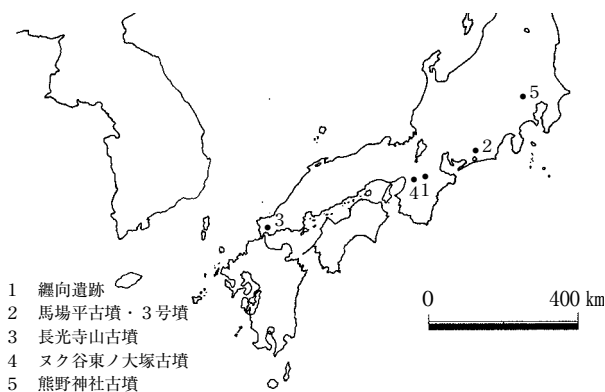


図3 巴形石製品の出土地

II. 巴形石製品の諸例 (図5)

巴形石製品の類例は少ないが、これまでに静岡県浜松市馬場平古墳・3号墳、山口県山陽小野田市長光寺山古墳、大阪府柏原市スク谷東ノ大塚古墳、埼玉県桶川市熊野神社古墳で出土している (図3)。

馬場平古墳・馬場平3号墳³⁾ 馬場平古墳・馬場平3号墳は静岡県浜松市北区引佐町 (旧引佐町) に位置する前方後円墳である。戦前に発掘され多数の遺物が出土していた。馬場平古墳からは画文帯神獸鏡・五花内行花文鏡、銅鏝が、馬場平3号墳からは変形獣帯鏡・六花内行花文鏡が出土している。巴形石製品はいずれの古墳から出土したかは確実ではないが、辰巳和弘氏は馬場平古墳のものとみられると考えている⁴⁾。1981・82年に改めて発掘調査と出土資料の再検討が行われ、馬場平古墳が粘土槨であることと、馬場平3号墳が木棺直葬である可能性が指摘された。馬場平古墳は典型的な粘土槨を主体とすることからみて前期中頃以降の古墳である。

巴形石製品は軟質の石材で、紡錘車形石製品に8つの交互に大小の突起が右回りに付く形態をとる。

長光寺山古墳⁵⁾ 長光寺山古墳は山口県山陽小野田市に位置する全長約62mの前方後円墳で、後円部上面から2つの主体部が検出されている。明治時代から度々調査・盗掘が行われ、巴形石製品1点が出土している。4の巴形石製品は12箇所の突起が右回りに付くが、ほとんどが欠損している。突起には大小があり、交互に作り出される。この点は馬場平古墳出土例と類似する。直径6.2 cm、円板の径が4.3 cm、厚さ0.9 cm、孔の径0.3 cmをはかる。表面はほぼ摩滅しているが、部分的に光沢がのこる。赤彩がなされる。材質は緑色凝灰岩と考えられる。

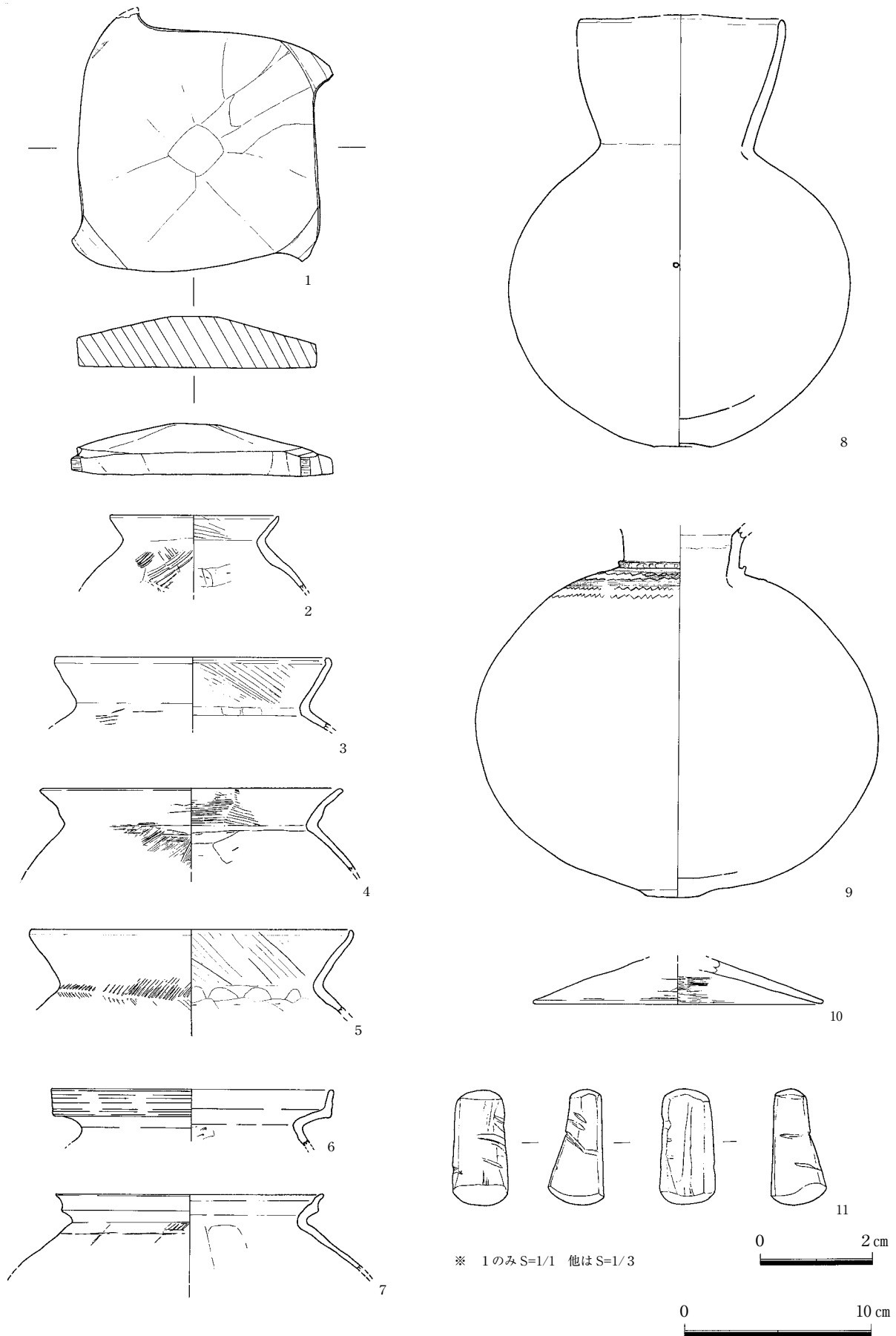


図4 SK - 1006出土遺物

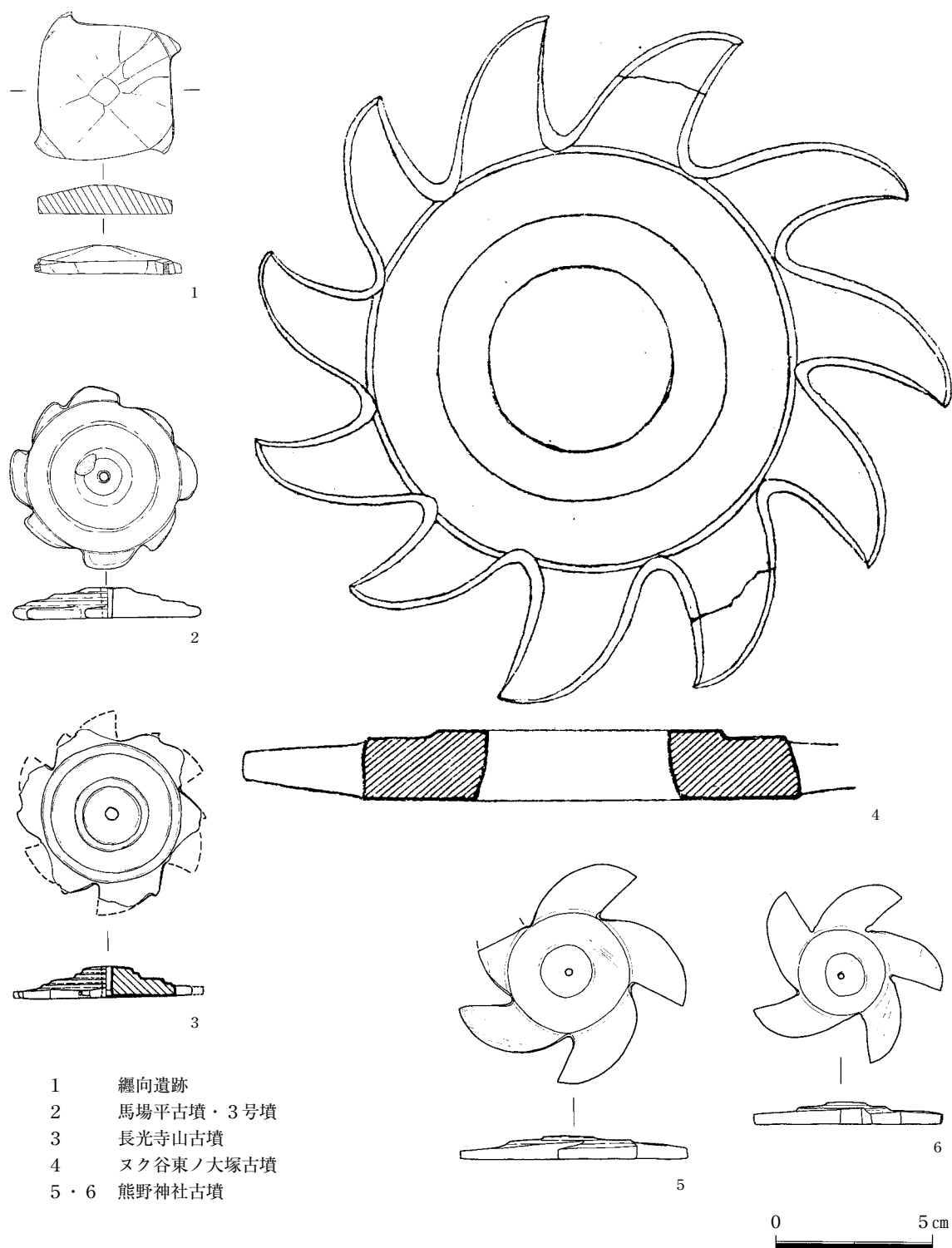


図5 巴形石製品の類例 (S = 1/2)

出土遺物には筒形銅製品や3面の仿製三角縁神獸鏡、鋏形石などが出土している。こういった副葬品の組成から、長光寺山古墳は古墳時代前期中頃に位置づけることが出来る。

スク谷東ノ大塚古墳⁶⁾ 大阪府柏原市松岳山古墳群の一つであり、松岳山古墳の東側に位置する。明治時代に発

掘され、昭和30年代の宅地開発により消滅している。この古墳からは鏡、鋏形石、歯車形石製品などが出土したとされるが、現在は歯車形石製品と鋏形石のみが遺存する。歯車形石製品は碧玉製で、右回りの11本の突起を持つ。鋏体部分は一面に段が作られ、もう一面が平坦であるが、突起は両面が先端側に薄くなるよう加工されている。

る。全長22.0cmを測る。

歯車形石製品は最大径6.0cm、円盤部分が4.95cm、厚さ1.0cmをはかる。円盤部分は三段に作り出され、右回りの突起を八本もつ。突起は交互に大小が作り出される。底面は平滑で凹まない。

熊野神社古墳⁷⁾ 熊野神社古墳は埼玉県桶川市川田谷に位置する円墳である。出土遺物は墳頂上の社殿を拡張する際に不時発見されたもので、粘土棺床が見つかり、粘土槨の可能性も指摘されている。不時発見の折に出土した遺物は、玉類、筒形銅器、筒形石製品、石釧、紡錘車形石製品、朱の小塊、巴形石製品が存在する。

巴形石製品は2点あり、両者とも濃緑色の同一石材を用いている。石材は良好なもので、光沢が残る。

5は大きい方の巴形石製品で、直径7.2cm、中央の円板の径4.0cm、高さ0.7cmをはかる。右回りの5本の突起を持つが、1本途中で欠損している。中心部は2段の紡錘車形石製品と類似する。裏面は平滑で凹まない。中央の孔は上から穿孔されている。端面はやや斜めに処理される。表裏面は整形後ミガキが施されている。側面は突起部分を成形後に面取りされるか、ミガキが施されている。

6は小さい方の個体で、直径6.1cm、円板の径3.0cmをはかる。右回りの5本の突起が認められる点は5と同一であるが、こちらは突起の大きさや配置が不揃いである。こちらも表裏面はミガキ調整される。中央の孔は上方から施される。裏面は平滑である。表面は2段の紡錘車形をとるが、孔は中心から外れる。5本の突起の側面は曲線部分にはミガキがほどこされているものの、直線部分は突起整形時の左上がりに傾く縦方向の擦痕が残る。これは、製品を左手に持ち、工具を右手にもって余分な所をカットしたためと考える。特に突起と突起の間は成形痕がよく残存する。ミガキ工具が突起の間に入らなかったためであろう。

共伴した遺物には筒形銅器があることや、粘土槨が主体部である可能性を考慮にいれば、築造時期は前期中頃から後半に下るものと考えられる。

以上のように巴形石製品を概観すると、時期のわかる事例は前期中頃から後半に下る事例であり、古墳の副葬品として出土する。これは巴形石製品が古墳時代前期中頃以降に出現する巴形銅器と関連する遺物であるからと考えられる⁸⁾。

翻って、纏向遺跡出土例は前期前半に遡るものであり、また土坑出土遺物である。その他の例とは時期や出土状況に懸隔があり、直接的に系譜関係があるとはいえないが、巴形をとる石製品としては最古級の個体と考える。

Ⅲ. 纏向遺跡出土巴形石製品の意義

前章では本例が巴形石製品としては古いものであることを指摘した。ところで、本例を観察するとこれが未成品であることがわかる。

凹線は3つの突起上に施されるが、1箇所には擦痕が残るものの凹線は認められず、擦痕が残る突起先端は破損している。また、表面は平滑でなく、研磨痕を残す複数の面によって成り立っている。頂部が平坦面になっているが、この平坦面は斜面の研磨痕によって切られているので、平坦面は削り残されているものと考えられる。斜面の研磨痕は極めて微細な部分と、比較的粗い部分が認められる。粗い研磨面は頂部の平坦面と類似し、研磨痕を一部共有しているように見えるので、粗い研磨痕の面を消すように微細な研磨痕を残す研磨が行われているものと考えられる。また、裏側にも研磨痕がのこる。側端面は縦方向の擦痕が残るが、突起先端部には横方向の条痕が認められる。条痕は縦方向の擦痕に切られている。

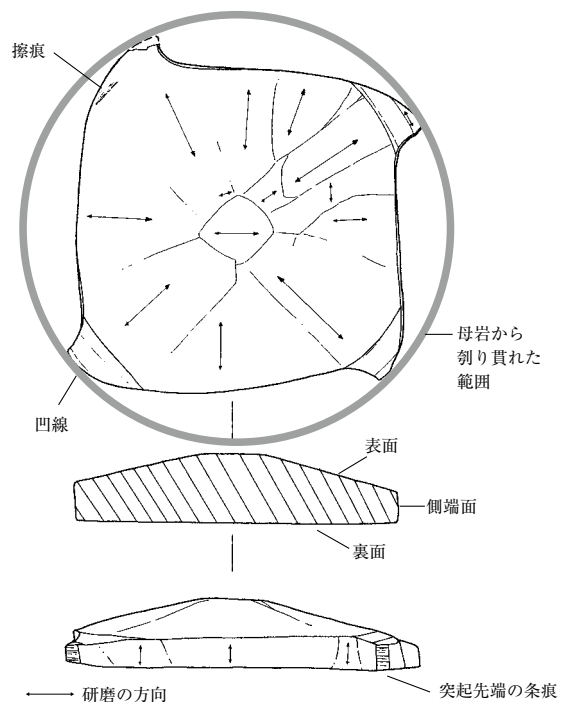


図6 巴形石製品の部分名称

こういった痕跡から製作工程を復元すると、巴形石製品はまず母岩から円盤を削り貫くような工具によって切り離され、その際に突起先端部の横方向の条線が残されたと考えられる⁹⁾。その後、形割→複数回の研磨によって整形し、突起に凹線を施している途中で突起が破損したために廃棄されたものとする。未成品出土地周辺に製作地があると理解すれば、布留0式期に纏向遺跡、あるいはその周辺で巴形石製品が製作されていた可能性を示唆するものといえる。

石製品の出現時期については議論があるが、古い時期に位置づけられる紡錘車形石製品が出土した西求女塚古墳からは布留1式期の土器が出土している¹⁰⁾。おなじく、古い時期の紡錘車形石製品・琴柱形石製品・鋏形石が出土した雪野山古墳出土二重口縁壺は布留式期古相に位置づけられている¹¹⁾。また、紡錘車形石製品の祖形の一つにあげられる紡錘車形貝製品が出土した権現山51号墳も古墳時代前期初頭として捉えられる。纏向遺跡の巴形石製品はこれらの石製品や貝製品と相前後する時期の所産と考えられ、古い時期の石製品の一つとして捉えることが出来る。以上のことから、纏向遺跡では石製品が出現する段階に石製品を製作していた可能性があるといえよう。石製品生産の中心は北陸であることは動かないが、石製品の出現にあたって纏向遺跡やその周辺地域関わった可能性を示すものである。

また、布留0式期における巴形石製品の存在は、弥生時代の巴形銅器と、古墳時代の巴形銅器の関係を考える上で重要である。弥生時代の巴形銅器は一旦途絶し、古墳時代前期後半にいたって再び顕在することが明らかとなっている。こういった中であって、纏向遺跡出土の巴形石製品の時間的位置は両者の中間に位置する。本例のような複数の突起を持つデザインは古墳時代前期前半には稀ではあるが、完全に途切れることは無く製作されていたと考えられる¹²⁾。

本稿を草するにあたり、以下の方々からご教示を賜りました。ありがとうございます。(五十音順 敬称略)

赤塚次郎、奥田尚、北山峰生、小山田宏一、佐貫正彰、辰巳和弘、寺澤薫、野中仁、橋本輝彦、福永伸哉、北條芳隆、森岡秀人

【註記】

- 1) これまで報告されている巴形石製品とは形態が大きく異なるが、一応同一形式として扱い得るものとする。
- 2) 奥田尚氏より石川県南部産とのご教示を得た。また、北條芳隆氏より、氏の分類の材質1の範疇であるとのご教示を得た。
- 3) 引佐町教育委員会 1983『引佐町の古墳文化Ⅲ〈馬場平古墳発掘調査報告書〉引佐町町史編纂室報告第3冊』
- 4) 辰巳和弘 1991「[＊]井のクニ、の盛衰」『引佐町史』
- 5) 長光寺山古墳調査団編 1977『長光寺山古墳』山陽町教育委員会
- 6) 梅原末治 1953「河内国分出土の異形石製品」『考古学雑誌』39-1日本考古学会
- 7) 村井崑雄 1956「武蔵国川田谷熊野神社境内所在の古墳」『考古学雑誌』41-3日本考古学会
- 8) ただし、ヌク谷東大塚古墳の菌車形石製品は、同時期の巴形銅器とは似ておらず、むしろ弥生時代の巴形銅器の平面形と類似すると考える。
- 9) 北條芳隆氏よりご教示を賜った。
- 10) 柳本照男 2004「土器からみた西求女塚古墳の年代」『西求女塚古墳発掘調査報告書』神戸市教育委員会 岡村印刷工業
- 11) 石原道洋 1996「雪野山古墳棺内出土土器壺形土器について」『雪野山古墳の研究 考察編』真陽社
- 12) 巴文のデザイン自体は列島内で多用されている。突起が複数ある巴文は透かしや文様としては継続して存在する。

【図版の出典】

図5-2 引佐町教育委員会1983より転載

図5-3 山陽小野田市教育委員会所蔵資料を筆者実測
断面図は長光寺山古墳調査団編1977より転載

図5-4 梅原末治1953より転載

図5-5・6 埼玉県立歴史と民俗の博物館保管資料を筆者実測

【参考文献】

- 西島庸介 2008「紡錘車形石製品の研究」『静岡県考古学研究』第40号
- 細川晋太郎 2004「前期古墳副葬紡錘形石製品の性格」『古文化談叢』第51集
- 岩崎卓也 1977「いわゆる碧玉製紡錘車について」『民族史学の方法』（木代修一先生喜寿記念論文集3） 木代修一先生喜寿記念論文集編集委員会
- 鐘方正樹 2004「紡錘車形石製品の形態と用途」『堀田啓一先生古希記念献呈論文集』堀田啓一先生古希記念献呈論文集作成委員会
- 三浦俊明 2007「北陸における古墳時代前期の石製品生産」『石川県立歴史博物館 紀要19』



写真1 巴形石製品 表面



写真4 巴形石製品 裏面



写真2 巴形石製品 側面

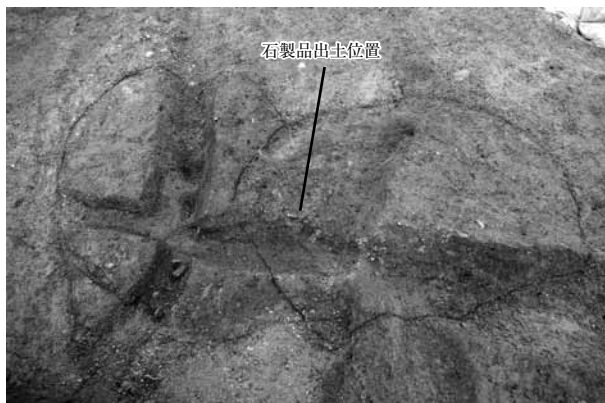


写真5 SK1006・SK1007（南から）



写真3 巴形石製品 先端部の条痕



写真6 巴形石製品 出土状況（東南から）

纏向遺跡出土の巴形石製品に接して

北 條 芳 隆

目 次

I. はじめに	61
II. 材質と成形法の特徴	61
III. 対応する石釧	63
IV. 紡錘車形石製品との関係	65
V. 巴形石製品・銅製品との関係	68

論文要旨

今回新たに紹介されることになった纏向遺跡出土の巴形石製品（未製品）を観察し、今後の議論にあたって基礎となるべき認識を提示すべきと考え、次の諸項目を論じた。すなわち①材質の問題、②本例が削り貫き円盤からの製作途上にあったとみられることから生じる問題点、③紡錘車形石製品との関係、④巴形石製品や巴形銅器との関係、である。

まず材質的な観点からみた年代的位置づけを試みたところ、本例は北陸産の比較的硬質な碧玉に該当し、石製品の全般的な動向からみて古相にあたると判断できる。

次に本例が削り貫き円盤を素材とすることから、対応する可能性のある腕輪形石製品の絞り込みが可能であることを示し、具体例を紹介した。石釧のなかから候補を検索すると、やはり古相の資料群が抽出された。さらに紡錘車形石製品とのサイズの関係を点検してみると、同様に古相の資料群のなかに含められる。

また本例は他の古墳時代前期後半に散見される巴形石製品との間に型式学的な距離があり、一律には取り扱えないことを示した。むしろ年代的な位置関係からみれば、弥生後期に盛行したのち一時的な消滅期間を経て古墳時代前期後半に再登場する巴形銅器との対応関係を探るという見方が可能である。だとすれば本例は巴形銅器が再登場する直前の時点で、石製品製作者の側が弥生後期タイプの巴形銅器を祖型として、一時的に製作を試みたものだった可能性も指摘できる。

北條 芳隆（ほうじょう よしたか）

東海大学文学部歴史学科教授

纏向遺跡出土の巴形石製品に接して

北 條 芳 隆

I. はじめに

今回の出土の報に接し、私は驚きを隠せなかった。まず初期倭政権の本拠地と目される遺構付近から石製品の出土をみた事実と、それが未製品であったことは、これまでも何人かの研究者が予想してきたことを裏づけるものであろう。つまり今回の出土品は、政権の本拠地のごく近隣で石製品が考案され、製作されつつあったことを証明する資料だとみてよい。この点については安堵を誘う驚きだといえる。

しかし今回の発見は古墳への副葬品としてではなく、土坑への廃棄ないし埋納とみられる出土状況であった。さらに相伴関係にある土器の編年観に依拠すれば、その年代は布留1式期より前にさかのぼる可能性が指摘されている。この事実は別の意味で驚きだった。

ようするに今回の出土状況は、古墳時代を迎えた直後から、すでに石製品は副葬品とは別の消費形態を伴ったことを示唆するものだろう。そうなると石製品の用途にかんするこれまでの定説的な見解、すなわち初期段階には古墳の副葬品として登場し、前期後半の段階には集落や首長居館と呼ばれる祭儀施設でも消費されることがあったという見方には変更が必要となるか、少なくとも再検討が求められる。

そのうえ今回の出土資料は疑う余地なく巴形石製品であった。この点については石製品研究を進める立場のひとりとして悩ましさを伴う驚きだといわざるをえない。なぜかといえば巴形石製品は、主に紡錘車形石製品の派生型として古墳時代の前期後半に出現する、後出的な器種だからである。

ただし今示したような諸問題とは別に、資料自体がもつ特徴にも驚かされた。今回の出土品には成形法を示す痕跡が明瞭に残されており、それは今後の石製品研究に

新たな視座を提供する。そのような重要性をもつ新発見資料であることについて異論はないだろう。

このように、さまざまな意味での驚きを伴う今回の出土例なのであるが、本稿では最後に示した問題に焦点を絞る。さらに紡錘車形石製品や巴形石製品・銅製品との関係を点検したい。基礎的な認識を提示することが最優先だと考えたからである。以下、今回の出土品を指示するさいには纏向例と呼ぶことにする。

II. 材質と成形法の特徴

(1) 北陸系の材質1としての評価

森氏の報告にもあるとおり、纏向例は比較的硬質の暗緑色を呈する碧玉を素材としている。透明度はない。このような材質の様相は、本例が北陸西部系であることを強く示唆するものである。

肉眼観察の限界はあるものの、表面がわずかに褐色味を帯びることを重視すれば、藁科哲雄氏によって「女代南B群」と命名された、石川県郡谷菩提産碧玉の可能性もあるように思われる（藁科2005）。

ただし表面の色調については土中での変色や表面への付着物による作用も考慮しなければならず、断定的なことはいえない。だから北陸系である、というところにとどめておくのが無難であり、今後蛍光X線分析等の材質分析がおこなわれることを期待したい。

なお現時点で確実視できることは、本例が硬質の碧玉であっても島根県花仙山産ではない点である。花仙山産碧玉を素材とする古墳時代の石製品として最古の部類に入る資料は、兵庫県西求女塚古墳出土の紡錘車形石製品なのだが、それとは系譜を異にするとみてよい。

私の材質分類にあてはめると、今回の出土例は北陸系の材質1に該当する。図1にはこの問題に関する材質区

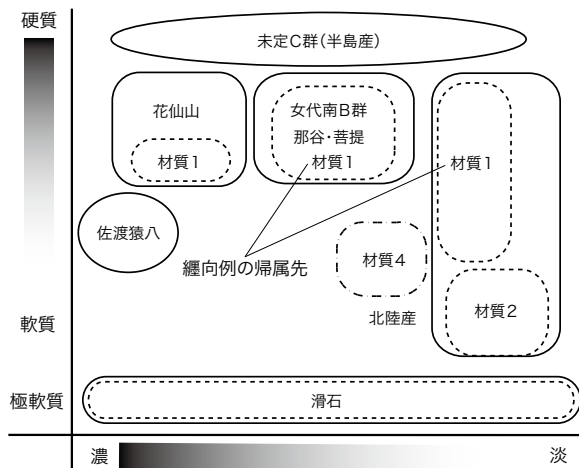


図1 管玉・石製品の材質分類と纏向例の位置

分を模式化し、そのなかに纏向例の位置を引き出し線で示したので参照いただきたい。

では材質からみた本例の年代観をみておきたい。ここでは大賀克彦氏による最新の編年案（大賀2013）をもちいるが、前Ⅱ期に登場する古墳時代の石製品は当初北陸（西部）系の材質1を主体とする。この時期には紡錘車形石製品など小型の器種については花仙山碧玉製を含むものの、この石材は前Ⅳ期にならないと腕輪形石製品の素材とはならない。

また前Ⅴ期に材質2と4とが相次いで出現するまでは、石製品のほぼすべては材質1で占められる（北條2013）。このことから纏向例は前Ⅱ期から前Ⅳ期までの間に位置づけられる。

いっぽう纏向例は176次調査SK-1006上層からの出土で、共伴する土器類の様相は布留0式期である。ただし上層からの出土であることは、他の土器類との一括廃棄であったか否かに若干の不確定さがあるようにも思われる。したがって近隣の検出遺構から導かれる年代観をふまえ、少し広めに想定しておくのが無難であろう。古相の遺構（大型建物群）は庄内3式期を含むそれ以前に構築され布留0式期には埋没、新相の遺構（大型建物の一部・区画溝・土坑など）は布留1式期と2式、最新相の遺構（区画溝）はTK47期の埋没である（桜井市教育委員会2013）。

このうち布留2式期とTK47期は除外されるので、庄内3式期から布留1式期までが想定される年代幅となる。

そうすると現時点における石製品側の編年案との接点は前Ⅱ期、土器編年でいえば布留0式期から布留1式期

までとなる。もとより布留0式期を大賀編年の前Ⅰ期に該当させた場合に、という限定条件つきではあるが、年代観はおおむね整合性をもつとはいえないだろうか。

（2）割り貫き円盤からの成形

纏向例を実見して私が驚かされた最大の特徴は、この石製品は割り貫き円盤を素材として成形される過程にあったことである。この点は次の事実によって確実視される。

写真1に示したように、巴形に張り出す形で成形された端面には、反復回転穿孔によって生じた横方向の削痕が明瞭に残る。同様の削痕は石釧や車輪石の環体部内面に残されることがあり、内孔の穿孔にあたっては特殊な割り貫き法がもちいられたことを示している。写真2には石釧における当該部分表面の様相を示した。

こうした穿孔がおこなわれた結果、副産物としてできあがるのが割り貫き円盤なのであり、石製品の製作遺跡から出土することが知られている。さらにこの割り貫き円盤は、そのまま破棄されるケースのほかに、紡錘車形

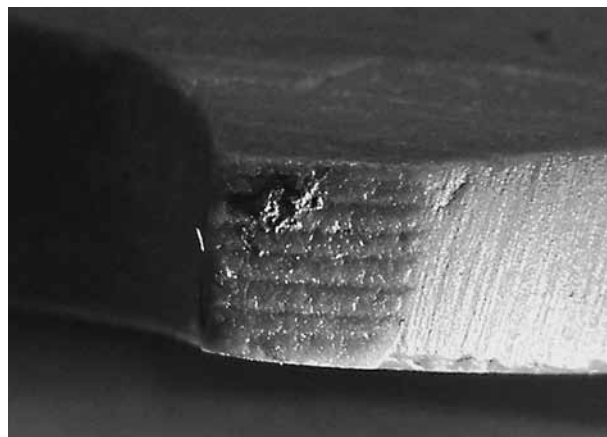


写真1 纏向例の突起端面に認められる回転削痕

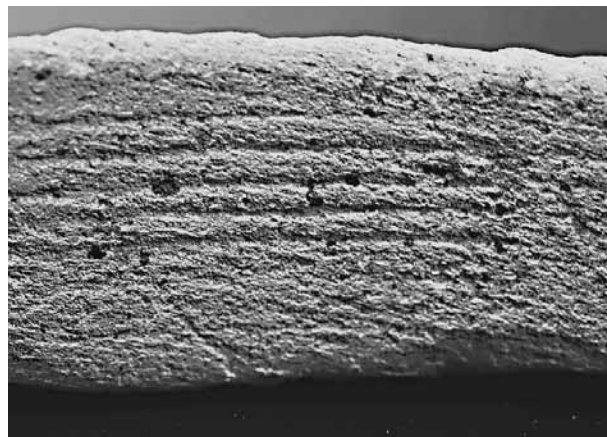


写真2 石釧内面に認められる回転削痕

石製品の原材に転用される場合もあったと推定されてきた。小型の合子形石製品の（とくに蓋の）素材にもなりえたであろうとも指摘されている。

そのような推定が成立する根拠は、削り貫き円盤の外径および高さ、紡錘車形・小型合子形石製品の外径や高さとおおむね一致することにある。ただし製品として完成された資料の場合、端部は丁寧に磨かれるために反復回転の削痕が残ることはない。だから蓋然性は高いものの、あくまでも状況証拠にもとづく推定にとどまった。さらに削り貫き円盤の多くが材質2であることも注意されてきた。先の推定が材質1にまで普遍化できるか否かについては、確証がなかったといえる。

そのような現状のもとで今回の出土例に接することになったのだから、その重要性もあきらかだろう。つまり上記の推定は、本例によってはじめて確証をえたことになる。未製品の段階であったことが幸いして、端面には明瞭な穿孔削痕が残されていたからである。さらに本例は材質1である。したがって今回の発見は、これまでの推定を石製品製作の全体に拡張できることを意味する。つまり仕上げの段階にいたらない状態で本例が破棄ないし埋納されたことは、石製品研究にとってまことに僥倖だというべきだろう。

そしてこの事実は、次のような理解へと誘われる。すなわち纏向例は紡錘車形石製品の成形が削り貫き円盤を素材とするものであったとみてよいことと、本例が製作されるさいには、まずまちがいなく腕輪形石製品の製作が伴った可能性が高いことである。

なおそのさいに、祖型と目される各種の腕輪類は、そもそもどの程度の寸法のものであったのかを把握しておく必要もあろう。この問題を考える素材として図2-1に福井県龍ヶ岡古墳出土イモガイ製腕輪を提示した。本例の内孔（長）径は5.45 cm、高さは1.20 cmである。内孔径は纏向例よりわずかに小さく、高さは纏向例の1.3倍ある。このうち内孔径の近似については、纏向例の外径がどのような経緯のもとで定まったのかを示すものであろう。すなわち祖型貝輪の内孔径を踏襲した結果だと推定することができる。

では纏向例と対応する可能性のある腕輪形石製品とは、具体的にどのようなものであったとみることができるだろうか。次章ではこの問題を点検する。

Ⅲ. 対応する石釦

（1）本例の寸法と対応する器種の選定

纏向例と対応する可能性をもつ腕輪形石製品を絞り込むさいに、私は次のような作業手順をとった。

まず素材については西部北陸系に限定される。したがって対象資料は北陸系の材質1に絞られる。色調については纏向例と同じく暗緑色を呈する資料が望ましいのだが、そこまでは絞らず淡青緑色を呈する資料も許容することにした。

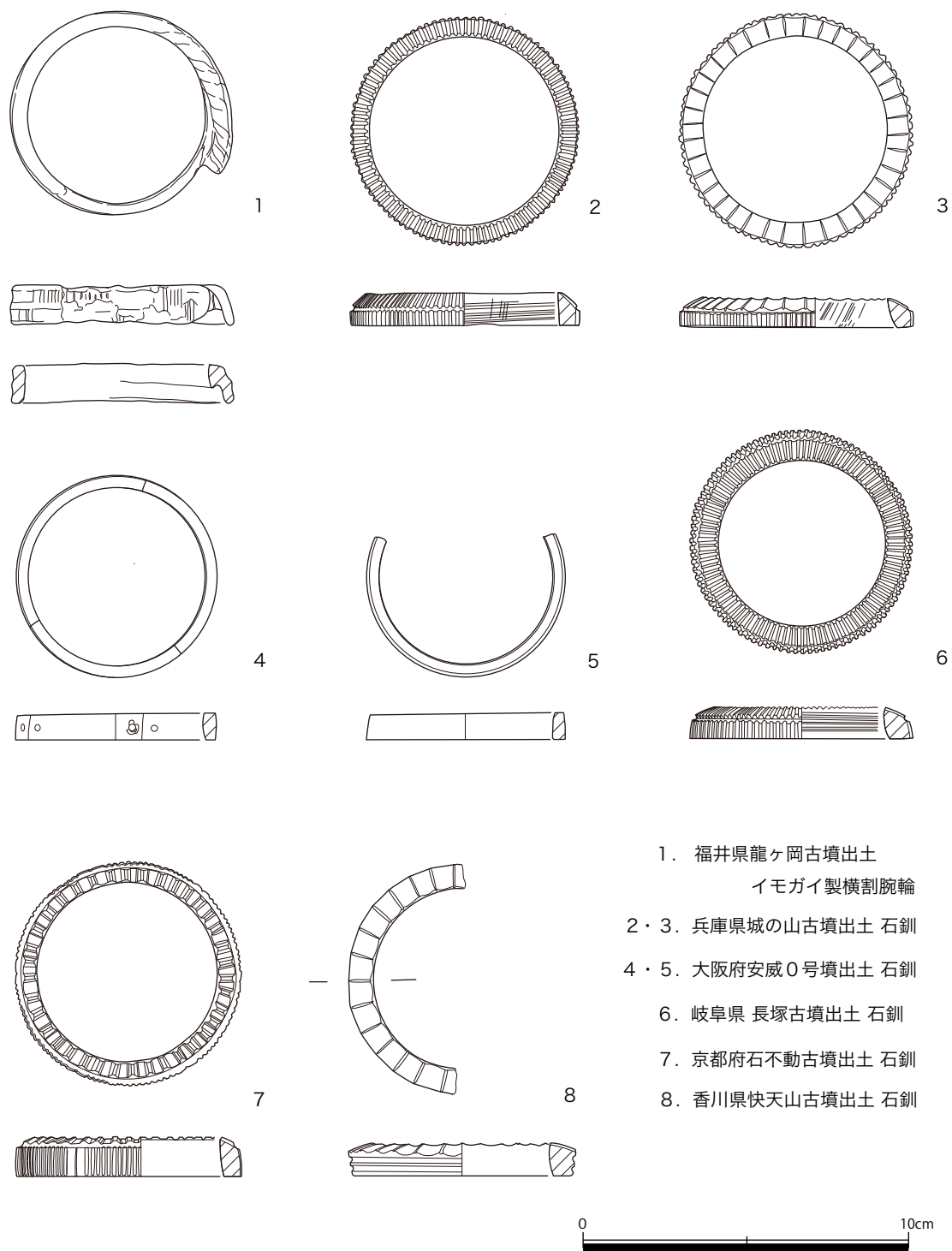
次に本例の寸法を詳細に計測し、穿孔径と高さを限定する。纏向例の場合、4方にある巴状突起部端面のうち3方に反復回転削痕が残るので、この3方から削り貫き円盤の直径を推定すると5.52～5.55 cmとなる。高さは8.9 mmをはかる。

なお削り貫き穿孔のさいには、一般的に穿孔時の上面側の径が広くなり下面側の径が狭くなる。ただし本例の場合、高さが9 mm前後なので、さほど大きな差を見込む必要はない。そのため穿孔径については板状錐の厚みを考慮し、5.6 cmから5.8 cm程度までと見積もることが許されるだろう。つまり対象資料は、環体部内面の直径が今示した範囲に収まるものとなる。

また高さについては、本例の上端面が穿孔後にどの程度まで磨き込まれたかが問題となる。この点については、中心部に一辺8から9 mm前後の平面方形の平坦部を残し、放射状に削りだす表面の状態であることに注目する。このような状態は穿孔後の成形の主体が緩やかな斜面を作出するものであったことを示しており、上端面については大幅な削り込みをおこなっていないと判断できる。

さらに石製品製作遺跡から出土する削り貫き円盤をみても、上面と下面は平滑に研磨された状況であることも考慮すべきだろう。つまり本例についても、平面方形を呈する上端面は、削り貫き穿孔時の様相をとどめるものとみてさしつかえないのである。

ここまでの作業によって、纏向例と対応する候補となる器種が限定できる。3種からなる腕輪形石製品のなかで、対象資料の候補から除外されるのは鍬形石である。もちろんこの器種についても、環体部の内孔穿孔時には上記のような反復回転穿孔が伴った可能性が河村好光氏によって指摘されている（河村1986）。ただし北陸系の



1. 福井県龍ヶ岡古墳出土
イモガイ製横割腕輪
- 2・3. 兵庫県城の山古墳出土 石釧
- 4・5. 大阪府安威0号墳出土 石釧
6. 岐阜県 長塚古墳出土 石釧
7. 京都府石不動古墳出土 石釧
8. 香川県快天山古墳出土 石釧

図2 纏向例と対応する石釧および参考資料（縮尺1/2）

材質1の鋏形石は、その全体の寸法が判明するか推定可能なものの場合、環体部側面から突起部の側面で計測した場合の高さがすべて1cmを超える反面、推定穿孔径は5.4cmに満たないものが多いのである。

たとえば奈良県桜井茶臼山古墳出土品は、北陸系の材

質1の資料中ではもっとも小型で検討の余地がありそうだとの期待を抱いたが、突起部の側面高は1.1cm、推定される穿孔径は3.8cmで、高さは超過する反面、径は小さすぎる。また河村氏の論考でも取りあげられた香川県高松茶臼山古墳No.1（番号名は北條1994aによる）の場合、

突起部の側面高は1.7cmもあるいっぽう、推定穿孔径は5.1cmとなる。このような状態であるため鋏形石は除外される。

さらに比較的大型で外形が卵形を呈する車輪石も除外される。一例を示すと、熊本県向野田古墳例は高さが1.2～1.2cm、推定穿孔径は5.2cmで、対象候補にはなりえない。環体内面穿孔の様相において、鋏形石と同様の傾向をもつのである。

ようするに腕輪形石製品のなかで纏向例との対応を検討すべき器種は、石釧と外形が円形を呈する小型車輪石に絞られる。

(2) 対象資料の抽出とその評価

以上のような手続きを踏んだうえで絞り込まれた資料は、兵庫県城の山古墳出土石釧4点のうち2点となる。図2-2・3に実測図を示した。これら2点はともに暗緑色の北陸（西部）系の材質1であることも重要で、現時点では纏向例と対応する腕輪形石製品の最有力候補なのである。

もちろん城の山例は消費地側から検索されたものであるため、製作地側で把握される纏向例との間に製作年代の同時期性などは保証されない。ただし城の山古墳が前Ⅳ期に該当する事実は、纏向例が前Ⅳ期を含むそれ以前に相当することを証明する、充分な根拠にはなるはずである。

次に参考事例として示した資料は、先に除外した鋏形石や車輪石のうち、最古相の資料との対応関係が想定できる紡錘車形石製品を想定し、内孔径が5.1～5.3cm程度、高さ1.2mm程度のものにまで選考基準を拡張した結果、検索された石釧である。

図2-4・5は大阪府安威0号墳出土石釧、6は岐阜県長塚古墳出土石釧中の1点、7は京都府石不動古墳出土石釧中の1点、8は香川県快天山古墳出土石釧である。このうち6は内孔径が5.05cmと最小径の資料であるいっぽう、高さは1.0cmをはかり、材質は纏向例や城の山例と近似することを根拠に抽出したものである。

今回は紙面の都合もあって、小型車輪石と、石釧でも内孔径と高さの値に不確定さをもつ破片資料の紹介を見合わせたことをお断りしなければならないが、上記の参考事例がバックアップ資料となる。

ここで石釧における参考事例を提示した理由は、抽出

された城の山古墳例2点との比較をおこなうためである。変則的な安威0号墳例を除けば、私のいう第1群と第3群（北條1994b）、蒲原宏行氏の分類案におけるⅠa～Ⅰc類と、Ⅳb類（蒲原1987）が抽出されることになる。つまり前Ⅳ期までの間に製作された石釧の型式学的な把握をおこなううえで、今後求められる基礎作業とはどのようなものであるべきか、その方向性の一端を纏向例は切り開くものだといえる¹⁾。

さらに今示したような把握法は、石製品における「同工品」を認定するさいにも活用可能である。ようするに今回の発見は、石製品研究の側への波及効果が大きいのである。

Ⅳ. 紡錘車形石製品との関係

(1) 寸法の様相

では次に、纏向例と紡錘車形石製品との関係をみておきたい。今から20年近く前の集計作業で恐縮なのだが、この問題を考えるうえで参考になると判断される図3・表1および図4を示す。滋賀県雪野山古墳の調査報告書から転載・改変したものである（北條1996）。

図4中には今回の出土例をプロットした。網かけ部分は「祖型エリア」と仮称した範囲である。紡錘車形石製品の祖型はイモガイ製の円盤形装飾品なのだが、その実例である兵庫県権現山51号墳出土イモガイ製品の寸法を基準にして、祖型との近似度を寸法の点から読み取る目的で設定したエリアだとしてご理解いただきたい。

この図から判明するように、纏向例は「祖型エリア」内に入り、雪野山古墳出土の2点（同値）と近似することがわかる。これら2点も北陸系の材質1（ただし淡青緑色）であるし、今回の出土例については、巴状の突起端面を少し磨き込めば1～2mm程度は径が減少する。したがってこの近似には有意性があると判断できる。つまり前章で述べた石釧との対応関係をふまえると、ここに見る寸法の近似は、纏向例が雪野山例（前Ⅱ期）と同等に古相であることを示唆するのである。

さらに高さについては9mmの値を示すものが「祖型エリア」のなかで5点（纏向例を含む）、外側で3点の都合8点が横並びになることにも注目したい。ピックアップされてくるのは雪野山古墳例・纏向例のほかには大阪府真名井3、京都府百々池、大阪府忍岡2、長野県石川条

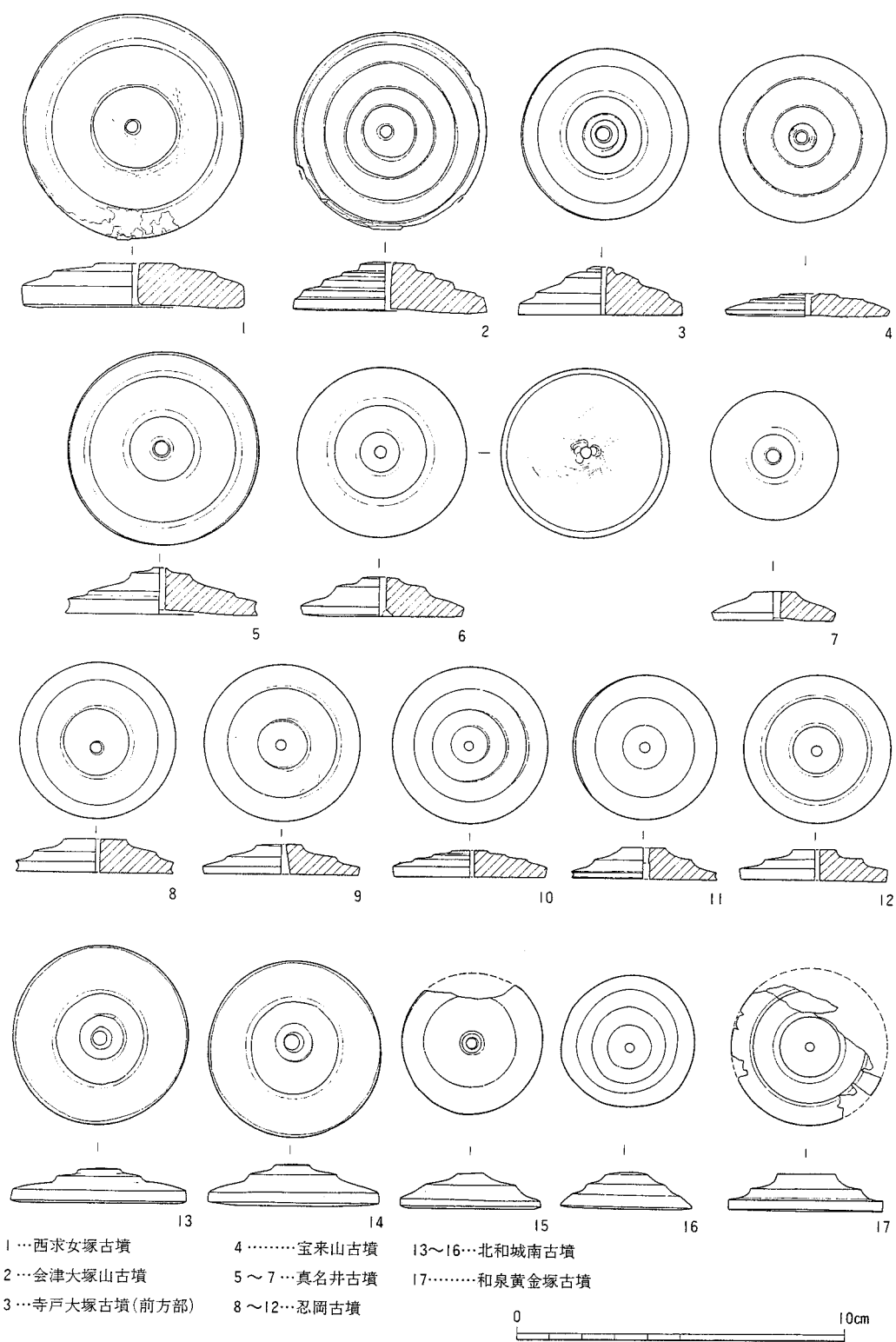


図3 各地の紡錘車形石製品実測図（縮尺1/2）

表1 各地の紡錘車形石製品観察表

資料名	外径(cm)	高さ(cm)	高さ/外径	内孔径(cm)	段数	裏面の状態	側面の状態	石材	
雪野山1	5.2	0.9	17%	0.5	2段	わずかに内湾	①	淡緑色碧玉	
雪野山2	5.3	0.9	17%	0.45	2段	平坦	②	淡緑色碧玉	
西求女塚	6.8	1.4	21%	0.4	3段	わずかに内湾	③	濃緑色碧玉	
真名井1	5.8	1.4	24%	0.4	4段	内湾	①	淡緑色碧玉	
大師山2	5.45	1.5	28%	0.3	4段	上げ底状	①	碧玉	くり込み権現山例に似る
宝来山	5.3	0.65	12%	0.4	3段	わずかに内湾	②	碧玉	中央部にくりこみ
真名井2	5.2	1.2	23%	0.4	3段	平坦	②	濃緑色碧玉	
真名井3	3.9	0.9	23%	0.5	2段	中心付近わずかに窪む	②	淡緑色碧玉	
大師山1	5.9	1.6	27%	0.3	5段	平坦	③	グリンタフ	くり込み権現山例に似る
会津大塚山	5.9	1.47	25%	0.44	5段	内湾	③	グリンタフ	
大師山3	5.4	1.3	24%	0.4	4段	平坦	①	グリンタフ	
百々ヶ池	5.3	0.9	17%	0.3	4段		②	グリンタフ	くり込みと内孔の中心ズレ
大師山4	5.25	1.4	27%	0.4	4段	平坦	②	グリンタフ	
メスリ山2	5.2	1.4	27%	0.5	4段	平坦	③	グリンタフ	鉄芯付き
メスリ山3	5.1	1.2	24%	0.5	4段	平坦	③	グリンタフ	鉄芯付き
三池平1	5.0	1.3	26%		5段	平坦	②	グリンタフ	内孔は斜めに穿孔
新沢千塚	5.0	1.2	24%	0.4	4段	平坦	③	グリンタフ	
西ノ口1	4.9	1.2	24%		2段			グリンタフ	
西ノ口2	4.9	1.4	29%		3段			グリンタフ	
和泉黄金塚	4.8	1.2	25%	0.4	3段	平坦	③	グリンタフ	
忍岡2	4.8	0.9	19%	0.4	3段	平坦	②	グリンタフ	
三池平2	4.8	1.0	21%	0.3	4段	平坦	①	グリンタフ	中央部にくりこみ
忍岡1	4.8	1.0	21%	0.4	3段	平坦	①	グリンタフ	
忍岡3	4.8	0.8	17%	0.3	4段	平坦	②	グリンタフ	
忍岡5	4.5	0.95	21%	0.3	3段	平坦	③	グリンタフ	
メスリ山1	4.4	1.1	25%	0.3	3段	平坦	③	グリンタフ	
忍岡4	4.4	0.95	22%	0.4	3段	平坦	①	グリンタフ	
石川条里	4.3	0.9	21%	0.4	3段	平坦	②	グリンタフ	
常陸鏡塚1	5.1	0.8	16%	0.64	2段	平坦	③	滑石	
常陸鏡塚3	4.9	1.2	24%	0.86	2段	平坦	③	滑石	
池ノ内5号	4.8	1.2	25%	0.8	2段	外湾	④	滑石	
常陸鏡塚2	4.7	0.7	15%	0.72	2段	平坦	③	滑石	
常陸鏡塚7	4.6	1.1	24%	0.64	2段	平坦	③	滑石	
常陸鏡塚4	4.5	1.0	22%	0.79	2段	平坦	③	滑石	
常陸鏡塚8	4.5	1.05	23%	0.57	2段	平坦	②	滑石	
常陸鏡塚6	4.1	1.1	27%	0.51	2段	平坦	③	滑石	
常陸鏡塚9	3.9	1.2	31%	0.57	2段	平坦	③	滑石	
常陸鏡塚11	3.7	1.1	30%	0.57	2段	平坦	③	滑石	
常陸鏡塚5	3.7	0.9	24%	0.51	2段	平坦	③	滑石	
常陸鏡塚10	3.6	1.2	33%	0.57	2段	平坦	③	滑石	
権現山51号	7.1	1.2	17%	0.6	3段	内湾	①	イモ貝	

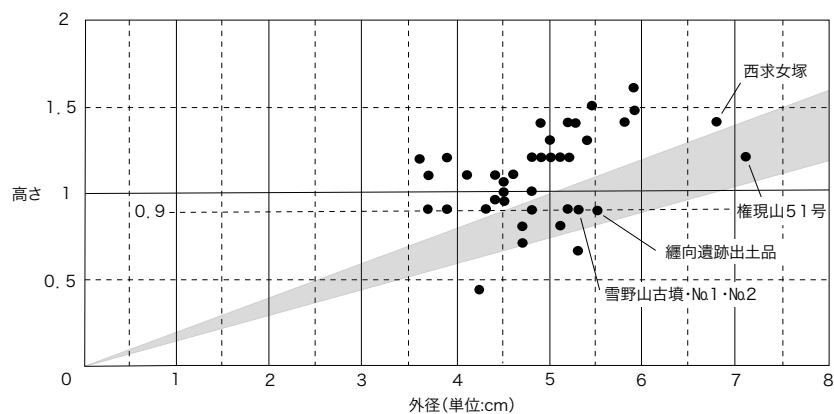


図4 紡錘車形石製品の寸法

里、茨城県常陸鏡塚5となる。このうち北陸系の材質1は真名井3（淡青緑色）で、他は材質2や滑石なのだが、相対的に高さの低い部類の一群が示す指標として理解することができるだろう。

もとより素材が削り貫き円盤であった場合には、先に

述べたとおり石釧・小型車輪石の寸法に規定される。しかしながら抽出された資料のなかには滑石製品も含まれており、素材は削り貫き円盤だけだったとは限らない。したがって高さ9mmという値は、紡錘車形石製品の制作者にとって、目測ないし感触によって推し量ったと推定

されるのだが、高さの目安として承知されていた可能性があるともいたい。

(2) 穿孔方向

纏向例は中央に開けられるべき穿孔の段階にはいたらないため、この問題の検討は不要だと思われるかもしれない。しかし本例が穿孔作業の直前の段階の未製品なのか、あるいはそもそも穿孔を意図しない特殊な製品だった可能性もあるのか否か、この点を絞り込んでおく必要がある。そのような意図でこの項目をたてた。

また紡錘車形石製品の製作工程に言及する論考も少ないので、この機会をとらえて中央孔の穿孔がいかなるものであるかを概観しつつ、今回の出土例をとらえ直してみたい。

結論をいうと、本例は穿孔の直前の段階でとどまった可能性をもつ。先に示した図3の集成図をみていただければ、穿孔は上面から下面に向けて施されている事例が多いことがわかる。下端面の穿孔部縁辺には、錐が抜けるさいの衝撃によって生じる細かな剥離痕が残る場合があり、図3-6（真名井2）の様相は、その剥離の状態を表している。その剥離痕を消し去る目的で下面の中央部を窪めたと判断できる資料が図3-2（会津大塚山）・4（宝来山）・5（真名井1）なのである。

さらに上端中央部には平坦面を残す資料が多いことにも注目していただきたい。このことは穿孔を上面から施すさいに錐先を据える、いわば作業面として平坦面が残された可能性の高いことを物語っている。したがって図3-3（寺戸大塚）・5（真名井1）・15（北和城南3）など上端中央部に平坦面を残さない資料については、穿孔完了後に溝を彫るか段を作出するかして、平坦面を加工したものだと理解できる。

このような紡錘車形石製品の全般的様相なので、それは根拠として十分な意味づけが可能であろう。すなわち纏向例の上端に残された平面方形を呈する平坦面は、外方に緩やかな斜面を成形したのち、穿孔をおこなう目的で残されたと判断できる。だから本例は、中央の穿孔を前提とした製作途上の未製品だといえる。

総じて今回の出土例は、前Ⅱ期に登場する紡錘車形石製品の古相的な特徴を備えている。さらに雪野山古墳例（前Ⅱ期）との近似は重要で、この種の石製品の出現期に本

例が該当する可能性は認めてもよいのではなかろうか。

V. 巴形石製品・銅製品との関係

(1) 石製品の類例との比較

以上の検討結果を基礎にして、では巴形石製品としての纏向例が、系譜上どのような評価が可能であるのかを検討する。まず年代観を再確認しておきたい。材質、対応する可能性のある石釧、寸法や造形上の特徴からみて、本例は前Ⅱ期からⅣ期までの間に限定できる。

いっぽう他の類例のうち紡錘車形石製品からの派生型だと判断できる資料としては山口県長光寺山古墳例、静岡県馬場平古墳例、埼玉県熊野神社古墳例があり、石釧からの派生型だと判断される資料としては、大阪府国分東大塚古墳例、同府乳ノ岡古墳例がある。

材質の問題を点検してみると、今列举した各地の類例は、私が実見したものはすべて材質2であり、写真判定にゆだねた資料についても材質2（および材質2に類した関東地方産の石材）だと判断できる。風化に耐性をもたない淡緑灰色凝灰岩（軟質グリーンタフ）を素材とするもので、風化のために比重は低く粒状感に富む材質なのである。

さらに紡錘車形石製品からの派生型といえる3古墳例をみると、すべての資料は高さ1cmを超える。外径については熊野神社例が7.0cmと5.8cm、馬場平例が5.9cm、長光寺山例が5.5cmで、寸法の点で纏向例に近似するのは前Ⅴ期の長光寺山例だといえる。

なおこれら巴形石製品の突起部の造作をみると、すべて右拗り（右傾）になる。ただし突起数は多様で、馬場平例は8突起、長光寺山例は変則的な6突起で中央部が窪む鋏形状のもの、熊野神社例は2点ともに5突起で、纏向例は4突起だから、円周上での分割法や突起の形状において近似するのを抽出すれば、8突起の馬場平古墳例となる。ようするに石製品のなかでは多様性が顕著である反面、資料数が少ないこともあって、現段階で形式的な整理は不可能だといわざるをえない。

ただし年代観について明確なのは、列举した各地の事例はすべて前Ⅴ期以降に限定されることであろう。さらに突起の様相をみる限り、右拗りであるという共通性を超えて、纏向例との間に直接の関連をみいだせそうな資

料はない。

(2) 巴形銅器との関係

その反面、纏向例が前Ⅳ期までに収まって前Ⅱ期への傾倒を示し、類例として列挙した事例が前Ⅴ期以降に収斂されるという事実は、別の側面からの重要性を帯びてくる。いうまでもなく巴形銅器との関係である。この青銅器は弥生後期に盛行し、一旦は消滅したかにみえて再度古墳時代の前期後半から中期初頭までのごく限定された期間に盛行する。古墳時代に生じる盛行期は、本稿での前Ⅴ期～中Ⅰ期にあたる²⁾。

では巴形銅器に照準を定めて巴形石製品側の消長を整理するとどうなるか。纏向例の年代的位置はみかけ上の消滅期間にあたり、他の事例は再盛行期に該当する。

このうち後者の再盛行期については、腕輪形石製品をはじめとする各種石製品の多量生産・多量消費の時期とも合致することが判明しており、巴形銅器との共伴事例も多い。著名なところでは静岡県松林山古墳（前Ⅶ期）、三重県石山古墳（前Ⅶ期）、奈良県佐味田宝塚古墳（前Ⅶ期）において各種石製品と巴形銅器との共伴が確認される。纏向例を除く他の事例は、まさにこの盛行期のなかで散見される資料なので、これらについては前Ⅴ期以降、巴形銅器とともに盛行期を迎える石製品の製作・消費動向の渦中において、それぞれの出現の経緯を読み解くことが可能かもしれない。

いっぽう纏向例については、弥生後期に盛行した巴形銅器との関係を検討する必要があるだろう。この点に関連して、田尻義了氏の論考は参考になる（田尻 2008）。そこで集成された弥生時代の巴形銅器36例の内訳をみると、外径10cm以上で截頭円錐座（体部）を主体とする大型品と、外径5～6cm前後で半球形座（半円形体部）をもつ小型品とに截然と識別できる。このことから本稿での検討対象は小型品に限定することが可能である。

さらに型式学的な観点からの絞り込みについてであるが、田尻氏の論考と赤塚次郎氏による型式分類（赤塚 2004）との両者を参照することによって、およそことが判明する。すなわち赤塚分類による「半球形座（広脚系）」の五村型と谷尻型、「半球形座（細脚系）」の佐保ソウダイ型に属する茨城県宮平遺跡例と鳥取県長瀬高浜例が抽出されてくる。これらは田尻氏により「非北部九

州産」として北部九州産とは別枠の資料群とされたものでもある。ようするに石製鋳型をもちいた巴形銅器製作技術とは異質な、土製鋳型をもちいたと推定される資料群のうちの小型品が比較検討対象となる。

ではこれらのなかから纏向例と近似するものが抽出できるだろうか。結論をいうと、すべて部分一致ではない。まず外径の点でいえば長瀬高浜例（外径5.58cm）が最近似例である。また右拗りの突起（脚）³⁾をもつ事例としては伝香川県出土例が安藤広道氏によって指摘されている（安藤 2003, 278 - 3・4）。このうち1点は5突起右拗りで外径は5.3cm、もう1点は5突起左拗りで外径は5.6cmをはかる。したがってサイズの点で纏向例との近似がある、とはいえるだろう。しかし現在の資料的状況において、4突起の製品は拗りの方向を問わず皆無である。

いっぽう前Ⅴ期に最盛行期を迎える古墳時代タイプは4突起右拗りが多数派を占め、定型化が進むとされる。ただし定型化は外径の拡大を伴って進むので、比較的小型のものでも7cm程度のもとなる。定型化前の比較的古相のものと判断可能な京都府鳥居前古墳のうちの1点は外径5.6cmをはかり、纏向例との近似が認められるものの、4突起左拗りである。

ようするに纏向例は、弥生時代後期に誕生する「非北部九州産」巴形銅器との近似を示しながら、突起数の減少と右拗りの誕生というふたつの後出的要素を備える点で、異色なのである⁴⁾。したがってこれ以上の推測は難しいといわざるをえない。

しかしそうはいつでも、発注者側の代表でもあったはずの倭政権の意向とこの間の型式変化とが無縁であったとは考えがたい。つまりどのような規格を工房側に発注するかは政権側の判断にゆだねられていたとみるのが自然である。したがって状況証拠にもとづく推論ではあるものの、纏向例をどのような性格の資料だと評価されるのかについて、ある程度の推論は許されるであろう。

このような判断に沿って、以下、本例は古墳時代タイプの巴形銅器が出現するまえに石製品工房側が製品化を試みた試作品ではなかったか、という旨の見解を示したい。

(3) 試作品であった可能性

この問題を考えるうえで、青銅製品と石製品は製作対

象となる品目の一部が重複し、製品の用途は部分的に競合する関係にあることは見逃せない。

巴形銅器も紡錘車形石製品も、どちらも装飾品であり、装飾法についても器面や布地への縫い付けとなる点で共通する。さらに巴形銅器は銅釦に起源をもつが、その突起はスিজガイの指状突起に由来する。紡錘車形石製品もイモガイの円盤形装飾品からの材質転換の産物である。双方ともに、いわゆる南海産の貝製品の特徴を組み入れることによって成立した装飾品なのである。

この関係を念頭におきながら紡錘車形石製品と巴形銅器の両者の消長を整理するとどうなるか。倭政権は前Ⅱ期からⅣ期までの間、装飾品としては前者に重点をおいた発注をおこない、Ⅴ期以降は後者に重点をおいた発注へのシフトをおこなった、ということになる。つまり政権の本拠地には、さまざまな財が各地から流入しストックされる環境にあり、そのなかから青銅器生産工房側へ向けられる品目と石製品生産工房側にゆだねられる品目とが随時取捨選択される仕組みがあったと考えるのが自然だろう。

このことと深く関連する事象だと私が推定するのは京都府芝ヶ原古墳出土の青銅製腕輪である。この2点の腕輪は、まだゴホウラ背面貝輪の材質転換を青銅器工房側にゆだねるか、このとき模索段階にあった石製品工房側へとゆだねるか、の最終決定が下される前の段階が倭政権側にあったこと、そのような発注者側の模索過程を証明するものと理解される（北條2013）。

このようにみえてくると、纏向例も芝ヶ原例と同様の脈絡のもとで理解することが許されるだろう。こちらは石製品工房側での試行段階にあって、おそらく紡錘車形石製品製作が本格化した時期に相当するのだろうが、そのような状況下、競合相手の伝統的製品を見据えた試作の一環として本例が生みだされた可能性を考えたい。いいかえると纏向例が弥生時代タイプの形態的特徴（型式）から古墳時代タイプのそれへと転換する過渡期的な様相を示すことは、模倣対象がそのような特性をすでに備えていたことを示唆するものといえる。ちょうど芝ヶ原例とは真逆の関係にある。

（4）今後に残された課題

以上のような推論なのだが、もちろん確証はない。纏



写真3 スিজガイ貝輪の復元実験品

向例の性格を絞り込むうえで今後に残された課題は、まず巴形銅器が古墳時代にどこで製作されたのかを解明することだろう。そのためには弥生時代タイプから古墳時代タイプへの型式変化の過程をもう少し子細に点検する必要がある。

読者はすでにお気づきのことと思うが、纏向例が巴形銅器における古墳時代タイプの主流であるところの4突起右拗りである事実を拾うと、本例の年代観には揺らぎが生じることになる。すなわち本例が前Ⅱ期までに収まるとみるより、より前Ⅴ期に接近させて考えたほうが無難だ、という見方を排除できないからである。私がおこなった分析作業を状況証拠として尊重していただいたとしても、論理上は前Ⅳ期相当とみるほうが妥当だという判断を許容する。だからこの問題を今後突き詰めるためにも、巴形銅器の型式分類をより進展させ、みかけ上の衰退期が意味するところを解明する作業が必須なのである。

なお巴形銅器における突起の拗り方向が一定しない現象については、やはりスিজガイに由来すると判断できるので、この点について最後に補足しておきたい。写真3は、私が実験制作したスিজガイ製腕輪（松林山タイプ）だが、6本の指状突起の拗りに注目すれば、右拗りが4本、左拗りが2本の構成であることがわかる。これは本貝種が写真の右手前方向に向けてサンゴ礁の海底を這う、という生態上の特性によるもので、突起は必然的に後方側に振れを生じることになる。

祖型にはこのような特性が備わっているために、それ

を青銅器の装飾に取り込んで造形上の均整を保ちながら表現するさいには、右拗りを採用するか左拗りを採用するかは二者択一と、突起数をいくつにするかの選択を常に迫られる。

つまり弥生時代タイプが左拗りを主流とするものの右拗りの製品を生み出した原因も、古墳時代タイプが右拗りを主体としながら左拗りを捨象しなかったことの原因についても、祖型自体の特性に引きずられつづけた結果であったとみた場合にのみ合理的な説明が可能なのである。突起の数についても、祖型を忠実に再現するか簡略化するかの選択肢と向き合いつづけた、その累積だったとみなす余地は充分にあるといえよう。

つまりこのことは、弥生時代にあっては古墳時代にあっては、巴形銅器の制作者ないし発注者は、祖型であるスイジガイを目の当たりにする環境にあったことを示唆するものであろう。そのように考えたとき、前Ⅴ期以降の巴形石製品の突起数が一定しないことの原因についても説明づけが可能になる。同様に纏向例が4突起右拗りである理由についても、必ずしも巴形銅器を媒介にした模倣の結果だとまでは断定しえないことになる。

すなわち祖型を目の前にした直接の模倣であっても、本製品の制作者は、ちょうど弥生時代の巴形銅器制作者が直面したことと同様の選択を迫られる場面があった可能性をもつといえる。本例が試作品であったと推定する場合には、今後このような問いとも向き合わなければならない。

以上、私は纏向例を古墳時代の前半、前Ⅳ期までの間に収まることは確実だと論じ、さらに前Ⅱ期にまでさかのぼる可能性もあること、すなわち古墳時代石製品の出現期に該当する可能性に言及した。もとより後段の所見については状況証拠の提示にとどまるので、今後変更されることもありうる。

なお纏向例の出土状況にかかわる評価については、本稿で示した暫定的な理解とも密接に関連するところであり、基礎作業を優先させた経緯もあって現時点ではまだ整理途上である。関連する先行研究としては高橋幸治氏の整理（高橋2010）があって魅力的なテーマでもあるのだが、この課題については機会を改めて論じることにはしたい。

【註記】

- 1) 今回抽出した資料群とは別に、前Ⅱ～Ⅲ期には北陸系の材質Ⅰの石釧として、高さ1.5cm前後、内孔径5.1～5.8cm前後までの幅をもった各種の石釧が出現する。実例としては奈良県桜井茶臼山古墳例や同県下池山古墳例、兵庫県へボン塚古墳例などがある。なお腕輪形石製品の内孔径のサイズが5.1～5.6cm程度のもので出現する背景については、本文中でも述べたとおり祖型貝輪に由来するものと考えられる。
- 2) 大賀編年では巴形銅器の消滅を前Ⅶ期におく。ただし兵庫県行者塚古墳例や山口県赤妻古墳例にみられる形態上の特徴を型式編年上どのように位置づけるべきかについて、私は現時点で成案をもたない。そのため、ここでは中Ⅰ期までの残存を想定しておく。
- 3) 巴形銅器の場合、突起は鉤や脚と呼ばれることが多い。しかし古段階の製品の鉤ないし脚の裏面に彫刻された綾杉文は、加藤俊平氏が双脚輪状文との比較点検を実施するなかで指摘するとおり、スイジガイの指状突起裏面に認められる縫合の表現である（加藤2010）。つまり鉤や脚はまちがいなくスイジガイの指状突起に由来する。この事実をふまえると、鉤や脚を突起と表記することは許容の範囲内であろう。したがって本稿では暫定的に鉤や脚を突起と呼び替える。
- 4) なお古墳時代タイプの巴形銅器が基本的に土製の鋳型をもちいたことについては岩本崇氏によって解明されている（岩本2013）。

【引用文献】

- 赤塚次郎 2004「弥生後期巴形銅器の研究」『地域と古文化』地域と古文化研究会
- 安藤広道 2003「弥生・古墳時代の各種青銅器」『考古資料大観 第6巻弥生・古墳時代－青銅・ガラス製品』小学館
- 岩本崇 2013「古墳出土巴形銅器の製作技術」岡内三眞編『技術と交流の考古学』早稲田大学
- 大賀克彦 2013「前期古墳の築造状況とその画期」『前期古墳からみた播磨』第13回播磨考古学研究集会実行委員会（編年表は北條芳隆2013「総論」『古墳時代の考古学』第4巻同成社に採録）
- 加藤俊平 2010「スイジガイ由来の器財と文様」『考古学研究』第57巻第1号
- 蒲原宏行 1987「石釧研究序説」『古墳文化の新視覚』雄山閣出版
- 河村好光 1986「碧玉製腕飾の成立」『北陸の考古学Ⅱ』石川県考古学会誌第32号
- 桜井市教育委員会 2013『纏向遺跡発掘調査概要報告書－トリイノ前地区における発掘調査－』桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書 第40集

高橋幸治 2010「腕輪形石製品の流通－集落出土品を中心に－」
『古代学研究』187号

田尻義了 2008「九州大学筑紫地区出土巴形土製鑄型の位置づけ－巴形銅器の分類と製作技法の検討－」『九州と東アジアの考古学－九州大学考古学研究室50周年記念論文集－（上巻）』九州大学

北條芳隆 1994a「鋏形石の型式学的研究」『考古学雑誌』第79巻第4号

北條芳隆 1994b「石川条里遺跡と腕輪形石製品」『中部高地の考古学』Ⅳ長野県考古学会

北條芳隆 1996「雪野山古墳の石製品」『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会

北條芳隆 2013「腕輪形石製品」『古墳時代の考古学第4巻－副葬品の型式と編年－』同成社

（なお個別古墳・遺跡出土例の出典については省略させていただく）

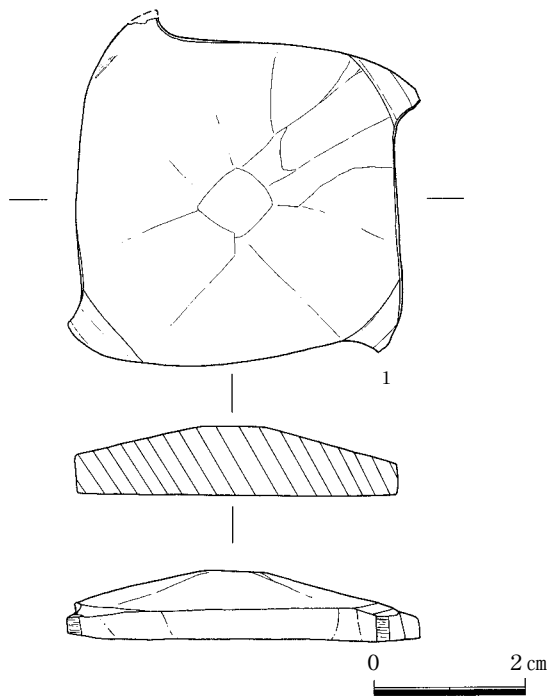


図5 纏向遺跡出土巴形石製品実測図（S=1/1）



写真4 纏向遺跡出土巴形石製品 表面



写真5 纏向遺跡出土巴形石製品 裏面

奈良県大淀町佐名伝 某家所蔵銅鐸の調査

橋本 輝彦

奥田 尚

奥山 誠義

目 次

I. はじめに	75
II. 銅鐸の出土地に関する聞き取り	76
III. 銅鐸の観察	76
IV. 舌状銅製品	77
V. 埋納状態の復原	77
VI. 銅鐸に付着した砂礫の分析	78
VII. 銅鐸の非破壊表面調査	80
VIII. まとめ	81

橋 本 輝 彦（はしもと てるひこ）

桜井市纏向学研究センター主任研究員

奥 田 尚（おくだ ひさし）

奈良県立橿原考古学研究所特別指導研究員
桜井市纏向学研究センター共同研究員

奥 山 誠 義（おくやま まさよし）

奈良県立橿原考古学研究所主任研究員
桜井市纏向学研究センター共同研究員

奈良県大淀町佐名伝 某家所蔵銅鐸の調査

橋本輝彦・奥田 尚・奥山誠義

I. はじめに

ここに報告する銅鐸は平成21年10月17日に桜井市内において開催された「森とふれあう市民の会」の例会において天理市在住のA氏より吉野郡大淀町大字佐名伝の民家に銅鐸らしき遺物があることを伺ったため、所有者をご紹介頂き10月20日に同僚の武田雄志氏とともに所有者宅をうかがい、実見させて頂いたものである。

観察の結果、資料は鈕を失い、鐸身も二つに破断したうえに大きく欠損する部分があるものの、本物の銅鐸であることが確認されたため、所有者の方から出土地やその経緯について聞き取りを行ったのち、預かり証を残して、桜井市立埋蔵文化財センターへと持ち帰り、記録の

作成と調査を行った。

本銅鐸は出土地やその他の経緯が明らかではないものの、後述する幾つかの理由において大字佐名伝付近で出土した可能性が高いと判断されることから、今後の研究の参考資料とするため、紙幅を借りて報告を行うこととしたい。

なお、今回の調査は将来の本格的な調査に備える予備的な調査と位置づけ、三次元計測による記録作成と、銅鐸に付着した土壌の分析、蛍光X線による銅鐸の成分分析を計画した。このうち土壌分析を橿原考古学研究所特別指導研究員 奥田尚氏に、成分分析を橿原考古学研究所 奥山誠義氏に依頼し、玉稿を頂いたほか、三次元計測については㈱アコードの全面的な協力を得た。記して感謝申し上げる。

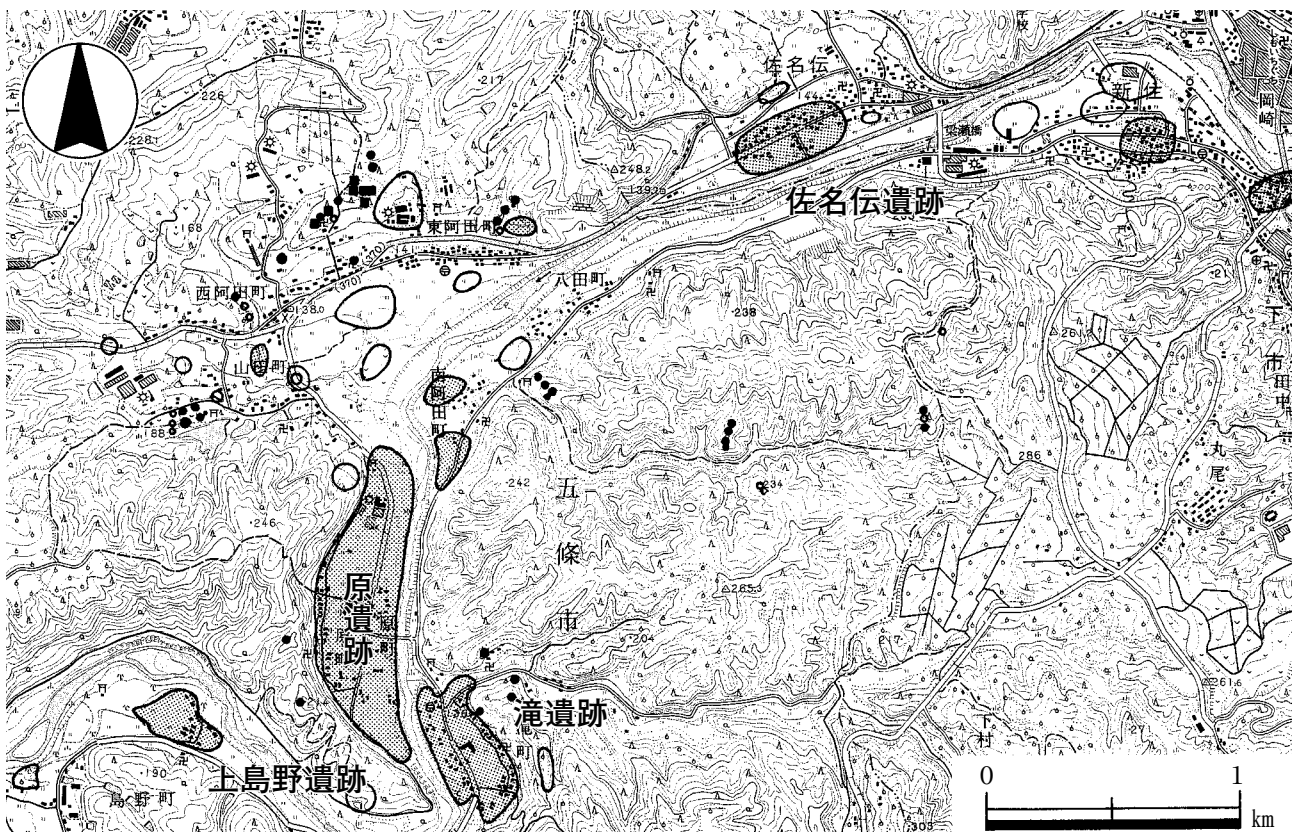


図1 佐名伝地区周辺の遺跡分布 (1/30,000) ※ 網掛けは弥生時代の遺跡を示す

Ⅱ．銅鐸の出土に関する聞き取り

本銅鐸に関する所有者からの聞き取りによると、出土地についての情報は全く伝わっておらず、現当主及び家人の方も家に銅鐸があることすら知らなかったとのことと、早くから所有者宅にあったもののようである。

また、銅鐸は離れ二階の物入れを掃除した時に出てきたとのことだが、その日時は不明である。報告者が銅鐸を確認した際には少量の中・近世の陶磁器や瓦質土器などとともに段ボール箱に収められており、平成6年付の新聞によって梱包された状態であったことから、家人によって再発見され、段ボール箱へと移されたのはこの時点のことであろうと思われる。

所有者宅は在地の素封家で、銅鐸が古くから代々伝世されてきた可能性も無いわけではないが、遺物の収納状況から推定するに近代以降になってから所有者宅に収蔵されたものではないかと考えている。

先代の御当主は明治30年代のお生まれで、教師をされておられたとのことである。この方は古美術収集等の趣味は無く、銅鐸を外部からわざわざ購入した可能性は低いと思われるとの家人の方の証言があることから、可能性としては識者であった先代の御当主が何れかから出土した銅鐸を譲り受けて保管されたか、あるいは佐名伝地内における所有地の何れかから出土したものを保管されるに至ったのではないかと考えるが、聞き取り調査からはその経緯を明らかにし得なかった。

Ⅲ．銅鐸の観察

(1) 全体の概観

残念ながら鈕および舞の全てを欠失しており、全体を知ることにはできないが、鐸身の様子から勘案すると鈕は扁平鈕式のものと考えられる。

図および写真で示したように便宜上、破損が少なく残りの良い面をA面、そしてその背面をB面としたが、B面の大半とA面向かって左側の鰭は欠損した状況にある。

これら欠損部の破面はそのほとんどが土壌の付着した古いもので、金属質が露出している部分も風化が進んでおり、近年の破損によるものではないことがうかがえる。

銅鐸の法量は残された鐸身の高さ37.5 cm、現存する部

分での最大幅は27.0 cm（欠損している鰭を復元すると約29.8 cm）、裾部の径は24.2 cm×約22.0 cm（復元）となる。

重量はA面に向かって右側の鰭のあるものが1400.1 gで、左側の鰭の無いものが1478.1 gの計2878.2 gであった。なお、いずれもクリーニングを実施していない若干土の付着した状態での重量である。

(2) 鐸身

現存高37.5 cmを測り、身の反りは僅かで、直線的な開きを持つ。A・B面ともに文様構成は6区袈裟襷文で、第1横帯から第4横帯までのすべての横帯を斜格子文と連続渦文に分割している点特徴的だが、B面の残存状況が極めて悪いため、ここではA面を中心に概要を見て行くこととしよう（図6、写真1）。

A面はほぼ完存する残りの良い面で、横帯は上部に斜格子文、下部には連続渦文が施されている。連続渦文はすべて左上がりに展開し、隣接する単位の文様が連結する連続渦文Z第Ⅱ種¹⁾とされるもので、第1横帯に8個、第2横帯に8個、第3横帯に9個、第4横帯に11個の連続渦文が認められる。これらの配置をみると、向かって右側の渦文と鰭との隙間の間隔は比較的揃っているのに対し、左側の鰭と渦文の間隔にはバラつきがある。施文は右から左へと行われたのであろうか。

さて、横帯のうち第1横帯は上部を欠損しており、幅3.6 cm以上、上段斜格子部幅1.8 cm以上、下段連続渦文部幅1.8 cmであったが、第2～4横帯はいずれも幅3.9 cmで、上段斜格子部幅1.9 cm、下段連続渦文部幅2.0 cmと均一に配置されている。そして、第4横帯の下には鋸歯文Rが26個配された幅1.5 cmの下辺横帯が、その更に下には幅6.5 mmの中に下辺横帯下界線が3条認められるが、条線と文様線の間に太さの差は認められない。

縦横帯の関係は横帯が優先されており、縦帯は斜格子で充填されている。横帯の区画線は単線だが、縦帯の区画線は2本で構成されている。区画線は安定した太さで精緻に刻まれているが、上左区の下辺部分にはズレが顕著な部分がある。

なお、A・B面ともに肉眼での観察では鋳掛や補刻などの補修痕跡は認められなかったが、A面の中縦帯中段から第4横帯下辺の鋸歯文帯部分にかけては断続的に范傷とみられる縦に長い傷跡が確認できる（写真13）。

(3) 鰭

A面向かって右側のみ残存し、上・中・下の3つの飾耳が存在する。飾耳は半円形で2個1対となり、飾耳の脚部は鈕を横断している。飾耳内の文様は「〇」形の条線を4ないし5条重ねたものと、中心部分が「M」形となるものがあるほか、「〇」を4条重ねていながら、条線が9条と数の合わない部分も存在し、その配置に法則性を認めることはできない(図6、7)。

鰭の幅は上段飾耳下部分で2.1cm、中段飾耳下で2.4cm、裾部では2.8cmを測り、A・B面ともに上～下段の飾耳間には7つの鋸歯文Rが配されているが、中段の飾耳部分では脚部が優先され、鋸歯文が切られている。また、下段飾耳から裾部にかけてはA面では4つの鋸歯文Rが、B面では3つの鋸歯文Rが配されており、鰭下端界線はA・B面ともに5条が確認できる。なお、鰭裾の高さは鐸身の裾とほぼ同じである。

(4) 内面突帯

裾から約3cmのところに内面突帯が2条めぐっている。上段の突帯は幅約1cm、下段の突帯は幅約1.2cmと下段がやや幅の広いもので、ともに高さは3～4mm程度である。断面の形状は頂部に丸みのある蒲鉾形ともいえるものだが、土壌と錆の付着が多く使用に伴うような摩滅は確認することができなかった(図7、写真5)。

(5) 型持孔

A面では鐸身上半に2つ、裾部に2つ、B面では鐸身上半に1つの型持孔が確認できる。A面鐸身上半のものは左右上区の下方、左右の縦帯寄りに位置し、径1.5cmの円形を呈する(図6、写真10、11)。B面鐸身上半のものは左上区の下方、左縦帯に近い位置に孔の外縁の4分の1ほどが残存しており(図7、写真12)、径1.5cm程度の円形のものと考えられる。裾の型持孔は台形を呈し、A面右下のものは上辺幅1.2cm、高さは左辺、右辺ともに1.3cmと均整のとれたものであるが(写真6、7)、左下の型持孔は上辺幅1.3cm、高さは左辺が1.6cm、右辺が1.2cmと孔の左右で裾からの高さに差が認められた(写真8、9)。

なお、鐸身上部の型持孔は土壌の付着や錆化の進行により、孔部の詳細な観察は困難であったが、裾部の型持孔の内面側には仕上げ時に施されたとみられる面取りの

痕跡を確認することができる。

IV. 舌状銅製品

銅鐸が収納されていた箱の中に異形の銅製品があった。この銅製品は6個の縦長のリングによって繋がれた長さ15.2cmの鎖の先端に長さ9.9cm、中央部の太さ1.6cmの舌状の銅製品が付くもので(図10、写真16～20)、鎖の付いた状態での重量は112.7gを測る。

舌状銅製品は形態的にはややエンタシス気味の円筒形の棒に、丸く曲げた太めの銅線の先端を挿入したかのように見えるものだが、錆と土壌の付着により、両者が接合されたものか、あるいは一体で鋳造されたものかは確認できなかった。また、鎖を構成するリングは太さ2mm前後、長さ6cm前後の青銅製の細い棒を丸く曲げてつくられたものではないかと考えるが、土壌と錆の付着が多く、肉眼観察では端部の合わせ目は確認できなかった。

これらの銅製品は一見、銅鐸に伴う舌とそれを吊るすための鎖のようにも見えるものだが、鎖状の銅製品の形態や舌の構造は他の類列とは明らかに異なるもので²⁾、弥生時代に製作されたとは判断し難い一方、後世のものとすれば破損して出土した銅鐸の為に舌をわざわざ誂えたとは考え難いことに加え、第Ⅵ章の奥田氏による分析で明らかにされているように、銅製品に付着している土壌が、銅鐸に付着している土壌と同種のものであることを考えると、この銅製品が弥生時代のものか否かは保留するとしても、銅鐸と共に出土した資料である可能性は強く考えられる状況にある。

いずれにせよ、この銅製品については多くの疑問が残る資料であり、その性格についての判断は、今後の類例の増加を待つこととしたいが、後考のためここでは銅鐸と共に保管されていた参考資料として報告しておく。

V. 埋納状態の復原

次に銅鐸に残された土壌の痕跡や、錆化の状況から銅鐸の埋納状況を復元しておくこととしたい。

埋納状況を考える上で手掛かりとなったのは鐸身の土壌の付着状況である。観察ではA面の内面に土壌の付着の差が顕著な部分があり、A面上左区の型持孔の右側あ

たりから裾部左下の型持孔中央部を結んだラインを境に土壌の色調や粒子の状態に差を認める事ができた。

写真2は鐸身B面の様子を写したもののだが、B面の鐸身の多くが失われており、A面内側の土壌の付着状況がよくわかる。写真右上の型持孔の左横あたりから右下に見える裾部の型持孔の真ん中あたりにかけてが付着した土壌の質に差が認められる部分で、この写真では向かって左側が埋納時に土壌が詰まっていた部分で、向かって右側は空洞であった可能性が高いと考えている。

このことは写真右側の鰭がすべて欠失していることと、鐸身の右下部分に発見時のものとみられる打撃痕と亀裂が横方向に走ることから追認されることで、観察結果をもとに埋納時の様子を推定すると、図2に示したように、鰭を上下に立て、頭（鈕側）を起し気味にして、土坑内で上部となる鐸身の面を水平に近い状態で埋納されていたものと考えられる。

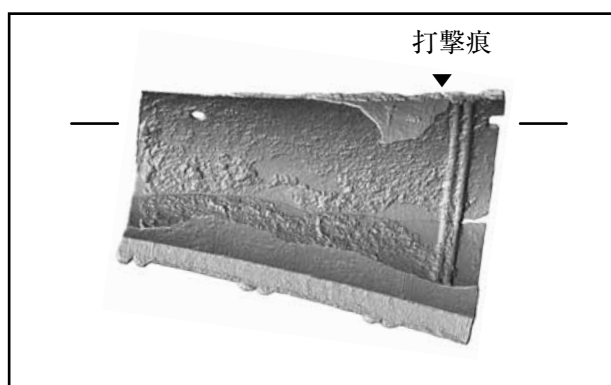


図2 埋納状況の復原案 (1/8)

なお、鐸身外面の観察ではA面向かって右側部分の方が全体的に鐸身表面の金属の質感がやや悪い上に、文様を構成する条線の剥落や膨れが進み、保存状況が悪い傾向が認められる。今回推定した埋納状況の復原からは埋納坑の下面にあたる部分がより錆化や劣化が進んでいるということになり、埋納時の鐸身の上下関係が錆や劣化の進行に影響を与えている可能性がある（写真3、4）。

VI. 銅鐸に付着した砂礫の分析

（1）はじめに

銅鐸は二つに割れて、一方には付着物がある。その付着の状態は出土時の様子を示していると判断される。また、舌状銅製品も出土している。銅鐸の付着物には腐食して

形成された緑青のようなものもあるが、ここでは付着した砂礫についてのみ観察した。銅鐸の鰭の括れ部に茅のような植物片や砂礫を含む土がみられ（写真14）、この土は出土地付近の土と推定される。また、銅鐸上部の舞との接点と考えられる付近の内側には灰白色の細粒砂と溶けたガラス状の物質がみられ、この砂粒は銅鐸制作時の鑄型の内型の一部と推定される（写真15）。

また、舌状銅製品にも土が付着している（写真16）。これらの土に含まれる砂礫の観察結果と砂礫が分布する地について述べる。

（2）砂礫について

鰭の括れ部に付着した土、銅鐸上部の内側に付着した土、舌に付着した土に含まれる砂礫について述べる。

①鰭の括れ部に付着した土

鰭の付け根の括れた部分に洗浄されていなく状態を示す土が付着している。土には砂礫粒と茅の表皮のような植物片が含まれている。基質はやや粘土質の土である。

観察した砂礫種 砂礫種はチャート、片岩、石英、長石、黒雲母である。チャートは色が淡赤褐色で、粒形が亜角、粒径が0.2～1.5mm、量がごくごく僅かである。片岩は赤褐色、粒形が亜円、粒径が1.5mm、泥質片岩である。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.5～1mm、量が僅かである。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.5～1mm、量がごく僅かである。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.2mm、量がごくごく僅かである。

このような砂礫は、石英・長石・黒雲母からなる花崗岩分布地や角閃石を含む閃緑岩分布地を後背地にもち、チャートや片岩の川原砂の供給を受ける地を示している。

②銅鐸上部の内側に付着した土

銅鐸内部の上部端に灰白色の細砂が付着しており、ガラス質の溶けた部分がこの砂を覆っているように見える。ガラス質の部分は銅鐸と密接な関係にあり、この細砂は銅鐸鑄造以前のもものと推定される。現象面での判断ではないが、銅鐸鑄造時の鑄型の内型の一部が残存していると推定される。この細砂は細粒砂岩で、火山噴出物である火砕流のようなものに起源をもつものであると推定される。

細粒砂岩 色は灰白色で、柔らかい。構成粒は、細粒で、石英、長石、黒雲母、輝石からなる。石英は無色透明、

粒状で、粒形が角、粒径が0.2～0.3mm、量が多い。長石は灰白色透明、粒形が角、粒径が0.2～0.3mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.2mm、量がごくごく僅かである。輝石は黒色透明、粒形が角、粒径が0.2～0.3mm、量がごく僅かである。

このような砂粒構成の砂は唐古・鍵遺跡から出土している銅鐸の鑄型の砂粒構成と似ている。

③舌状銅製品に付着した土

銅鐸と共に収納されていた舌状銅製品の表面に付着している土に含まれる砂礫について述べる。銅製品の表面の腐食の様子から判断すれば、付着物は出土地の土を示していると推定される。

土に含まれている砂礫種は石英、黒雲母、結晶片岩である。石英は無色透明、粒状で、粒形が亜角、粒径が0.3～0.5mm、量がごく僅かである。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.1～0.2mm、量がごく僅かである。結晶片岩は褐色、粒形が亜角、粒径が0.3～0.5mm、量がごくごく僅かである。

このような砂礫の分布地としては、黒雲母や石英を含むことから、花崗岩を後背地にもち、角が僅かに円くなった川原砂を示す結晶片岩の砂礫が供給される地が推定される。

(3) 砂礫の分布地について

銅鐸の所有宅が大淀町大字佐名伝にあること・聞き取りの結果をもとに近隣地の砂礫と銅鐸の鰭部と舌に付着した砂礫とを比較する。また、銅鐸の内面端部にみられる砂礫についても言及する。

紀ノ川流域の地質は紀ノ川の北方をほぼ並行する中央構造線を境にして大きく異なる。中央構造線の北側には花崗岩や閃緑岩の片麻状や圧砕を示す岩石、南側には泥質片岩や玄武岩質片岩のような結晶片岩が分布し、紀ノ川上流の川上村付近には玄武岩、チャート、石灰岩が広く分布する。このような地質の影響を受けて、上市から宇智川にかけての紀ノ川右岸の河岸段丘には花崗岩や閃緑岩起源の石英・黒雲母・角閃石、結晶片岩、チャートを含む砂礫層がみられる。また、宇智川右岸から和歌山にかけての紀ノ川右岸では和泉山脈を形成している和泉層群起源の流紋岩質岩と結晶片岩やチャートを含む砂礫層が分布する。紀ノ川の左岸では深成岩類起源の砂礫が見られず、チャート、玄武岩質岩、片岩を主とする砂礫

からなる。

出土した銅鐸の鰭部に付着した土に含まれる砂礫、舌の表面に付着した砂礫は、石英・長石・黒雲母からなる花崗岩起源の砂礫、角閃石を含む閃緑岩起源の砂礫、片岩やチャートの砂礫を含むことから、上市から宇智川にかけての紀ノ川右岸の段丘層の砂礫と推定される。

銅鐸の内型の一部と推定される細粒砂岩は、粒度が均質な角ばった石英や長石を主とし、黒雲母や輝石からなる。このような砂岩は火砕流堆積物の先端部分にみられる粒度が揃った部分と推定される。銅鐸が所在する地を中心に近距離の地で同様の砂礫が産する地を求めれば岩相的に奈良市の御蓋山東南にある蝙蝠窟付近の砂岩の岩相の一部に似ている。蝙蝠窟は春日砥石の採石跡と言われ、採掘時の鑿跡が残っている。春日大社境内にある明治28年の道標では、蝙蝠窟への案内がみられ、この時期に蝙蝠窟は既に観光地となっていたようである。遠地では神戸市西部に広く分布する神戸層群の凝灰岩にも同様の岩相を示すものがある。

(4) 砂礫から推定されること

鰭の括れ部付近に付着している土には炭化していない植物片と砂礫が含まれている。植物破片は表土に含まれるような破片で、第四紀の洪積層に含まれていたような様相を示さない。また、砂礫を含む土も自然堆積物のような様相はみられず、地表にみられるような土である。砂礫構成からみれば、上市から宇智川にかけての紀ノ川右岸付近の段丘の砂礫と推定される。

以上のことから、所有者が在住されている佐名伝付近は紀ノ川右岸の段丘に位置していること、鰭部に付着している土が出土地の土であるとすれば、佐名伝付近と鰭の括れ部の土の砂礫構成は似ていると判断される。

銅鐸の内側の上部に残存している細粒砂は、蝙蝠窟付近や神戸層群の砂岩の岩相の一部と似ている。佐名伝付近の土の砂礫構成とは全く異なる。現在は細粒砂となっているが、銅鐸制作時は細粒砂岩であったと推定される。このような岩相を示す砂岩は、唐古・鍵遺跡出土の銅鐸の鑄型、纏向遺跡出土の3世紀後半から4世紀前半にかけての砥石、東大寺の梵鐘鑄造遺構の石材等にみられる。砂質の凝灰岩で、可塑性と耐熱性があること、石英粒が多く、風化した長石のような部分があり研磨に適してい

ることなどから、鋳型の素材や砥石に使用されたと考えられる。

VII. 銅鐸の非破壊表面調査

(1) はじめに

表記資料の非破壊表面分析調査を実施した。調査は、携帯型の蛍光 X 線分析装置（詳細は後述）を用いた蛍光 X 線分析法による。この蛍光 X 線分析法は表面分析であるため資料表面にサビ等の生成物や土壌等の付着物などが存在する場合、測定結果はそれらの影響を受け、資料のオリジナルな材質を測定していることにはならない。しかしながら、非破壊的な手法によりおおよそ含まれている材料の判断が可能である。本調査の主眼は、「何が含まれているか」を知るための定性分析であり、各元素特有のスペクトルが確認できればその元素が「含まれている」という認識で調査した。使用機器は携帯型エネルギー分散型蛍光 X 線分析計（日本電子 INNOVX α -2000）であった。分析条件は管球 Mo（モリブデン）、管電圧最大 40KV、管電流 $5\mu\text{A}$ 、分析径最大 14mm、分析時間 200 秒、大気状態であった。

(2) 分析結果

資料の表面観察後に携帯型エネルギー分散型蛍光 X 線分析計による表面元素分析を実施した。測定は付着物等が少なく金属部分が露出していると思われる部分を選び、図 3 に示したように鐸身部分 8 カ所、舌 2 カ所、舌をつ

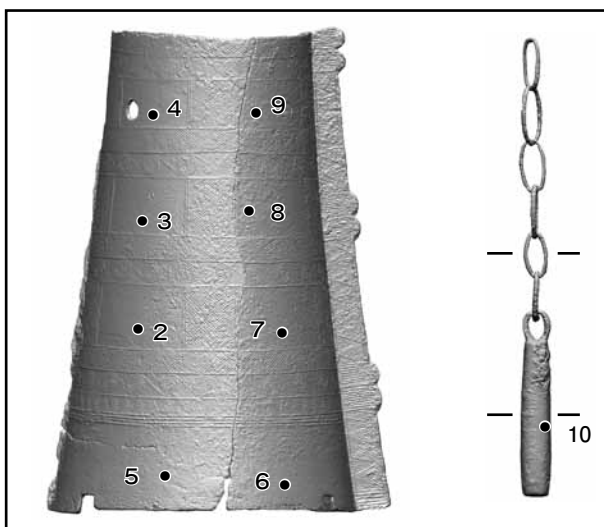


図 3 表面元素分析位置（11は10の裏面、12は鎖全体の一部）

なぐ鎖について実施した。なお、鎖は 6 つのリングをひとまとめに集合させ、その中心部分を測定した。

鐸身 8 カ所では銅 (Cu)、錫 (Sn)、鉛 (Pb) を顕著に検出しており、これらが主成分であることが確認できた。上記主成分のほか鉄 (Fe)、ヒ素 (As)、銀 (Ag) をわずかに検出した。一方、舌と舌をつなぐ鎖は銅 (Cu)、鉛 (Pb) を顕著に検出し、鉄 (Fe)、ヒ素 (As)、銀 (Ag)、錫 (Sn) をわずかに検出した。鉄 (Fe) は銅鐸表面に付着した土壌の影響、銀 (Ag) ならびにヒ素 (As) は主成分の銅 (Cu) と鉛 (Pb) をそれぞれ精練する際に不純物として残った成分であると考えられる。

本件では、強度の差異はあるがいずれの測定箇所からも銅 (Cu)、錫 (Sn)、鉛 (Pb) を検出しており青銅で作られた銅鐸であることが確認できた。携帯型の機器を用いており測定条件が必ずしも一定しないため定量的な議論は行えないが、舌と舌をつなぐ鎖では、鐸身で顕著に検出された錫 (Sn) の強度が低くなっていた点が注目される。

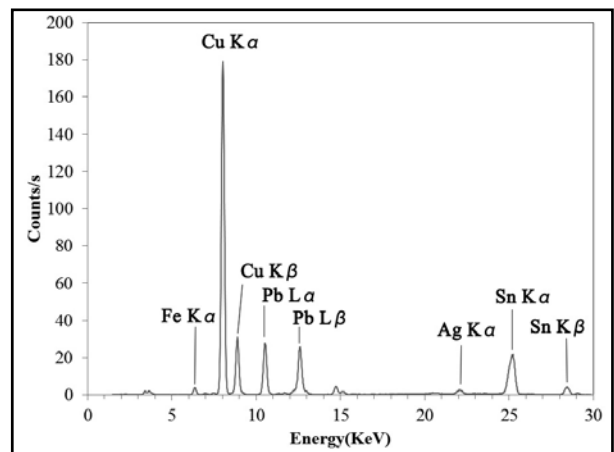


図 4 鐸身の測定結果 (No 3 地点)

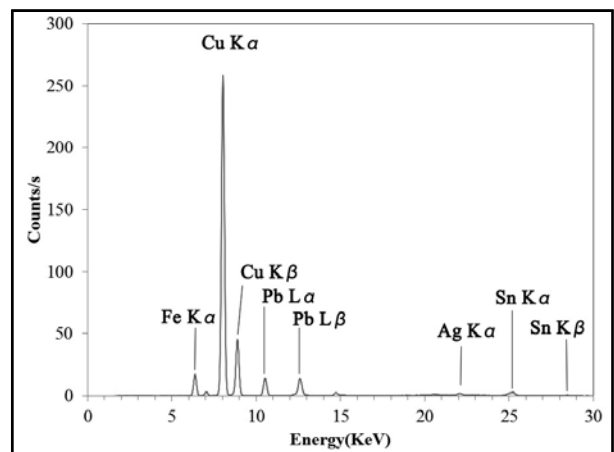


図 5 舌状銅製品の測定結果 (No10地点)

VIII. まとめ

第I章でも述べたように、今回の調査は将来の本格的な調査に備えた予備的調査と位置づけたもので、冶金学的な検討やX線撮影などの調査は行えなかったが、三次元計測や成分分析などの基礎的なデータに加え、埋納状況や出土地点を推定する幾つかの資料を得る事ができた。

特に銅鐸に付着した土壌の分析により吉野町上市から五條市宇智川にかけての紀ノ川右岸付近の段丘の砂礫が付着していることが確認されたことは、所有者からの聞き取り結果などと合わせ、本銅鐸が佐名伝地内において出土した可能性を強く示唆するものとして注目されよう。仮に、本銅鐸の出土地が佐名伝地内にあるとすれば、これまで紀ノ川流域で確認されている銅鐸の中では最も上流域から出土した銅鐸ということになる。

佐名伝周辺の遺跡に目を向けてみると、弥生時代の集落としては西方約2kmの地点に五條市原遺跡がある(図1)。原遺跡は弥生時代中期を中心とした遺跡で、墓域や居住域が確認されており、周辺では比較的まとまった規模の集落と考えられているが、拠点集落のような規模を持つ可能性は低いと見られている。また、銅鐸が残されていた佐名伝地区には佐名伝遺跡がある。本格的な調査の手は入っていないが、部分的な調査や採集によって確認された遺物の大半は縄文時代を中心とする時期のもので³⁾、現時点で拠点となるような弥生時代集落の存在を推定するのは困難である。

このような状況から、周辺の弥生時代集落の中に本銅鐸を所有した集団の候補を想定するのは困難であるが、この地域における調査や研究が手付かずといっても良い状況にあることを勘案すると、銅鐸を所有した集団の推定は今後の研究の進捗を待って考えることとしたい。

いずれにせよ、本銅鐸は紀ノ川流域に展開する遺跡群との関係で理解すべきと考えられ、五條・吉野地域の弥生時代集落が紀ノ川中・下流域の遺跡と強い結びつきを持つことを勘案すると、本銅鐸も紀ノ川ルートを通じて佐名伝地区にもたらされたものと考えたい。

このことは本銅鐸が鱗や横帯の連続渦文などの文様構成に若干の違いはあるものの、兵庫県神戸市出土の生駒銅鐸に近い形状を持つ「横帯分割型」の銅鐸であることから推定し得るもので⁴⁾、「横帯分割型」の銅鐸が奈

良盆地においては出土例が無いことや、難波洋三氏の研究により「横帯分割型」銅鐸の製作工人の拠点が瀬戸内東部に想定されていることなどからは⁵⁾、瀬戸内東部地域で製作された本銅鐸が大阪湾から和歌山、そして紀ノ川を遡って吉野へと伝わったことが想像されるものである。

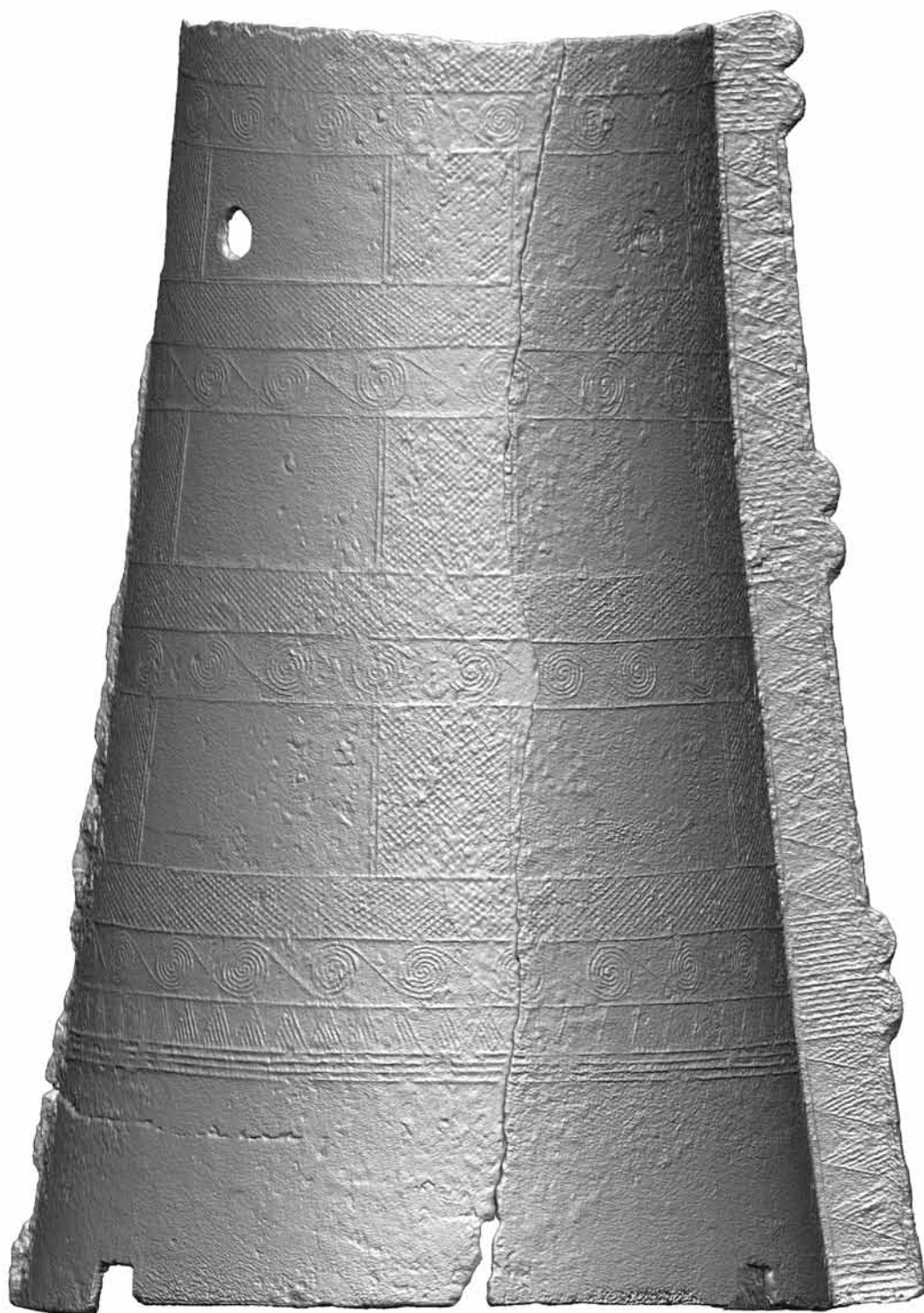
以上、佐名伝地区に伝わる銅鐸についてこれまでに実施した調査の成果について報告を行った。五條・吉野地域における弥生時代の遺跡群は、奈良盆地内部のそれとは立地や消長に大きな違いがあり、紀ノ川を介して和歌山地域との直接的な関係を持つなど、特色ある文化を形成した重要なものでありながら、発掘調査などの事例は非常に少なく、盆地内の遺跡群に比べて実態の解明が遅れている状況にある。今後さらに五條・吉野地域の遺跡群に対する調査や研究が進展することを期待するとともに、本報告が紀ノ川流域の集落研究に資するものとなることを願い報告を終えることとする。

最後になったが今回の報告にあたり、調査のきっかけを作っていただいたA氏、そして調査にご協力いただき資料の公表を快諾して頂いた所有者、ご家族の皆様に厚く御礼を申し上げる。

なお、本報告の構成は第VI章が奥田氏、第VII章が奥山氏からの分析報告を所収させて頂いたもので、その他の執筆は橋本によるものである。執筆にあたり原・佐名伝遺跡を含めた紀ノ川流域の遺跡の状況は五條市教育委員会 前坂尚志氏に御教示を得た。記して感謝申し上げる。

【註記】

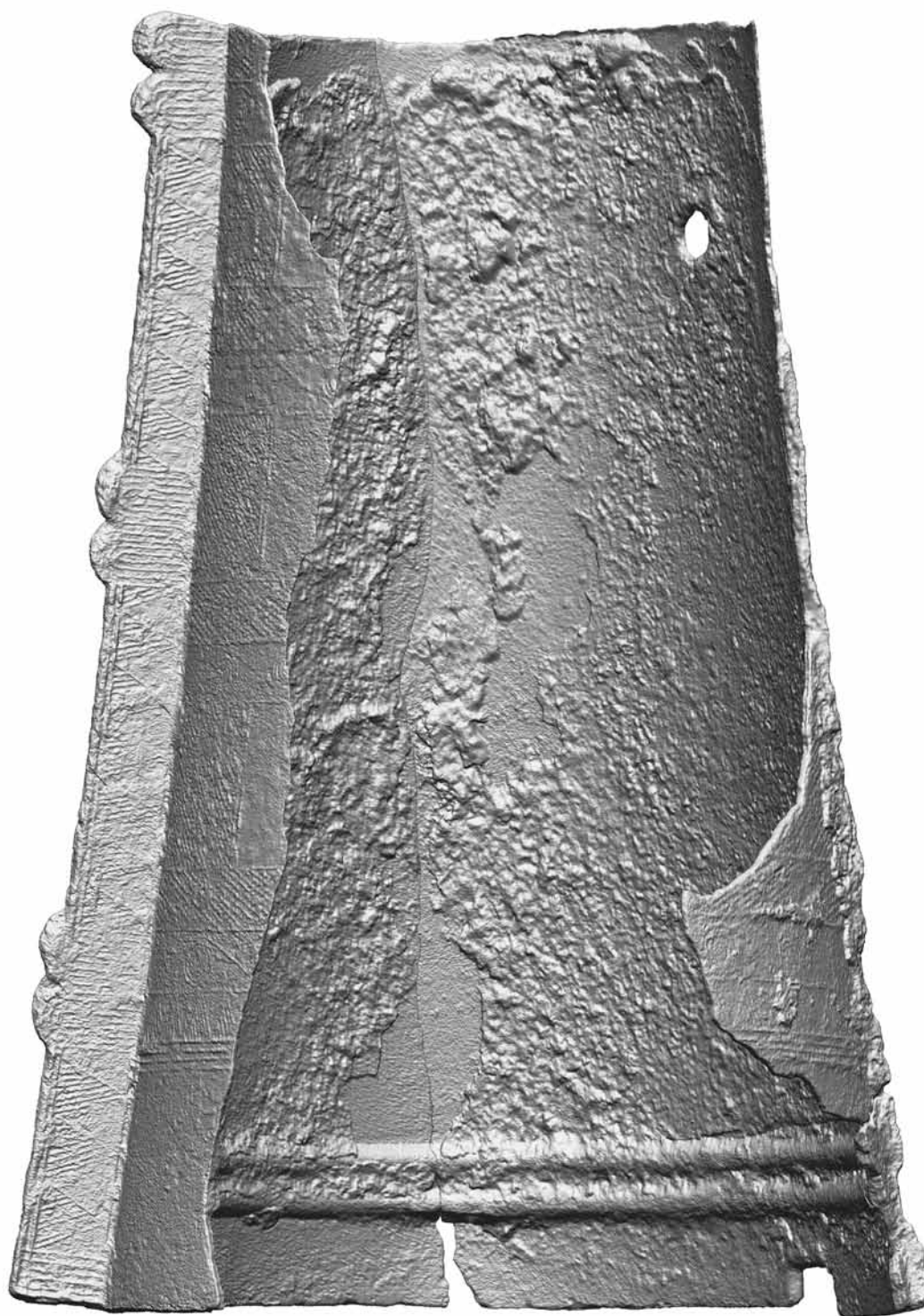
- 1) 銅鐸細部の名称は以下の文献に従った。
町田章・佐原真「和歌山市有本出土銅鐸」『和歌山県文化財学術調査報告書』第3冊 和歌山県教育委員会 1968年
角山徳幸・山崎修編『加茂岩倉遺跡』島根県教育委員会・加茂町教育委員会 2002年
- 2) 服部信博「銅鐸に伴う「舌」について」『研究紀要第3号』愛知県埋蔵文化財センター 2002年
- 3) 近藤奈央「V. 収集・保管資料」『市立五條文化博物館資料目録Ⅰ－堤昭二氏収集考古資料を中心に－』五條文化博物館 2004年
- 4) 生駒銅鐸の詳細については以下の文献を参考にした。
春成秀爾編『国立歴史民俗博物館資料図録6 弥生青銅器コレクション』国立歴史民俗博物館 2009年
- 5) 難波洋三『難波分類に基づく銅鐸出土地名表の作成』平成15年度～18年度科学研究費補助金基盤研究(C) 研究成果報告書 2007年



A 面



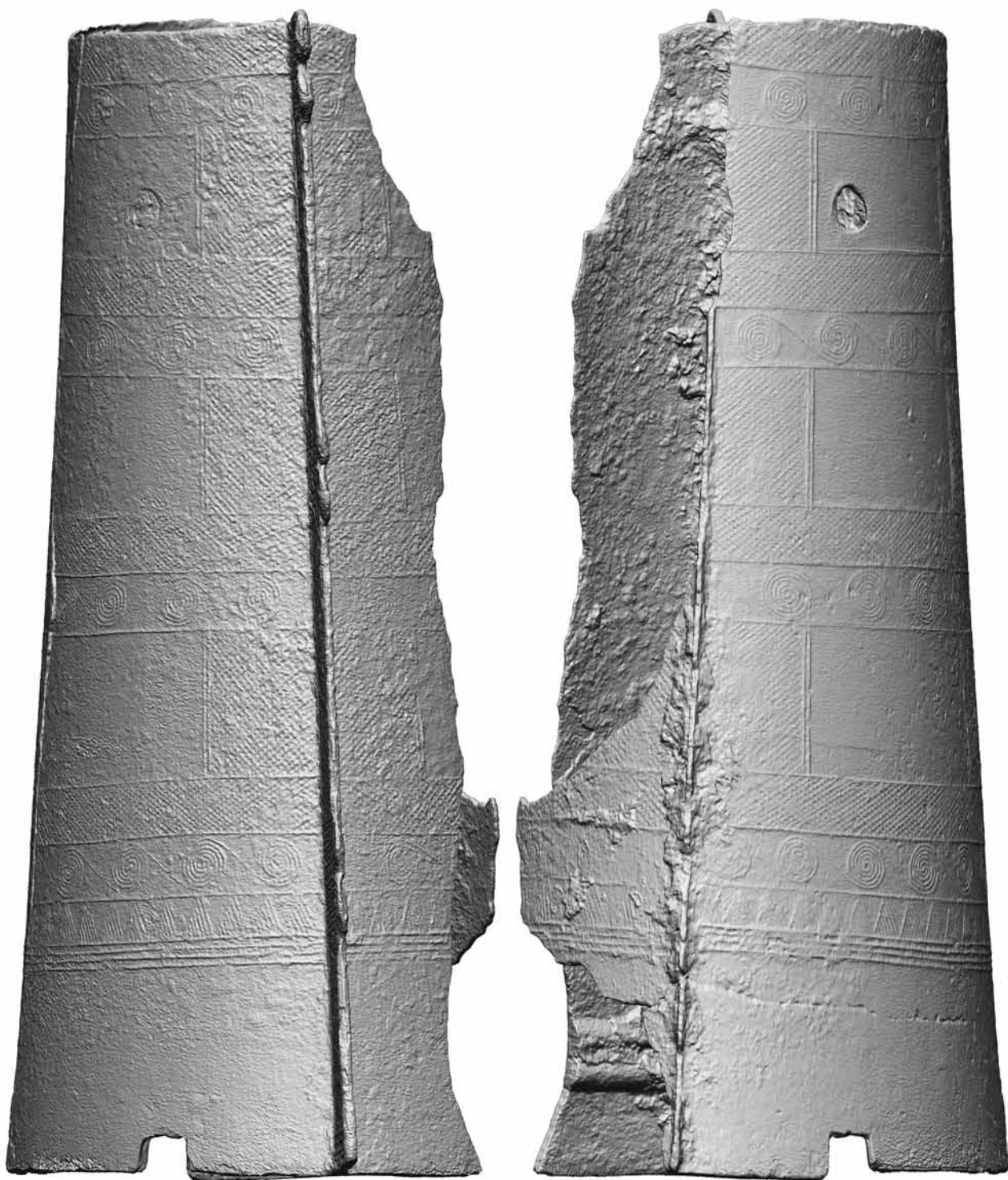
図6 三次元計測図1 (1/2)



B 面



図7 三次元計測図2 (1/2)



A - B 面

B - A 面



図8 三次元計測図3 (1/2)

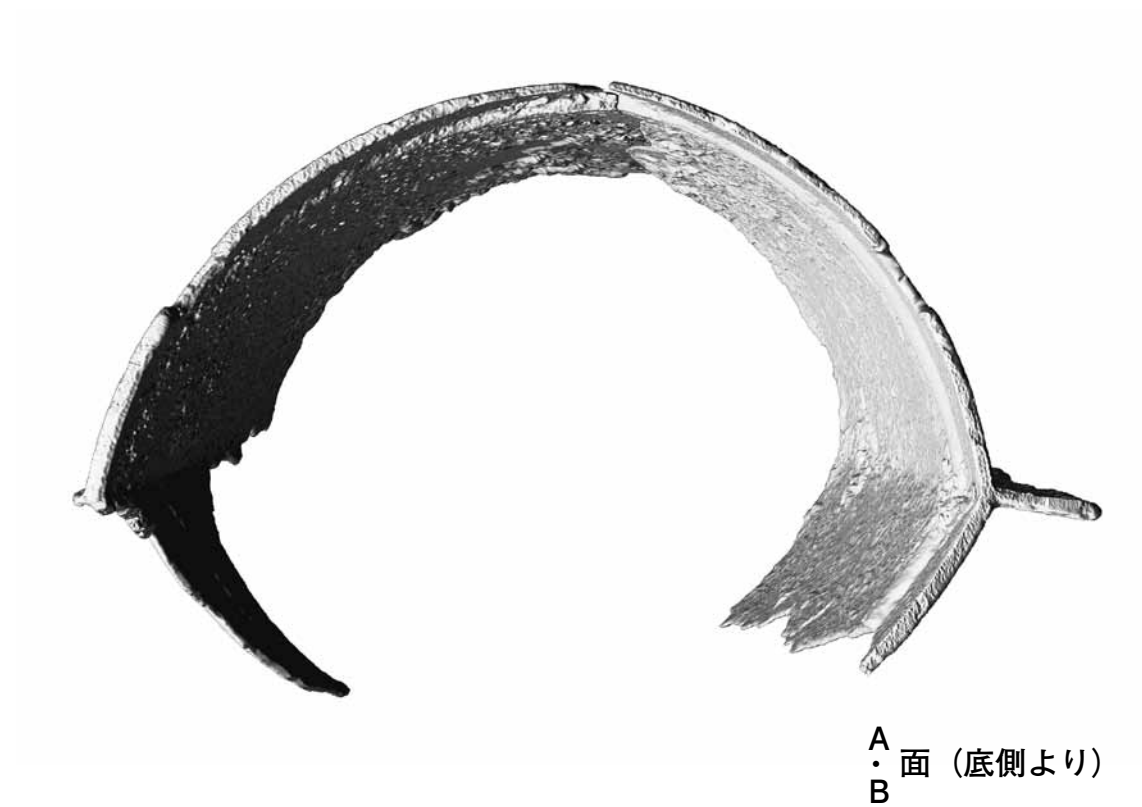
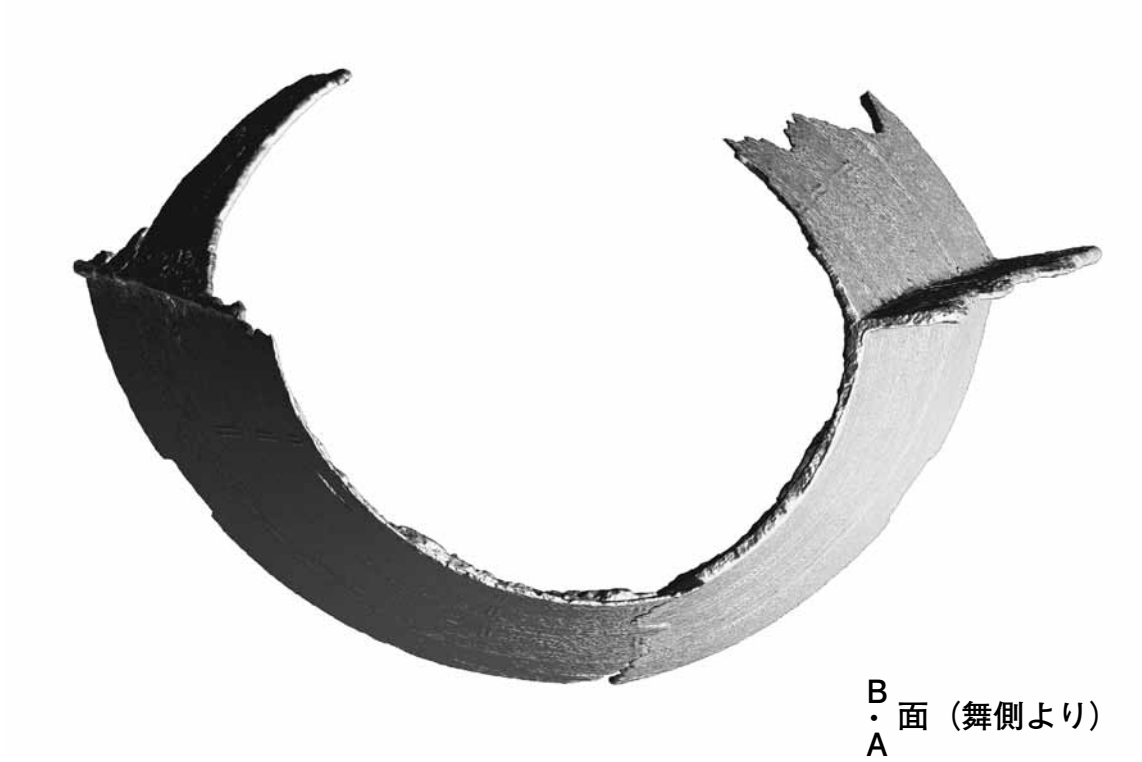
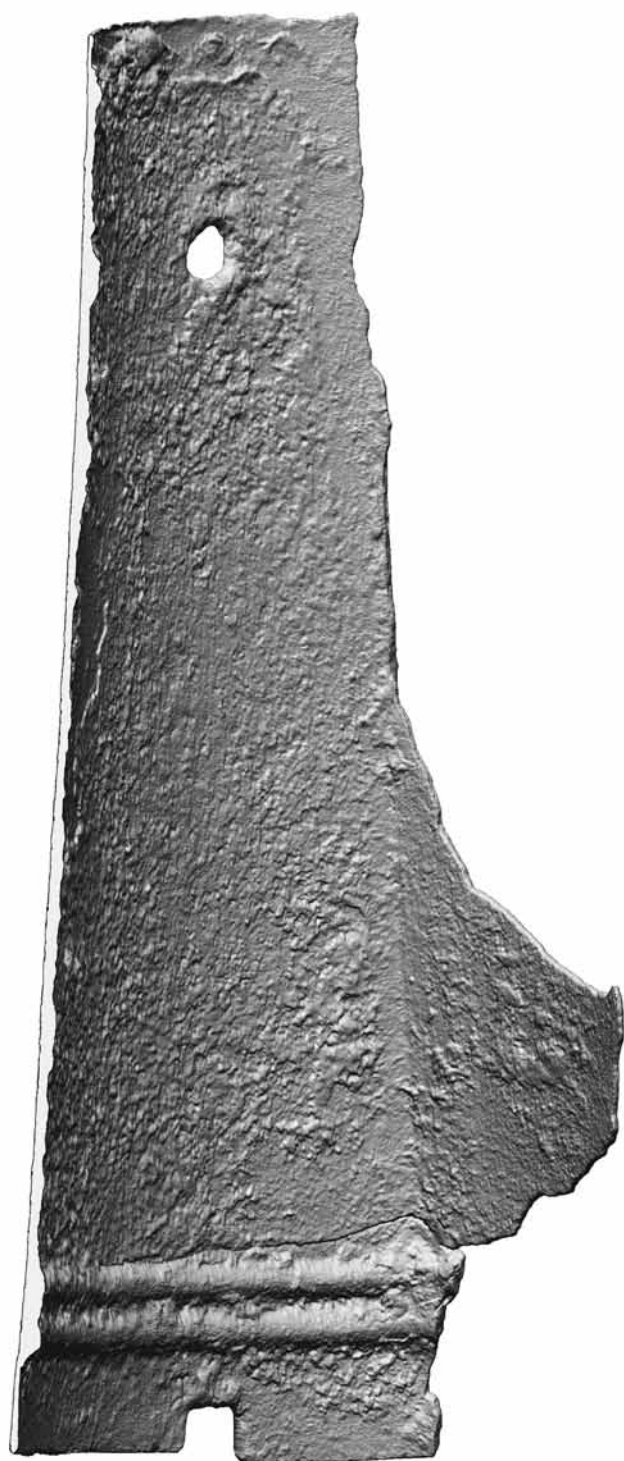


図9 三次元計測図4 (1/2)



A - B 面内面



舌状銅製品



図10 三次元計測図5 (1/2)



写真1 銅鐸A面



写真2 銅鐸B面



写真3 銅鐸A - B面



写真4 銅鐸B - A面



写真5 内面突帯の様子



写真6 A面裾部右下の型持孔



写真7 A面裾部右下の型持孔（内面）



写真8 A面裾部左下の型持孔



写真9 A面裾部左下の型持孔（内面）

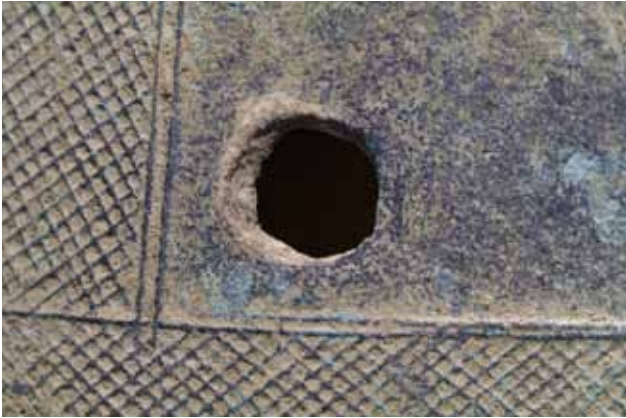


写真10 A面上左区の型持孔



写真11 A面上右区の型持孔



写真13 A面にみられる範傷



写真12 B面上左区の型持孔



写真14 B - A面鰭部に付着した土壌

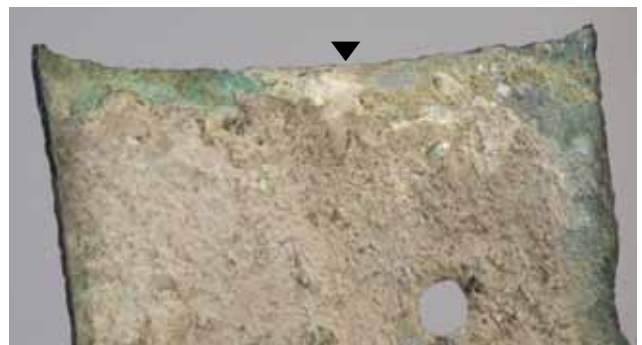


写真15 内面上部に付着する細粒砂岩



写真16 舌状銅製品と鎖状銅製品



写真17 舌状銅製品（裏面）



写真18 舌状銅製品先端部



写真19 舌状銅製品頭部



写真20 舌状銅製品頭部側面の状況

編集後記

○ 当研究センターの研究紀要である『纏向学研究』の第2号が刊行の運びとなりました。序文にもありますように、『纏向学研究』は、当研究センターの研究活動の骨子となるものです。研究紀要の編集と刊行はともかく継続こそが力とは思いつつも、原稿が集まり編集作業に入るまでは不安と緊張の連続でした。なんとか第2号を刊行にこぎ着けることができたのは、共同研究員の方々や外部研究者のご協力の賜とただただ頭の下がる思いです。

○ 今号の巻頭を飾った堀大介氏の「ケヒ」神についての論攷は、外部研究者の「纏向学」への応援にも準えられるもので、日本海沿岸に広く分布する「ケヒ」神信仰の背景と王権との関係を予察する興味深いものです。共同研究員でもある福永伸哉先生と近藤勝義先生による銅鐸破碎の金属学的研究は、人為的な破碎を科学的に裏付けるデータとして今後注目される成果と思います。児玉駿介氏には纏向遺跡の空間変遷を文化情報学の目から整理していただきました。修論の一部という習作的な面もありますが、今後の考古学論文としての展開に期待したいと思います。森所員の巴形石製品のノートは第176次調査で出土した「異形」ともいえる石製品への調査担当としての最初の意義付けです。この石製品については研究の第一人者である北條芳隆先生に石製品研究の視点から検討を行って頂き、今後の研究の課題についてお示し頂きました。橋本所員による新出銅鐸のノートも、特定型式の銅鐸の分布から製作地と製品移動の問題を考える上での新しい成果です。共同研究員の奥田尚先生、奥山誠義先生にも貴重な分析成果をいただきました。とくに伴出した銅舌については類例がないだけに今後、波紋を投げかけそうです。

○ 今号も結局、時間切れでベストな編集とはなりませんでした。次回からは余裕を持ったスケジュールで進めていきたいと思っております。とまれ、ひとまず無事に第2号の編集を終えられたことをよしとしたいと思います。

(寺澤薫・橋本輝彦)

纏向学研究センター研究紀要
纏向学研究 第2号

平成26年3月31日 発行

発行 桜井市纏向学研究センター
奈良県桜井市東田339番地

印刷 株式会社明新社
奈良市南京終町3丁目464番地



Proceedings of the
Research Center for Makimukugaku, Sakurai City.

STUDIES IN MAKIMUKUGAKU 2014 NO.2